

筑前 39 一本杉窯跡

所在地：朝倉郡東峰村小石原字中野（皿山）

経 営：

焼物名：小石原焼

年 代：〔1号窯〕17世紀後半

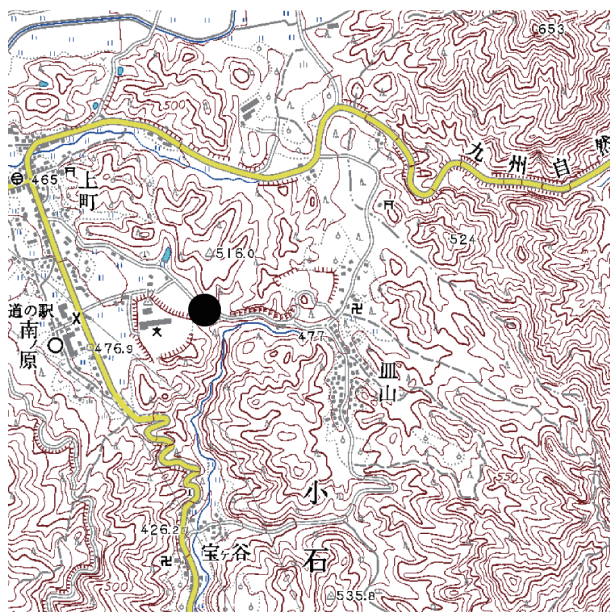
〔2号窯〕寛文9年(1669)～

現 況：公園（現地保存）・山林

備 考：〔1号窯〕村44、県550061として周知化

〔2号窯〕村45、県550062として周知化

県指定史跡



窯跡位置図 『小石原』(1/25,000)

小石原窯跡群が集中する大肥川上流域の内、最も下流の右岸に位置する。1号窯は試掘調査のみであるが、2号窯については小石原村教育委員会（現、東峰村教育委員会）により、平成4年(1992)に調査が行われた。

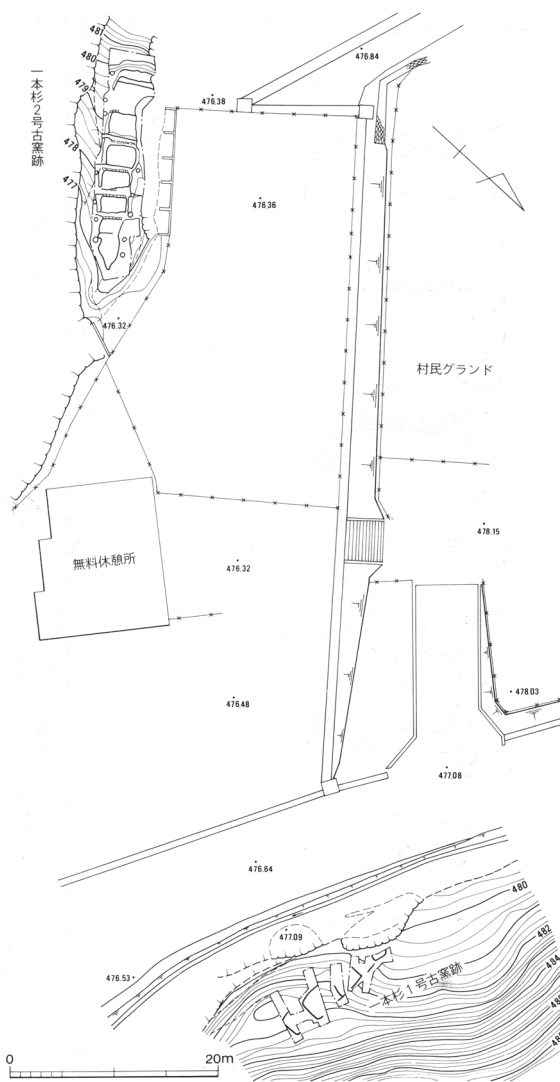
〔1号窯〕

奥壁だけにトンバイを使用し、天井・壁を粘土で構築する。他の窯跡とは異なる陶土を使用か。甕・鉢を中心とした陶器を焼く。窯幅が狭く、奥壁にだけトンバイを使用することから中野上の原窯跡より古い窯跡か。

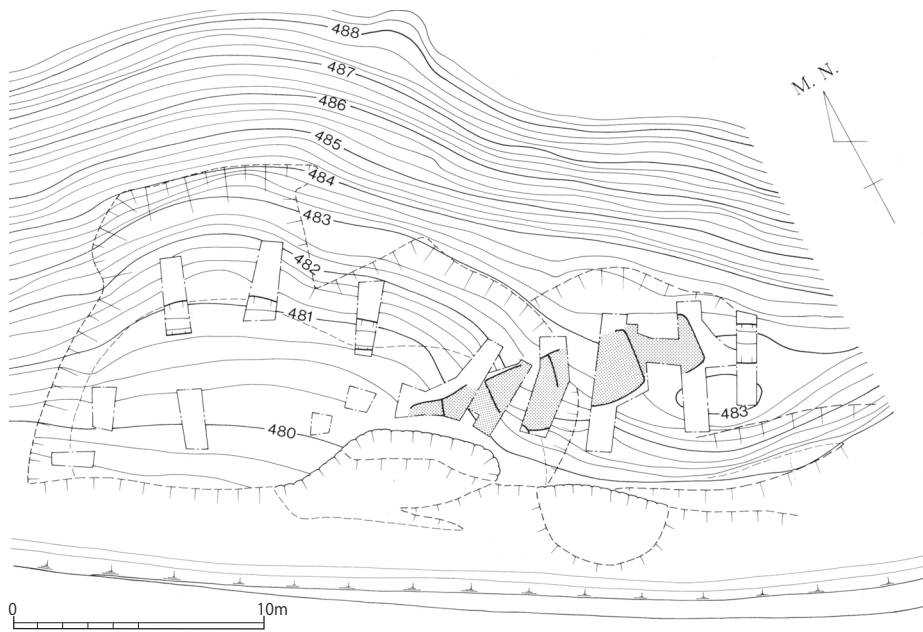
〔2号窯〕

全長約20mの階段状連房式登窯で、胴木間と6焼成室からなる。1号窯と同様に奥壁のみトンバイを使用し、天井・壁を粘土で構築する。窯南東側の谷に物原を形成する。出土品は陶器すり鉢が多くを占め、他に水指・片口・壺・甕・鉢と窯道具がある。

焼成室の第6室奥壁での考古地磁気年代法では1680±30年代の結果が出ている。出土品に肥前の影響が見られないことから、中野上の原窯に先行するものと考えられ、『高取歴代記録』による「寛文9年(1669)に小石原村の中野と云う所に新皿山が出来しより、高取八之丞が移り住む」に該当する窯かと考えられる。



一本杉窯跡



1号窯跡実測図 (1/300)



1号窯跡現況 (遠景)

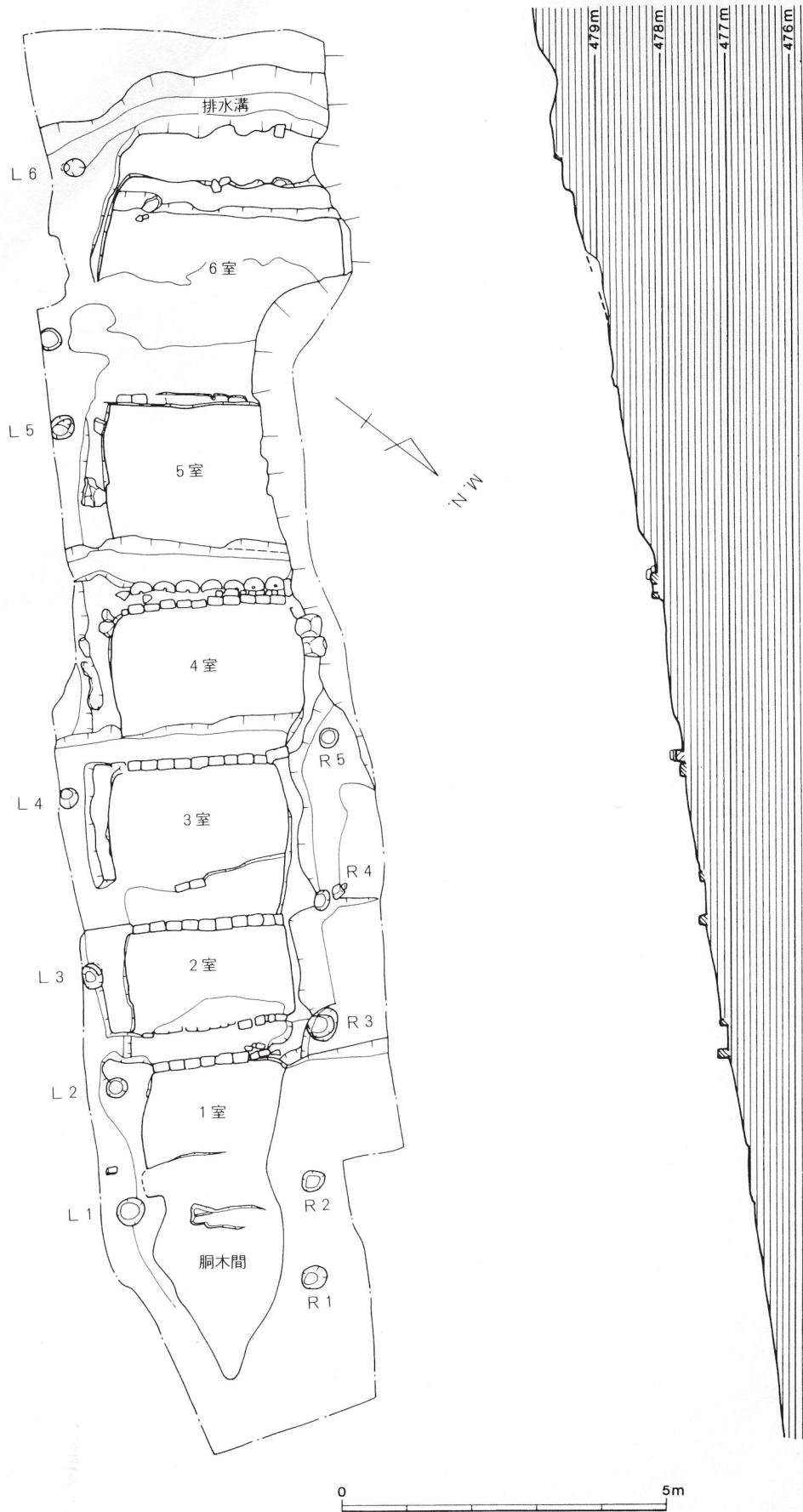


2号窯跡現況 (近景)



2号窯跡 (発掘調査時)

東峰村教育委員会提供



一本杉 2号窯跡実測図 (1/100)

筑前 40 十文字窯跡

所在地：朝倉郡東峰村小石原字中山

経 営：

焼物名：小石原焼

年 代：18 世紀中頃～後半

現 況：山林

備 考：村 46、県 550058 として周知化

小石原焼の窯元が集中する皿山地区から北に低い丘陵を挟んだ位置に単独で所在する。過去に梨園造成中に確認されたもので、多量の陶片が出土し、土瀝し場跡と思われる遺構もあったとされるが、窯本体は不明。村教育委員会にパンケース 1 箱の陶片が保管されており、発見当時の出土品とみられる。今回の現地踏査では、杉林に変わっており、数点の陶片が確認されたが、窯の存在に関する情報は得られなかった。

出土品は陶器の皿（小皿・大皿）、碗、鉢、すり鉢、土管があり、保管資料に窯道具は含まれていない。



窯跡位置図 『小石原』(1/25,000)



窯跡現況（遠景）

筑前 41 奥畑瓦窯跡

所在地：朝倉郡東峰村小石原字スキザキ

経営：民窯

焼物名：

年代：明治？

現況：山林

備考：村 15、県 550015 として周知化

小石原焼の窯元が集中する皿山地区から北西に離れた丘陵裾に単独で位置する。急傾斜から緩斜面に変化する付近に焼土が多数散布し、東側を中心に物原を形成している。

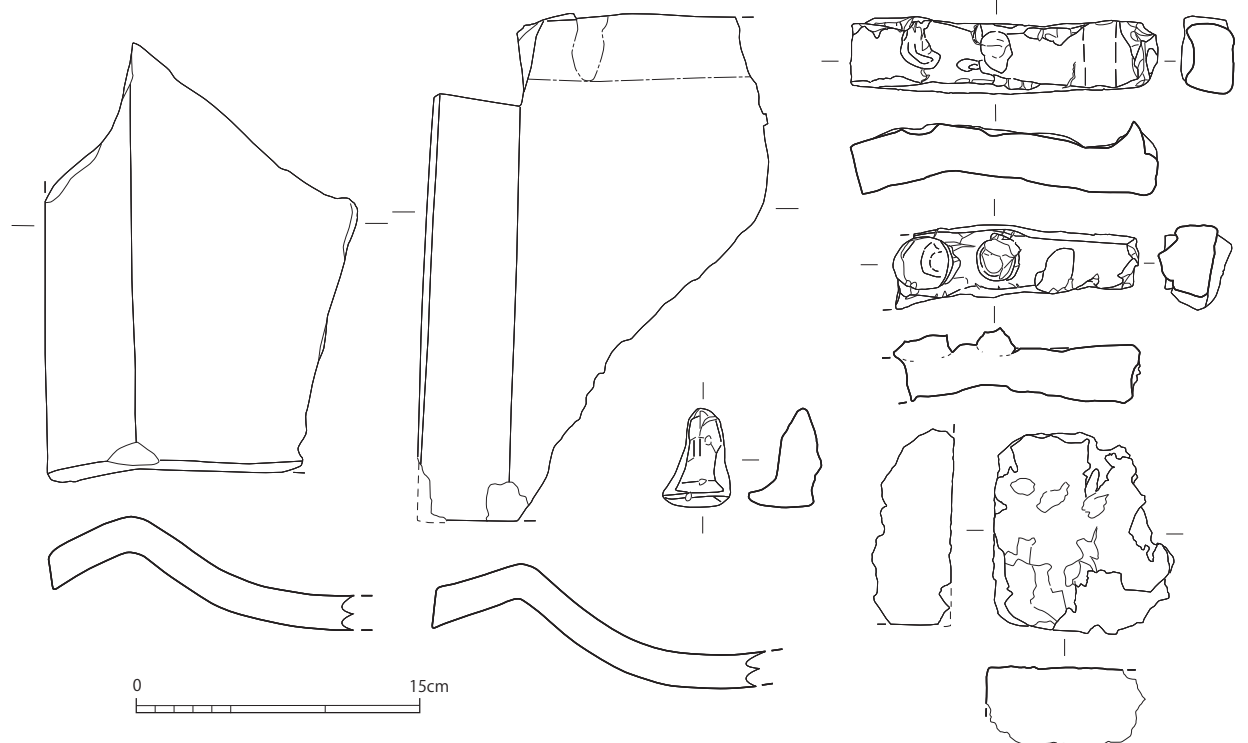
出土品は瓦と窯道具であり、陶器は焼かれていない。瓦は施釉する特色がある。



窯跡位置図 『小石原』 (1/25,000)



窯跡現況 (近景)



奥畑窯跡出土遺物実測図 (1/4)

九州歴史資料館所蔵

筑前 42 釜床窯跡

所在地：朝倉郡東峰村鼓

経 営：福岡藩

焼物名：高取焼

年 代：〔1号窯〕寛文5年(1665)～元禄年間

〔2号窯〕天保6年(1835)～明治

現 況：現地保存

備 考：1号窯 村95、県550050として周知化
県指定史跡

2号窯 村96、県550051として周知化

〔1号窯〕

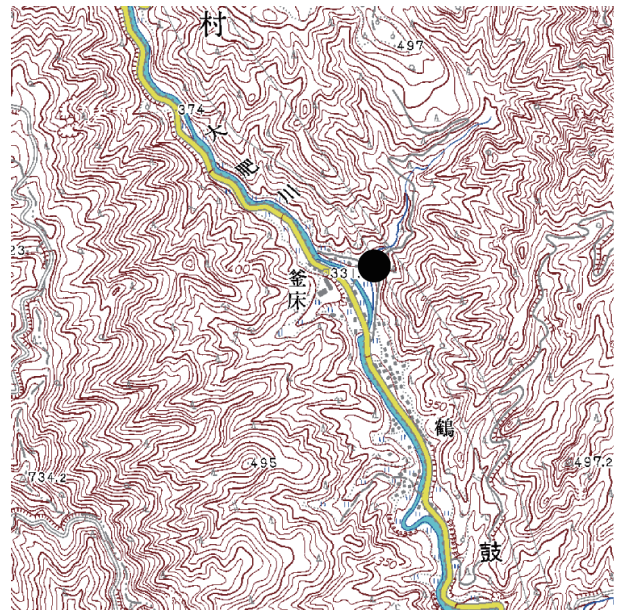
御用窯を営んだ高取焼2代八蔵貞明が寛文5年(1665)(寛文7年の記録もあり)に白旗山窯から移して活動した窯である。貞享年間(1684～88)に大鋸谷(福岡市)を開窯したが、八蔵は鼓から通い御用を勤めたとされる。その後、元禄17年(1704)頃まで焼き続けられた。

窯は大肥川が流れる溪谷に位置し、周辺は急峻な山々が連なる。1号窯は急な尾根線上にあり、2号窯は小河川を挟んだ丘陵裾にある。戦前、高取家が木材搬出路を掘削した際に確認され、多量の陶器片とトンバイが採集された。『高取歴代記録』によると窯は「居宅より丑方に当り山の尾の先也」や「東乃方及山の尾先」と記載される。

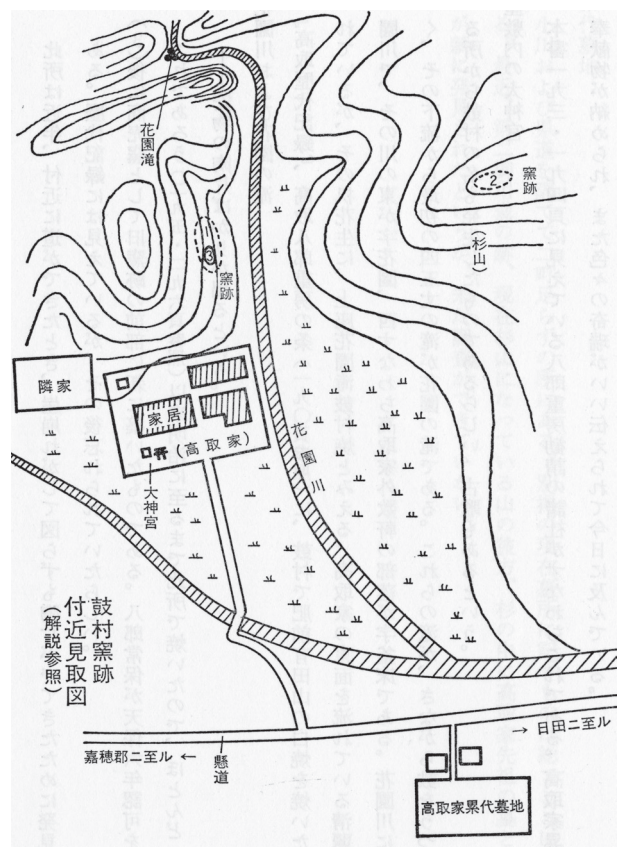
窯の中央は掘削され、さらに前面は崩落のため胴木間や焼成室の一部を欠損しているが、調査では6室を確認した。出土品は茶入を中心に茶器が主体をなす。またハマやサヤ鉢等の窯道具が出土した。考古地磁気推定年代によると最終焼成は1710±30年という結果がでている。

〔2号窯〕

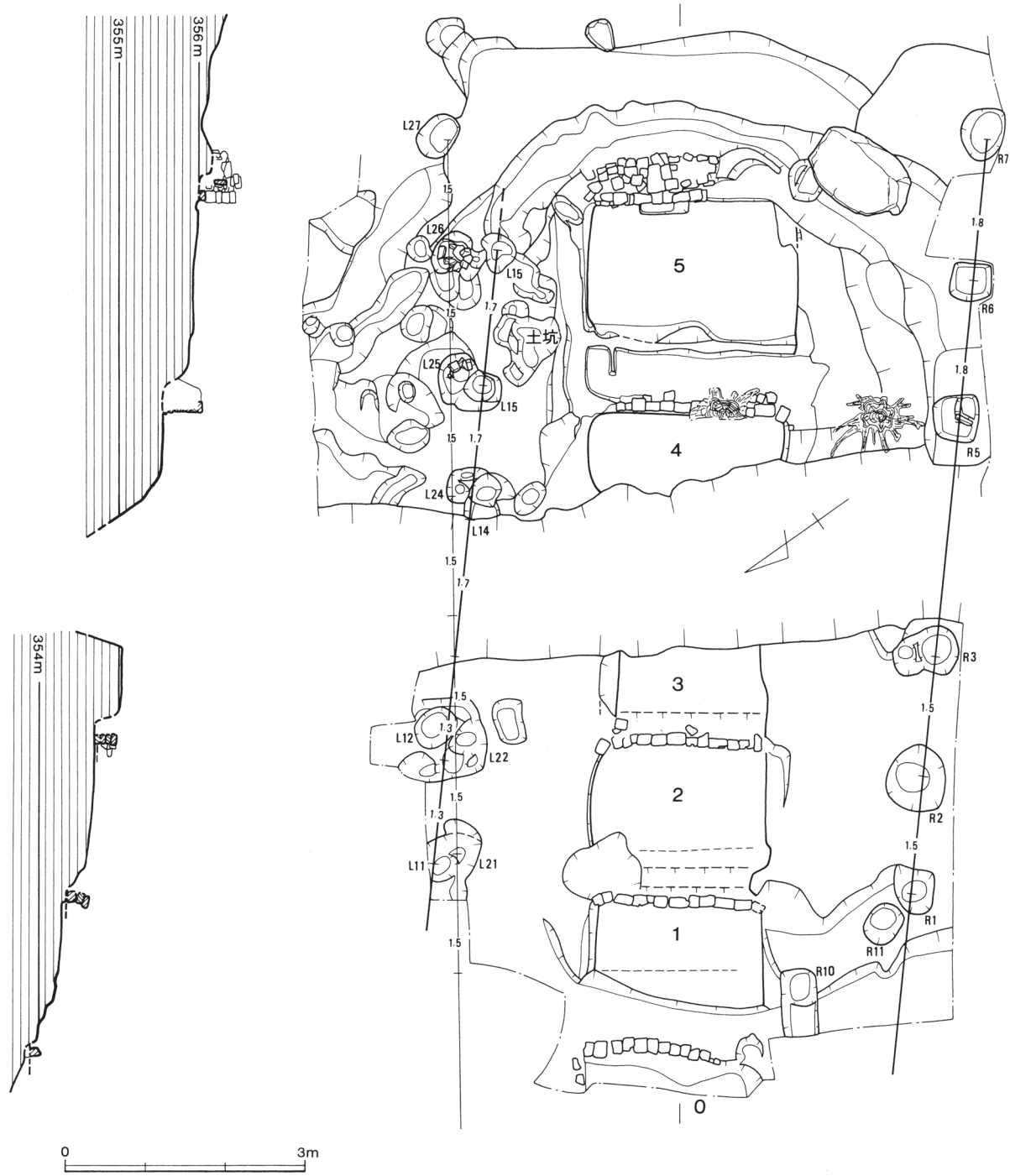
8代高取八郎常保が天保6年(1835)に認可を願い出て築窯したもので、明治まで小石原焼風のを焼いたとされる。初代高取八山夫妻の墓が移築されている付近と想定される。



窯跡位置図 『小石原』(1/25,000)



窯跡付近見取図 「高取家文書」



釜床1号窯跡実測図 (1/80)



1号窯跡現況（近景）



2号窯跡現況（近景）



1号窯跡（発掘調査時）

東峰村教育委員会提供

[天照太神宮]

高取家の敷地内にある。『筑前国続風土記付録』『筑前国続風土記拾遺』『天照太神宮御鎮座之記』では、社は延宝9年(1681)に2代高取八蔵貞明が、高取家が鼓に移り住むまでに営んできた所の神（大行事神社・彦山大権現・撃鼓大権現・天照太神宮・近津大明神・福地大権現・小鳥大明神）を勧請して建立したとある。



高取八山夫妻の墓



天照太神宮

筑前 46 三並ヒエデ窯跡

所在地：朝倉郡筑前町三並

経営：民窯か

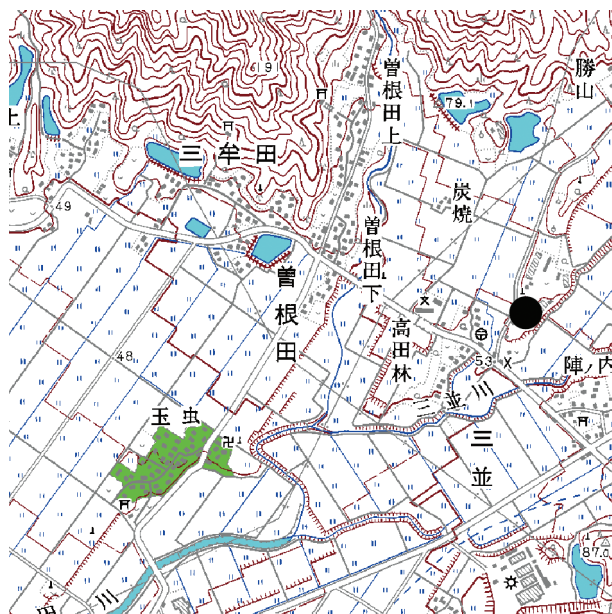
焼物名：

年代：19世紀

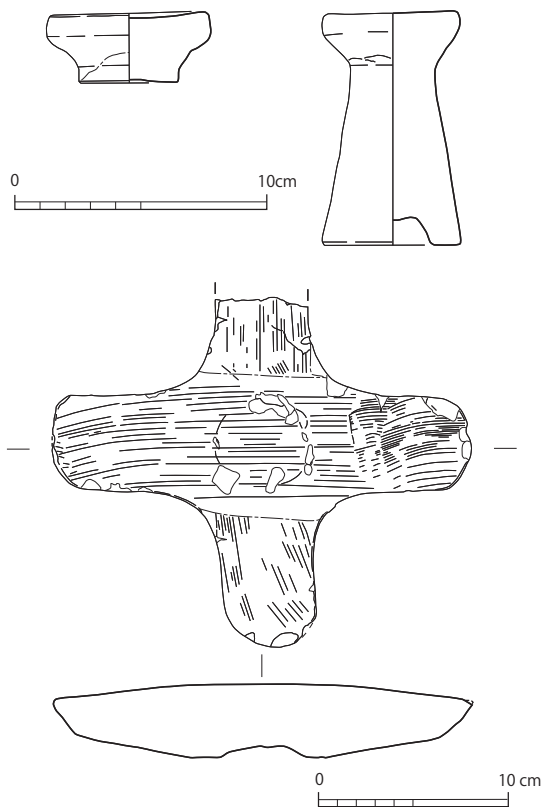
現況：宅地

三並ヒエデ窯跡出土銅戈と一緒に甘木歴史資料館に窯道具が保管されている。出土地は標高約60mの緩斜面に位置するが、圃場整備が行われたこともあり窯跡は確認できず、陶片等も採取できなかった。

保管されている出土品はトチンとハマであり、焼成された製品は不明である。



窯跡位置図 『二日市』(1/25,000)



三並ヒエデ窯跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)

甘木歴史資料館所蔵



窯跡推定地現況 (遠景)

筑前 47 浄満寺窯跡

所在地：朝倉市長谷山

経 営：秋月藩

焼物名：

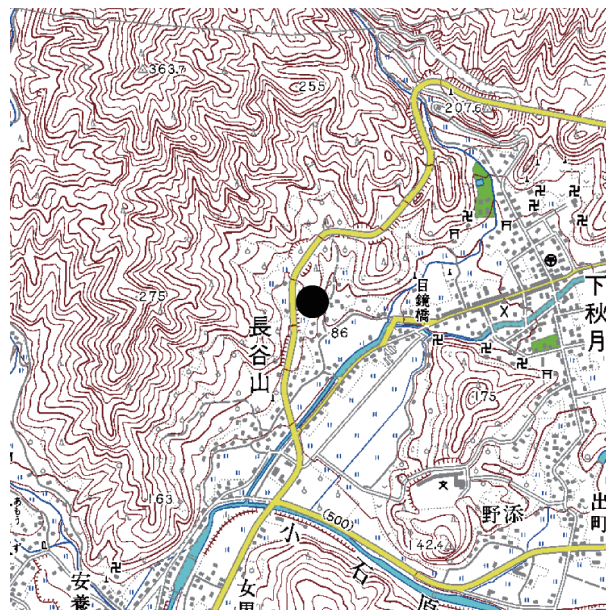
年 代：18 世紀中葉～ 18 世紀後半

現 況：山林

秋月藩士の平田望春が天保 5 年 (1834) に記した『望春随筆』に、宝暦年間の末から明和年間の初めまで焼いたと記される。

秋月城下を見下ろす標高約 110 m の尾根上に長さ約 14 m、幅約 3 m の範囲で窯跡を確認した。周辺は削平を受けていて、露出した土層断面から厚さ約 0.5 m の床面が、階段状に見える。おそらく 3 室以上からなる登窯かとみられる。

南側の斜面からは素焼きの皿・すり鉢・甕等の陶器やトチン・ハマ等の窯道具が採取されている。



窯跡位置図 『甘木』 (1/25,000)



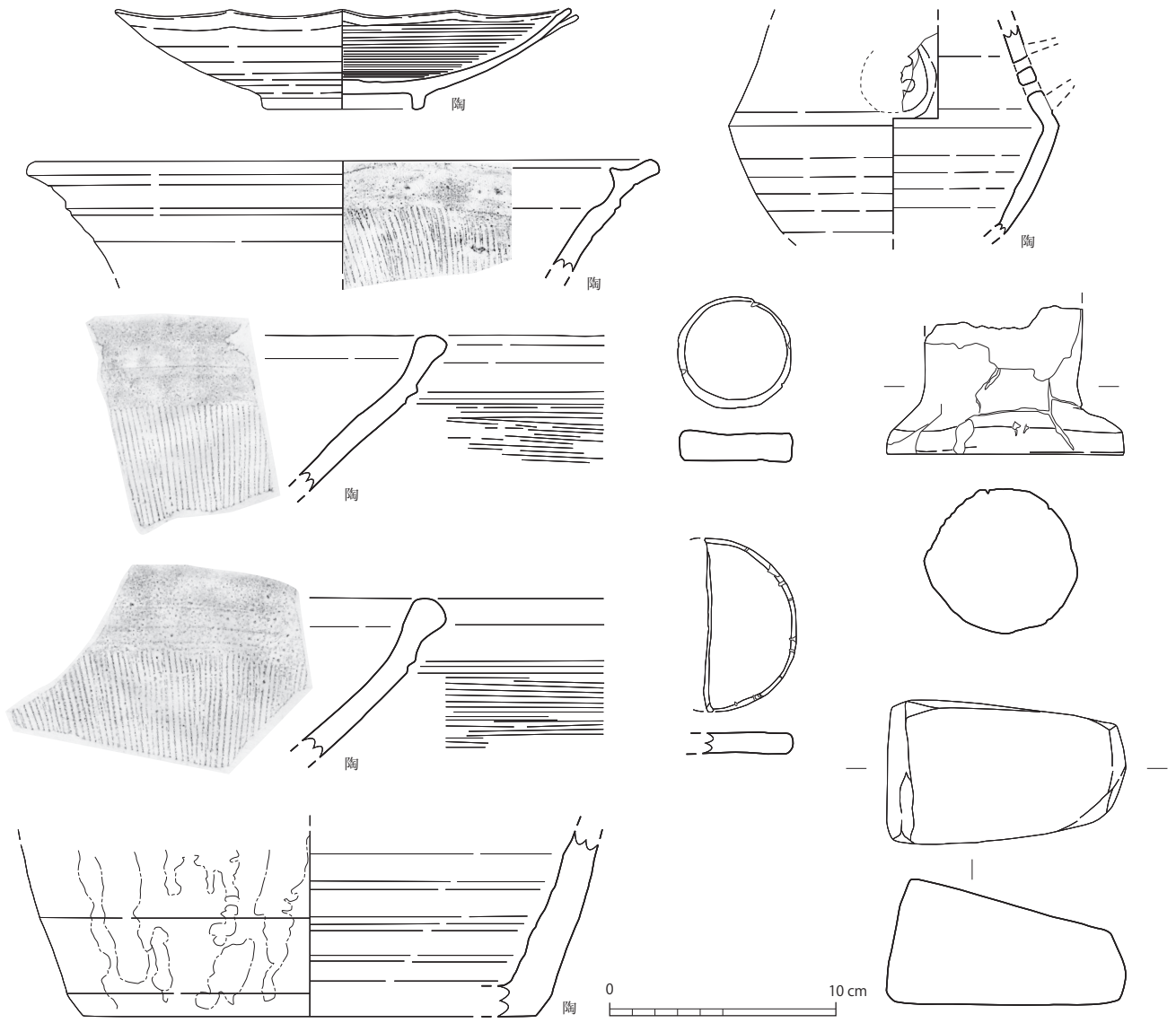
窯跡現況 (遠景)



窯跡現況 (近景)



窯跡現況 (近景)



浄満寺窯跡出土遺物実測図（1 / 3）

朝倉市教育委員会所蔵



浄満寺窯跡出土遺物

筑前 48 野鳥窯跡

所在地：朝倉市秋月野鳥

経 営：秋月藩

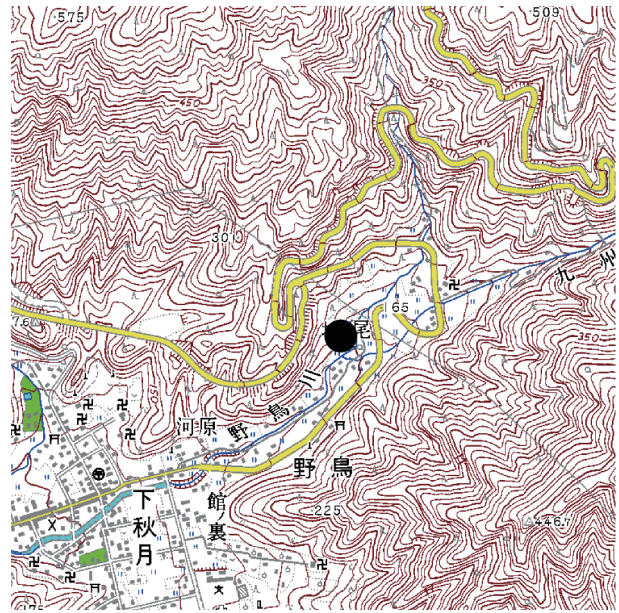
焼物名：

年 代：18 世紀後半～ 19 世紀初め

現 況：山林

秋月藩士の平田望春が天保 5 年 (1834) に記した『望春随筆』に、寛政 11 年 (1799) から約 10 年間操業され、陶工は上野・小石原から来た後に田香（今任）からも加わったと記される。秋月藩の年譜である『御代々之記』や『秋城御年譜』からは享和 2 年 (1802) から文化 9 年 (1812) の操業と読み取ることができる。

窯跡は秋月城下町から 500 m 程北西の野鳥川右岸に位置する。かつては僅かに壁体が見え、遺物も採集されていたとされるが、副島邦弘による平成 18 年 (2006) の現地踏査や今回の調査でも窯自体は確認できず、今回の現地踏査でも、わずかに周辺から窯壁片を確認したのみである。



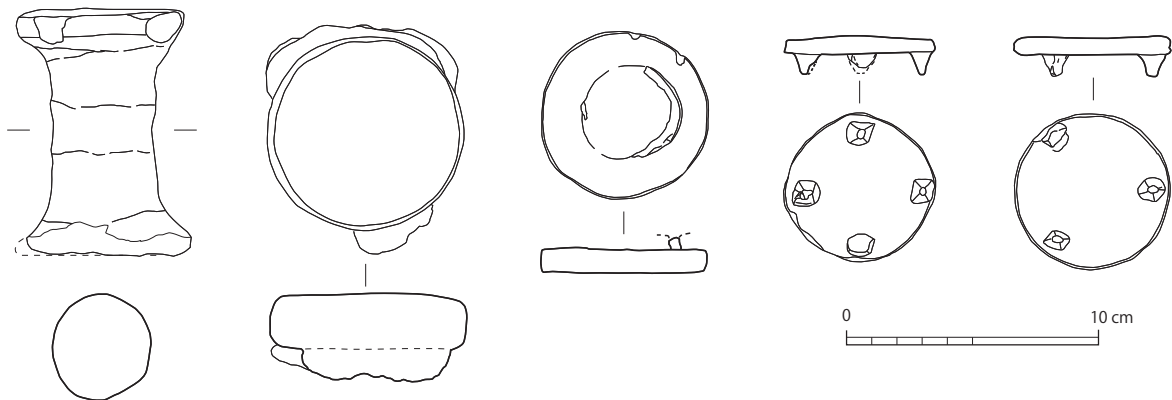
窯跡位置図 『甘木』 (1/25,000)



窯跡現況 (近景)



野鳥窯跡遺出土遺物



野鳥窯跡出土遺物実測図 (1 / 3)

朝倉市教育委員会所蔵

筑後1 一の瀬 [朝田] 窯跡

所在地：うきは市朝田

経営：

焼物名：一の瀬焼・朝田焼

年代：文化年間～明治

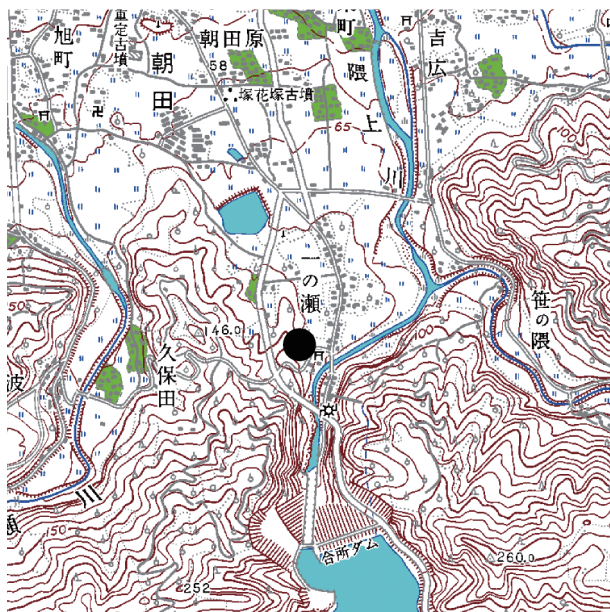
現況：山林

備考：市076、県620024として周知化

文化年間(1804～18)に太田勝次郎が開窯し、最初は陶器を中心に焼いていたが次第に磁器が増えたとされる。勝次郎窯の閉窯は文政12年(1829)もしくは天保6年(1835)頃とされる。天保元年(1830)頃には樋口勘次・長作が陶磁両種の窯をかまえ、短期間操業を行う。染付製品の銘にその名がみえる。安政年間(1854～90)には足立寿平が小石原、星野、唐津などの工人を雇い、陶器の生産を行おうとするが、明治初年に廃業したという。現在の窯元は昭和39年(1964)に再興されたもの。

上記の変遷で、同一の窯を使用したのか、別の窯を築いたのかは明確でない。窯跡は耳納山麓の東向きの急傾斜地裾に位置する。陶器窯・磁器窯の二基があったとされるが、陶片は確認されるものの磁器片は見つけることができず、地形が大きく改変されている場所もあることから磁器窯は失われている可能性がある。

器種は陶器については、碗・皿の他、甕や雲助等の中～大形品がみられる。磁器については碗・皿・瓶が多くみられる。磁器には「一の瀬」や「朝」、「朝田一の瀬樋口勘二」等銘を高台内に記すものがみられる。採集された窯道具は多くはないが、ハマ等がある。



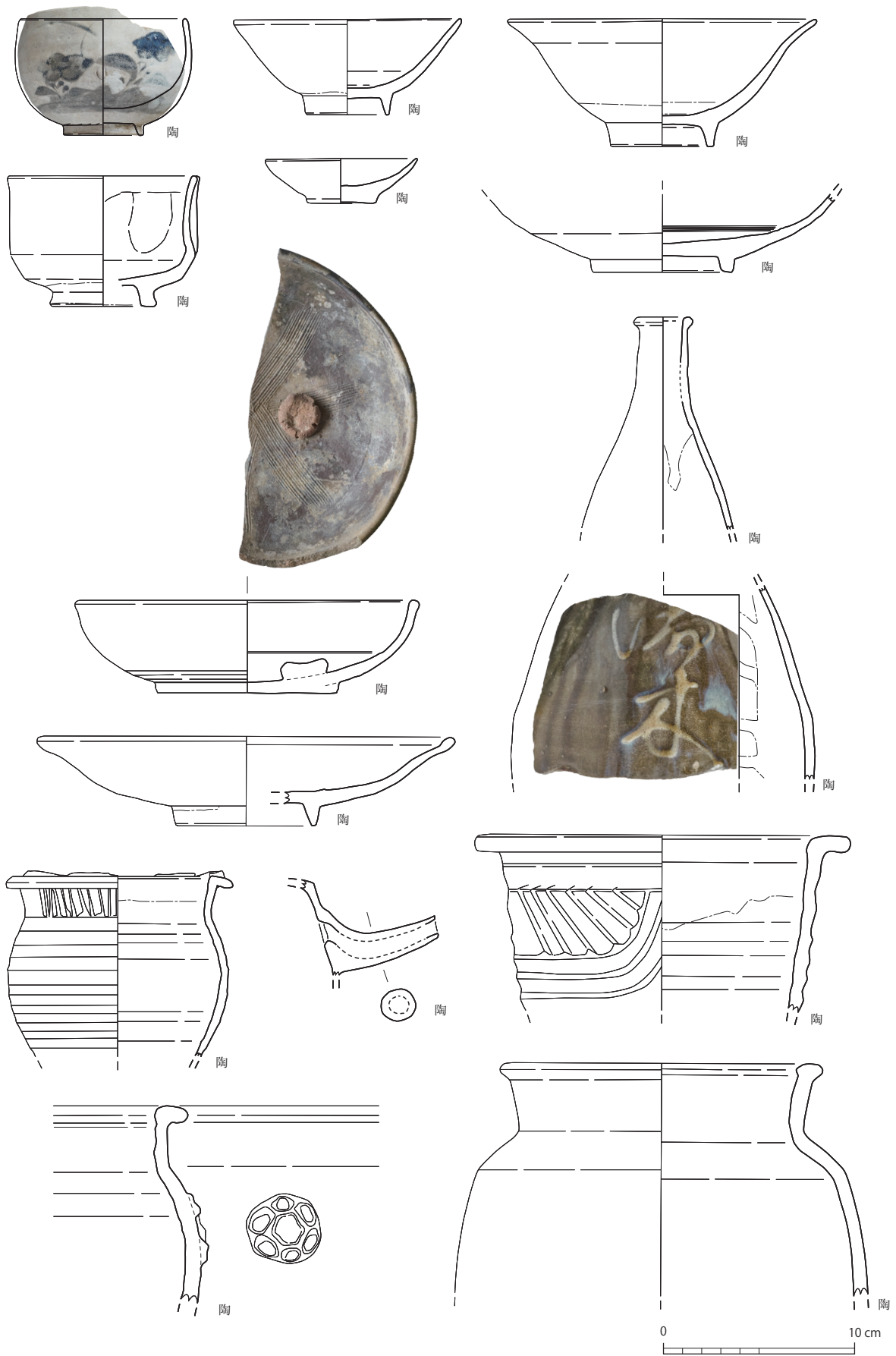
窯跡位置図 『千足』(1/25,000)



窯跡現況 (遠景)



窯跡現況 (近景)



一の瀬窯跡出土遺物実測図1 (1/3)

うきは市教育委員会所蔵



一の瀬窯跡出土遺物実測図2 (1 / 3)

うきは市教育委員会所蔵

筑後2 柳原焼窯跡

所在地：久留米市篠山町

経営：久留米藩

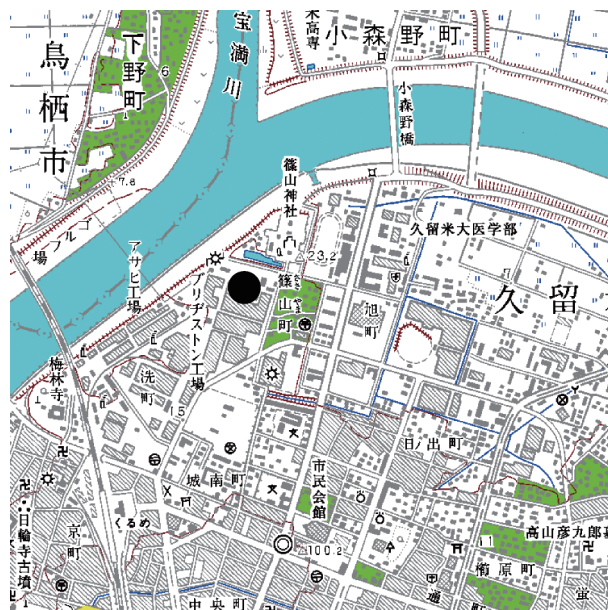
焼物名：柳原焼

年代：天保3年(1832)～天保12年(1841)

現況：工場

久留米藩9代藩主有馬頼徳（月船）が久留米城内の一角で開かせたお楽しみ窯である。天保3年(1832)から同12年(1841)頃までとされる。窯は城内二の丸の新御殿の庭にあったとされるが、現在工場地内であり確認することができない。

赤坂焼や星野焼の陶工が参画し、中国や朝鮮、日本の茶陶を倣い、茶陶を焼かせた。高台脇や高台内に「柳原」の小判形陰刻銘や、月船公の花押の陰刻がなされるものがある。



窯跡位置図 『久留米』(1/25,000)



窯跡推定地現況 (遠景)

筑後3 朝妻焼窯跡

所在地：久留米市合川

経営：久留米藩

焼物名：朝妻焼

年代：正徳4年(1714)～享保13年(1728)

現況：山林

備考：県030253として周知化

『米府年表』や『石原家記』から、正徳4年(1714)に6代久留米藩主有馬則維の命により、枳形焼の陶工が関わり、肥前の工人や絵師を招致して開窯したとされる。享保13年(1728)には閉窯している。

窯は久留米市街地に近い標高約35mの丘陵上に位置する。平成4年、27年に久留米市教育委員会により発掘調査が行われ、残存長は8.8mの焼成室3室と煙道部からなる窯跡と物原が確認され、大部分は現地保存されている。

操業期間は短いが、白磁や青磁、染付など色絵を含めて磁器生産が行われた。底部などに「朝」銘をもつ。窯道具はハマ、トチン、チャツ、ナンキン、さや鉢などが見られる。トンバイを煙道部に使用する。ハリ支えがある。煙道部は熊本県南関町に残る小代焼瓶焼窯とほぼ同様の形態を呈すとの指摘もある。



窯跡位置図 『久留米』(1/25,000)

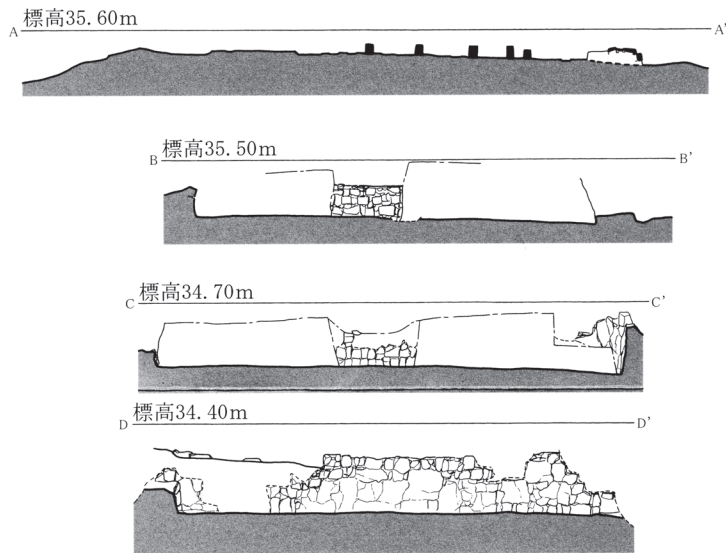
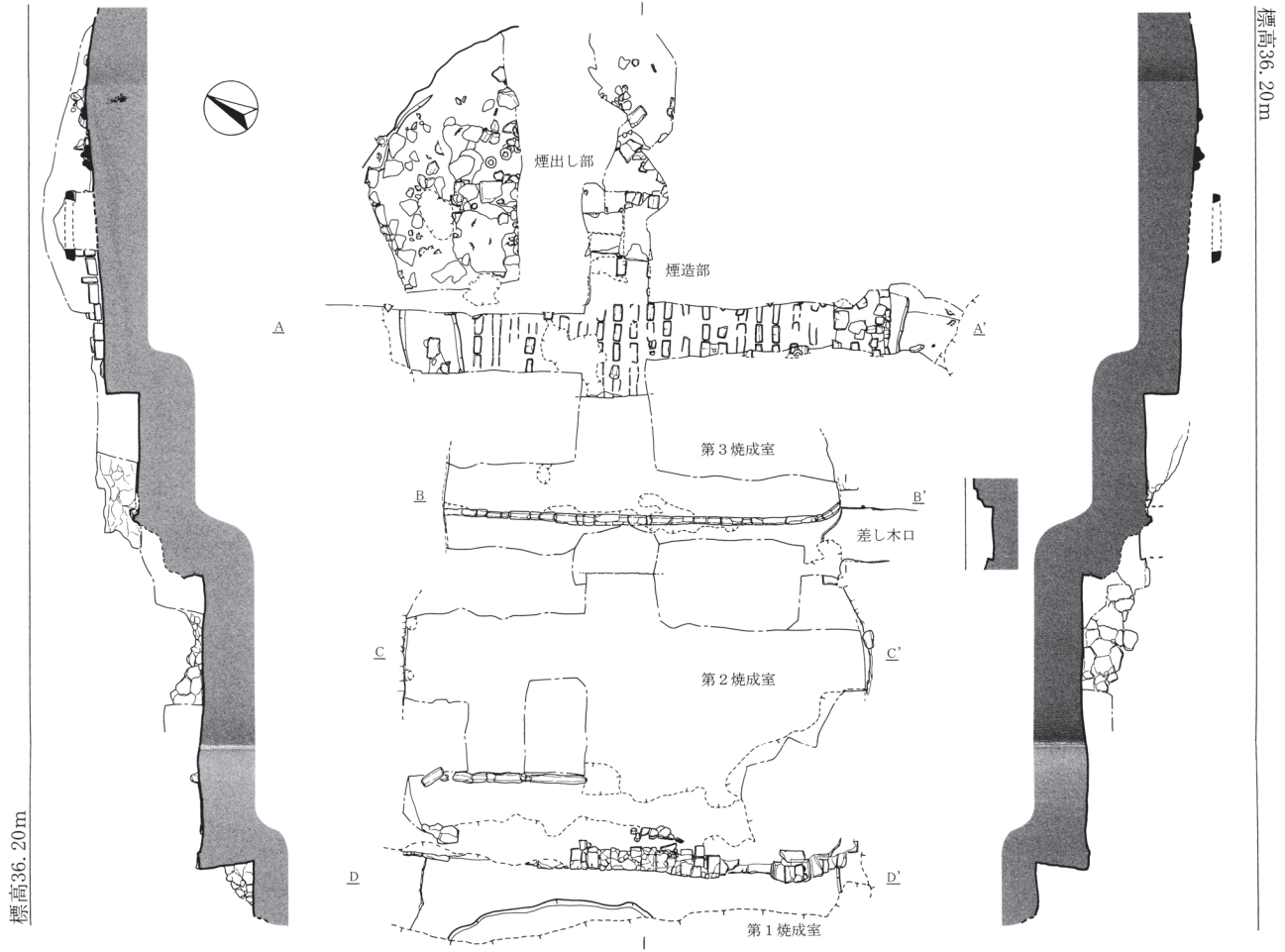


窯跡現況(遠景)



窯跡(調査時)

久留米市提供



朝妻焼窯跡実測図 (1/100)

筑後 4 東野亭焼窯跡

所在地：久留米市野中町

経営：久留米藩

焼物名：東野亭焼

年代：慶応元年(1865)～明治8年(1875)頃

現況：消滅

久留米藩11代藩主有馬頼咸により、慶応元年(1865)にお楽しみ窯として開窯されたが、殖産興業を目的とする事業も担った。赤坂焼の陶工・緒方次助の次男・宗一が主に製品(花瓶、茶器など)を作った。廃藩後は民間に引き継がれたが、明治8年(1875)頃に廃窯となった。東野亭の名は、東野中(久留米市野中町)の藩主別邸である「東野亭」に由来する。

久留米市街地の南東部、高良川左岸の台地上に位置する。平成10年(1998)に久留米市教育委員会により発掘調査が行われ、窯は燃烧室と焼成室2～3部屋があることがわかったが、削平を大きくうけており不明な点も多い。陶器の行平鍋や片口、急須、徳利、鉢、すり鉢、灯明具等がある。また、染付で高台内に「東野亭造」の銘がある磁器皿が出土し、磁器も焼かれていたことがわかる。行平鍋の把手には「東埜寿」「東野亭」の銘がある。窯道具ではトチンがないのが特徴で、サヤ鉢、ハマ(逆台形、足付)、シノ(ナンキン)などが見える。



窯跡位置図 『久留米』(1/25,000)



窯跡(調査時)

久留米市提供



窯跡現況(遠景)

筑後 12 赤坂焼 [三原] 窯跡

所在地：筑後市蔵数字赤坂

経営：久留米藩

焼物名：赤坂焼

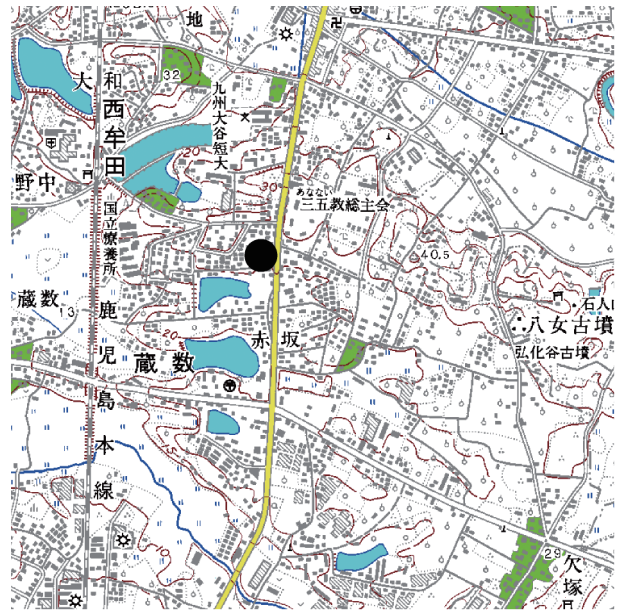
年代：文化9年(1812)～文政5(1822)年

文政7年(1824)～弘化3(1846)年

現況：神社・宅地

文化9年(1812)、水田窯(筑後市水田)の次郎吉が窯を開く。しかし経営はうまくいわず一時廃窯したが、文政7年(1824)に三原富次が再興する。文政10年(1827)には三原が久留米藩御用焼立役となる。三原は久留米藩のお楽しみ窯である柳原窯で制作した製品を赤坂で焼いた記録が残されている。三原窯は富次の次男貞吉の代まで御用窯として創業され、その後は民窯となった。三原窯で従事した緒方家が赤坂焼を維持し、会社窯・峠窯・新窯を営んだ。特に緒方宗市は久留米藩のお楽しみ窯である東野亭焼窯を起すにあたり選ばれて陶匠となった。東野亭焼窯廃窯後は赤坂に戻り窯を築いた。

窯は東西に長く伸びる八女丘陵の西端付近に位置する。三原窯は周辺より高くなる地形にあり、現在は赤坂神社が祀られている。窯跡の上に社殿が建てられており、基礎周辺には焼土面が確認できる。周辺には陶片や焼土が散在する。他の窯跡については推定地を踏査したが、確認することはできなかった。



窯跡位置図 『八女』(1/25,000)



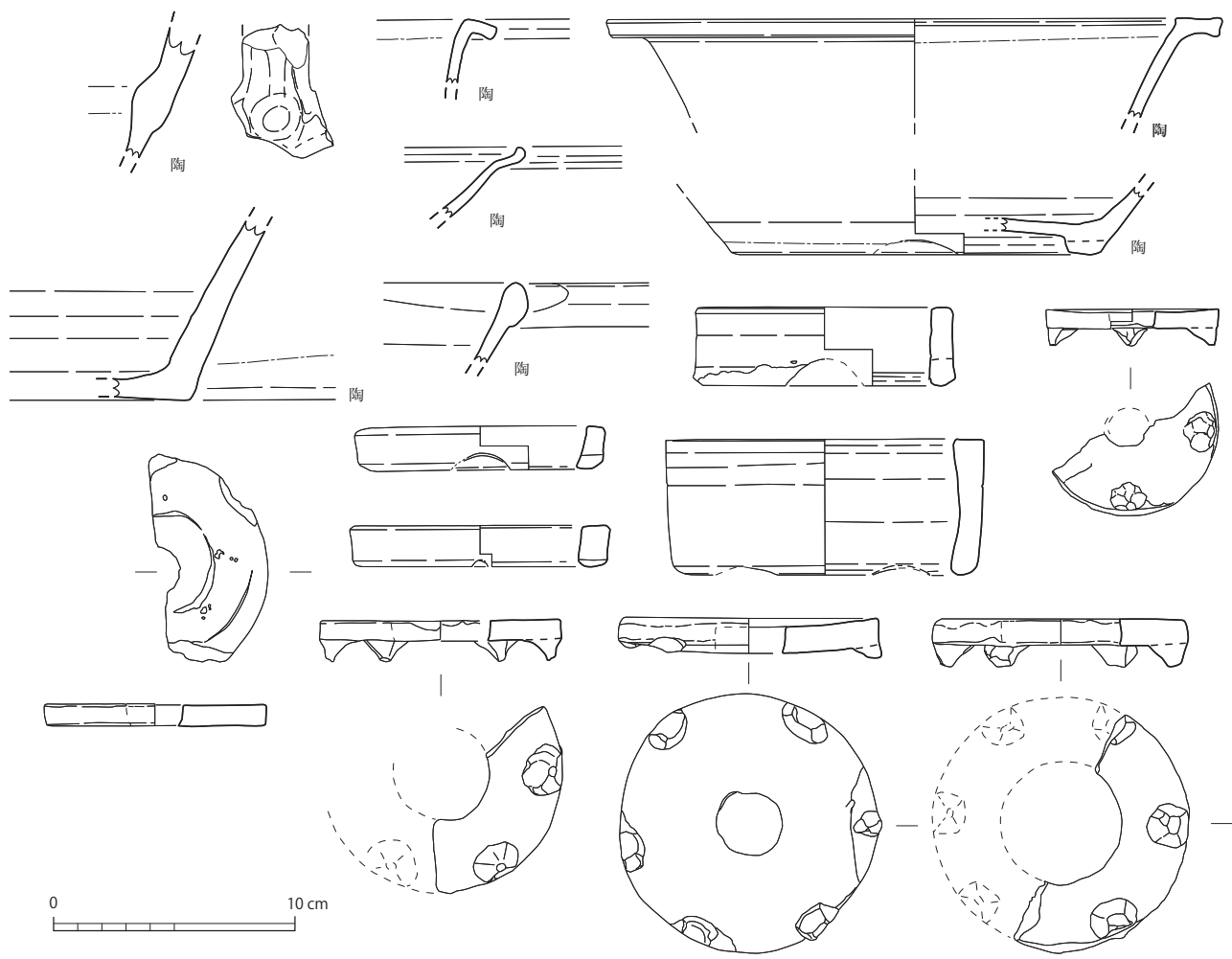
窯跡現況(近景)



赤坂焼窯位置図 「筑後赤坂焼」(以下の文章も参照)

- ①次郎吉窯 文化9年(1812)～文政5年(1822) 水田の次郎吉が窯を起こす。
- ②三原窯 文政7年(1824)～弘化3年(1846) 三原富次が赤坂焼を再興 陶名「利左衛門」
富次 → 貞吉
- ③戸田窯 文政9年(1826)～弘化3年(1846) 戸田衣吾が戸田窯を起こす 陶名「作兵衛」
衣吾→秀人→正明
- ④緒方勘兵衛窯 安政2年(1855)～昭和初期 緒方勘兵衛→金太郎
- ⑤明治初年(1867) 緒方宗市が赤坂に窯を開く。岡本信吉も同伴「赤岡」の銘を残す
※安政2年(1855)～大正4年(1915)？
- ⑥峠窯(緒方金太郎窯) 明治末年～昭和16年(1941) 緒方金太郎→強
- ⑦新窯(緒方徳太郎窯) 大正10年(1921)～昭和初期 緒方徳太郎→栄
- ⑧会社窯(緒方正明窯) 大正4年(1915)～昭和52年(1977) 鶴田邦太郎・緒方秀人他3名で正典舎
を創り、会社窯を起こす。

昭和42年(1967) 正明窯を中心に、豊田勝秋の指導により赤坂焼の復活をみた。



赤坂焼窯跡出土遺物実測図 (1 / 3)

九州歴史資料館所蔵



赤坂焼窯跡出土遺物

筑後 15 本星野焼窯跡

所在地：八女市星野村大字本星野

経営：久留米藩

焼物名：星野焼

年代：享保年間～宝暦年間

明治 20 年 (1887) 頃～明治 27 年 (1894)

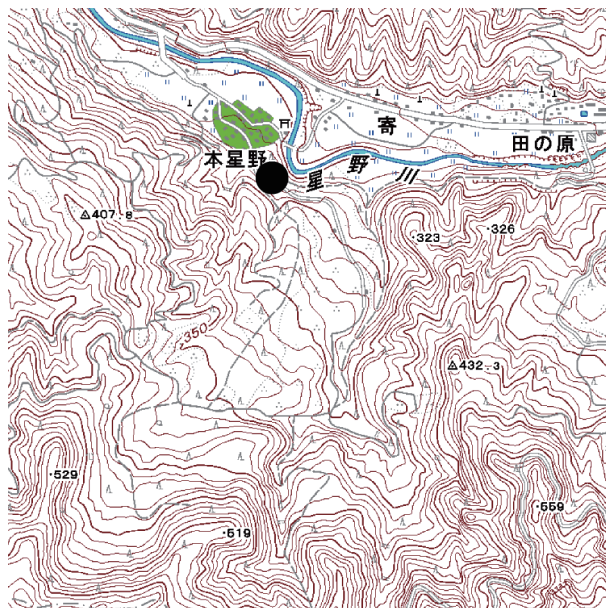
現況：畑地

積形焼を引き継ぎ、庄屋高木与三右衛門により享保年間に始められる。十六葉菊向附六人揃の箱に享保 9 年 (1724) とあるのが初現。久留米藩の山方史料である「山方小物成方格帳」によると、元文 2 年 (1737) に御用窯として認可された。室山熊野神社の陶製灯籠には元文 3 年 (1738) の紀年と与三右衛門の子、与次右衛門の名がみえ、御用窯認可の感謝を込めて奉納されたものであろう。その後、宝暦年間初頭に高木宇平次により十籠へ窯が移された。

明治 20 年 (1887) 頃に十籠の陶工森松勢蔵が小石原との関係が濃厚な池上清一や坂本計太とともに本星野に再び窯を築くが、明治 27 年 (1894) をもって廃絶した。

窯跡は星野川に近い尾根先端近くに位置する。

器種は、初期のものは茶の保存・運搬のための陶器壺を主体とするが、御用窯となってからは茶器・食器・花器・香炉等多彩となる。図工がないため、文様図柄の型で押し出したものがある。「星の」等の刻印をもつものもある。



窯跡位置図 『八女』 (1/25,000)



窯跡現況 (近景)



森松勢蔵の墓

筑後 16 星野十籠焼窯跡

所在地：八女市星野村麻生・十籠

経営：久留米藩

焼物名：星野焼

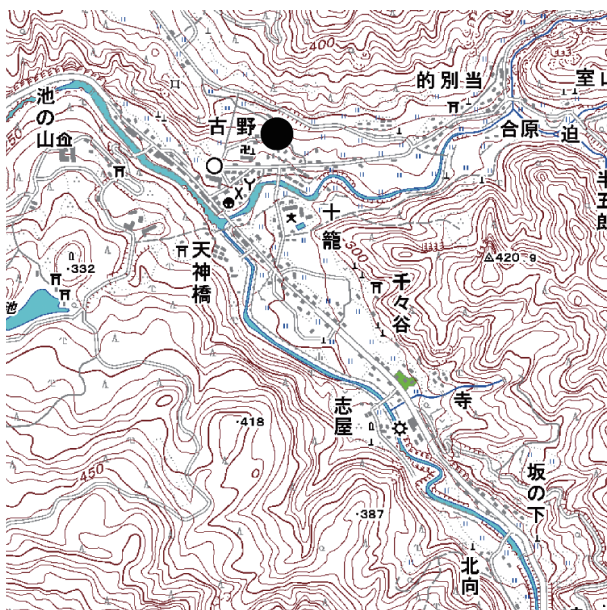
年代：宝暦年間～明治27年（1894）

現況：畑地・道路

宝暦年間（1751～1763）の初頭頃に高木宇平次が本星野から十籠へ移した窯。本星野から引き続き御用窯は継承され、廃藩置県に至るまで代々続く。中でも良八は久留米藩主9代有馬頼徳の御庭焼（柳原焼）の窯に召し出され活躍する。その頃、森松善助・安次親子が陶工として名をなすが、明治維新後、藩による庇護がなくなり窯の経営は傾いた。森松安次・勢蔵親子は十籠の中古野に窯を築き、その後明治6年（1873）に豊岡村今（八女市黒木町今）に移り今村焼を開窯する。安次の死後、勢蔵は再び十籠に戻り作陶を続けるとともに本星野でも新たに開窯した。明治27年（1894）に閉窯した。

窯跡は、急峻な丘陵が緩斜面となる旧星野村中心地に位置する。約30年前の町道拡幅時に遺物を確認した地点を十籠窯跡Aとしている。今回の現地踏査では、窯跡は確認できなかったが、物原推定地周辺で焼土片や陶器片を採集した。『筑後陶器考』では高木窯としており、宝暦年間からの窯跡かと思われる。十籠窯跡Bとしている地点は『筑後陶器考』で森松窯としている窯跡。

器種は陶器の壺・甕を主体とし、「星野十籠焼」等の文字を刻むものがある。



窯跡位置図 『十籠』（1/25,000）



窯跡現況（遠景）

筑後 19 釈形焼窯跡

所在地：八女市黒木町笠原字釈形

経 営：久留米藩

焼物名：釈形焼

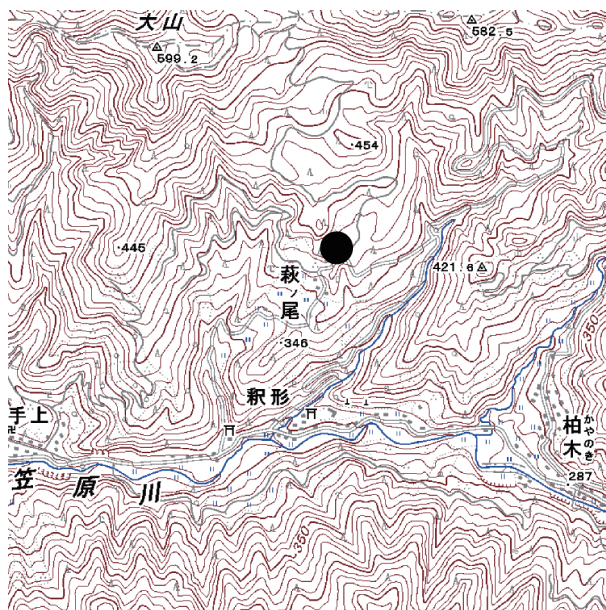
年 代：17世紀～享保年間（18世紀前半頃）

現 況：山林

個人蔵の茶甕の木蓋に元禄 11 年（1698）銘があり、文献では『石原家記』の正徳 4 年（1714）12 月に「釈形焼」の記事があるため、元禄年間の開窯と考えられる。ただし有馬豊氏が元和 6 年（1620）に久留米に入封した後の寛永 9 年（1632）や正保 4 年（1647）の書状に黒木の焼物のことが記されており、これが釈形焼の可能性も残される。閉窯は本星野に窯を移す享保年間とされる。

窯跡はなだらかな東南傾斜地の山裾で、上部構造は確認できないが、周辺で焼土塊等が採取される。複数基築かれた可能性も考えられる。近隣にカメヤキドン（甕焼殿）の墓があり開墾に伴い改葬され地蔵を祀るとされるが、確認できなかった。北側に甕焼山があり、原料の白土を採ったとされる。甕焼山にも窯があったと伝えられるが、情報が少なく確認はできなかった。

製品は茶の容器としての陶器甕壺類が中心で、伝世品には「釋」「釈」の一字か、長方形枠内に「釈形」と楷書で刻んだ印がみられる。窯跡で採集される製品は陶器の小片やハマ、焼土塊等少量に留まる。



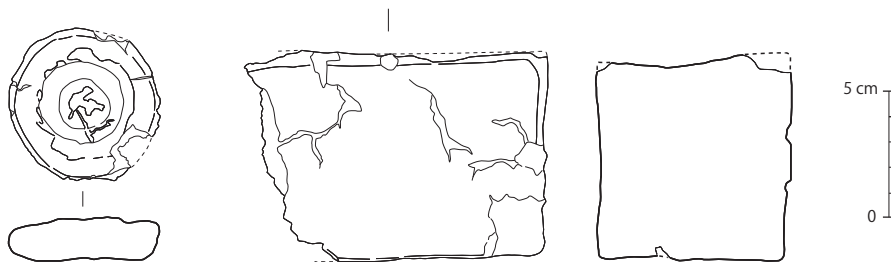
窯跡位置図 『黒木』 (1/25,000)



窯跡現況（近景）



釈形焼窯跡出土遺物



釈形焼窯跡出土遺物実測図（1/3） 八女市教育委員会所蔵

筑後 20 鹿子生焼窯跡

所在地：八女市黒木町鹿子生

経 営：民窯

焼物名：鹿子生焼

年 代：創業不明

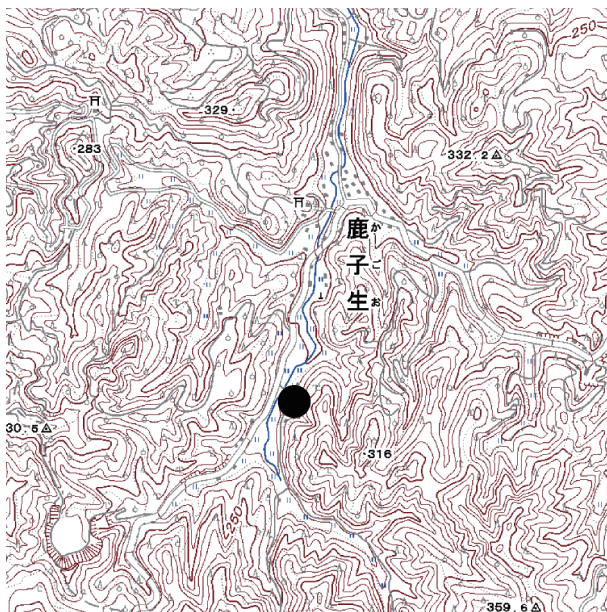
最終段階は天保6(1835)年開窯

現 況：災害により消滅

『筑後陶器考』によると窯は持田山の真下に三か所あったとされる。窯ヶ谷という地名の場所には広範に陶片・磁器片・焼土が点在したとされるが、現在では確認できなかった。丘陵西斜面裾の現在宅地となっている地点は皿山と呼ばれ、天保6年(1835)頃に長岡鳳鳴が窯を開いた場所とされる。以前は石垣にトンバイが埋め込まれており、周辺からは焼土や陶片などが出土した。長岡鳳鳴が開いた窯は鹿子生焼の最後の窯とされる。平成24年(2012)の九州北部豪雨により被災し、窯跡は失われた可能性が高く、他の窯については記録類がないため、開窯時期等不明瞭な点が多い。平成6年(1994)11月に皿山の前面(西側)を圃場整備前に県教育委員会が試掘調査を行ったが、遺構等は確認されなかった。

長岡鳳鳴は食器・茶器・酒器・神仏具・装飾品等多岐にわたる陶器・磁器を焼いたとされる。

現在残る採集資料は少ないが、陶器碗やトチン・サヤ等の窯道具、トンバイがある。窯道具には磁器片が付着しており、陶器・磁器両者を焼いていたことがわかる。



窯跡位置図 『黒木』(1/25,000)



石垣に組み込まれたトンバイ 平成6年(1994)

筑後 21 池の本焼窯跡

所在地：八女市黒木町木屋

経営：柳河藩

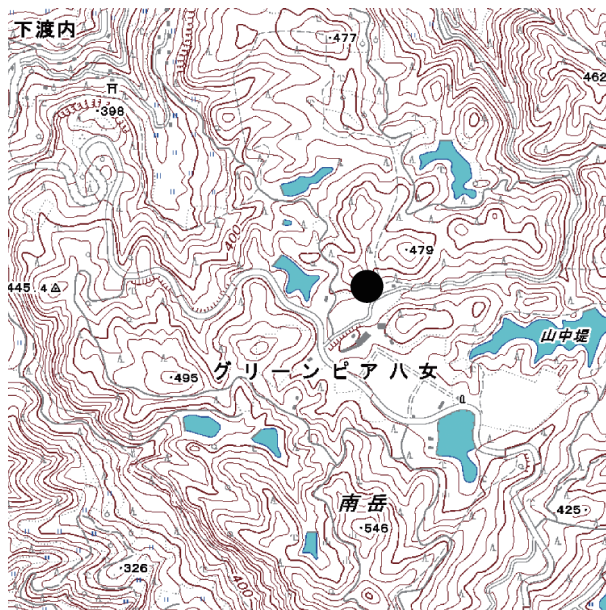
焼物名：池の本焼

年代：17世紀か

現況：山林

記録類にあらわれない窯で、1980年代のグリーンピア八女造成時に発見され、発掘されたとされるが、調査主体を含め詳細は不明である。

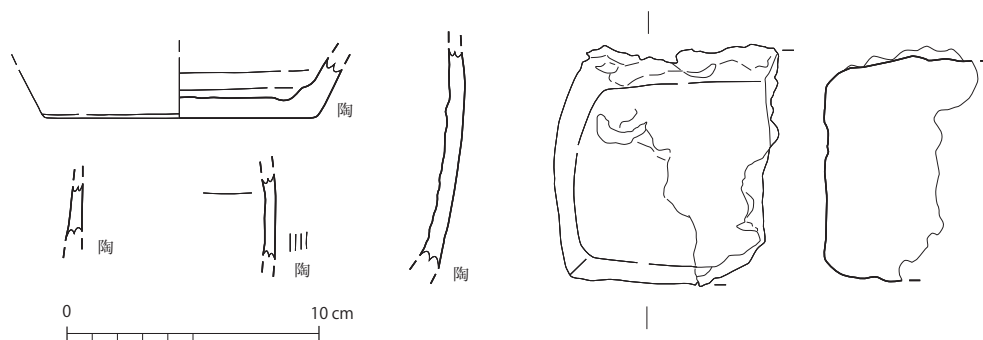
窯跡は熊本県境にあたる筑肥山地の山中、標高約450 mに位置する。現在も存在するとみられ、想定される場所の周辺からは陶器小片や焼土片が出土する。陶片は薄手で内面に青海波当て具痕を残すもので、17世紀に位置づけられる可能性がある。



窯跡位置図 『黒木』 (1/25,000)



窯跡現況 (近景)



池の本焼窯跡出土遺物実測図 (1/3)

八女市教育委員会所蔵

筑後 22 男ノ子焼窯跡

所在地：八女市立花町北山男ノ子

経 営：柳河藩

焼物名：男ノ子焼

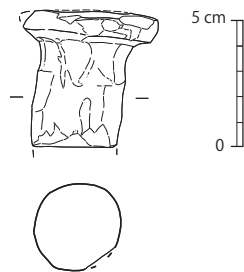
年 代：

現 況：山林

備 考：県 720146 として周知化

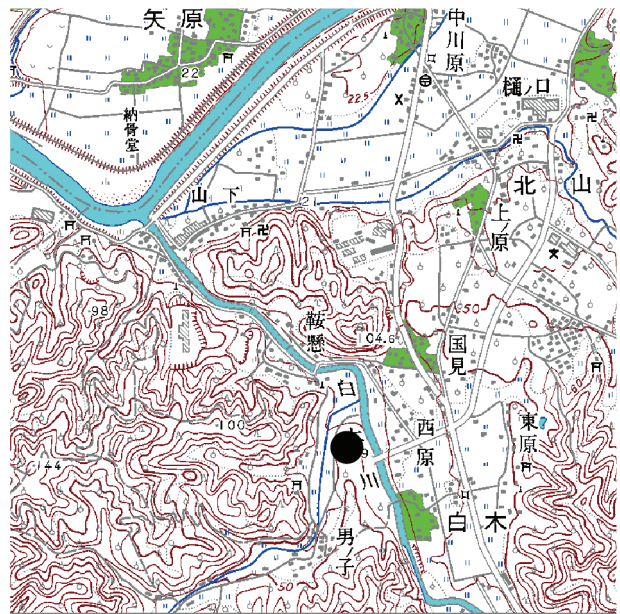
柳川藩立花宗茂が三潞郡浜口村（現在の大川市小保）にて朝鮮人陶工に開窯させたものの原料が乏しく、この地に移ったとされる。開窯の地から浜口姓を名乗ったが、浜口六左衛門が藩主立花艦虎に献上した陶器に対し不備があり、怒りを恐れて肥後国正臺山に居を移したと伝えられる。操業期間は 80 年程とされる。

窯は矢部川左岸の丘陵先端部西斜面に位置する。里道造成の際に陶片が多く出土したというが、現状で窯は確認できず、前面の畑からトチんとすり鉢片を採集した。茶壺の他に茶碗や磁器を焼いたとされるが、今回の調査では茶壺の伝世品のみを確認した。窯跡がある地は「窯床」の小字が残る。上流の現在男ノ子焼の里がある地は「瓶焼」の小字が残るため、複数の窯が存在する可能性がある。またそのさらに上流は「白石」と呼ばれ、釉の原料となる長石が多く産出する。



男ノ子焼窯跡出土遺物実測図（1 / 3）

九州歴史資料館所蔵



窯跡位置図 『八女』 (1/25,000)



窯跡現況（遠景）



窯跡現況（近景）

筑後 25 二川 [後田] 焼窯跡

所在地：みやま市高田町下楠田、上楠田

経営：民窯

焼物名：二川焼

年代：江戸時代末～昭和19年(1944)

現況：山林

備考：県800005～800008、市0148①～④として周知化

江戸期に丑之助が来て柳河藩主立花家の許可を得て始めたのが起源とされる。明治になり肥前弓野(佐賀県武雄市)から中尾米作が移り住み、弓野焼の手法を伝えたこととされ、松絵を代表的とする鉄絵緑彩の甕や大皿を焼いた。明治44年(1911)の記録には「土焼陶器四戸」の記載があり、昭和初期には上楠田(角窯)・後田(富重窯)・中尾(岡崎窯)・濃施(今村窯)があったとされる。

窯は旧高田町市街地に近い低丘陵にいずれも構築された。現在は角窯と富重窯の窯跡が良好な形で残る。丑之助が創業した初期の窯は特定できていない。

陶器窯で、かつては鉢・壺・甕・皿・徳利等を主体としたが、蘭鉢・捏鉢・骨壺・藍壺・半胴甕・土管・耐酸瓶等を多く焼くようになった。麦や蠟の生産が盛んであったため捏鉢の需要が高かったが、生活様式の変化や機械化により減退した。大正8年(1919)の頃に開かれた富重窯の製品には銘印がある。



窯跡位置図『柳川』(1/25,000)



富重窯跡現況(近景)



二川焼

みやま市教育委員会提供

筑後 28 黒崎焼窯跡

所在地：大牟田市岬字黒崎

経営：

焼物名：黒崎焼

年代：天明年間～明治

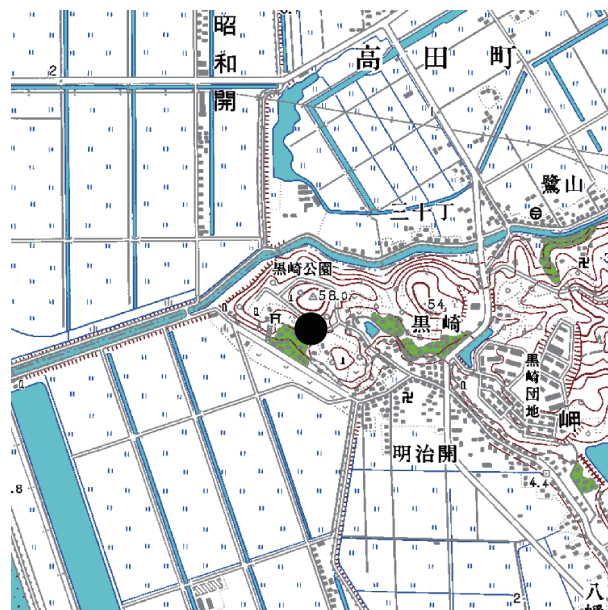
現況：山林

備考：市 452 として周知化

山本家により天明年間（1780 年代）に創業されたと伝わる。その後も山本家により継承され、寛政年間にかけての初代嘉作、二代友助の時代が最盛期で、「於黒崎村嘉作」「於黒崎村友助」と底に刻む作品があるという。嘉永年間（1850 年代）に下火となり、明治の始め頃に廃絶したとされる。

窯跡は、眼下に有明海や干拓地を臨む甘木山丘陵の先端、黒崎山中腹の南斜面に位置する。かつては窯体が観察できたようであるが、現状は比較的急な傾斜地に平坦面を造成している状況をなし、斜面下に窯壁片や陶片が散見される。かつての記録では、長さ 10 m 余、幅 4 m 前後、高さ 1～2 m 余とされている。

採取された資料は磁器の碗・皿が主体を占めるが、焼き損じたすり鉢片もあり、陶器・磁器両者を生産していたものと判断される。窯道具にはトチン・ハマがある。



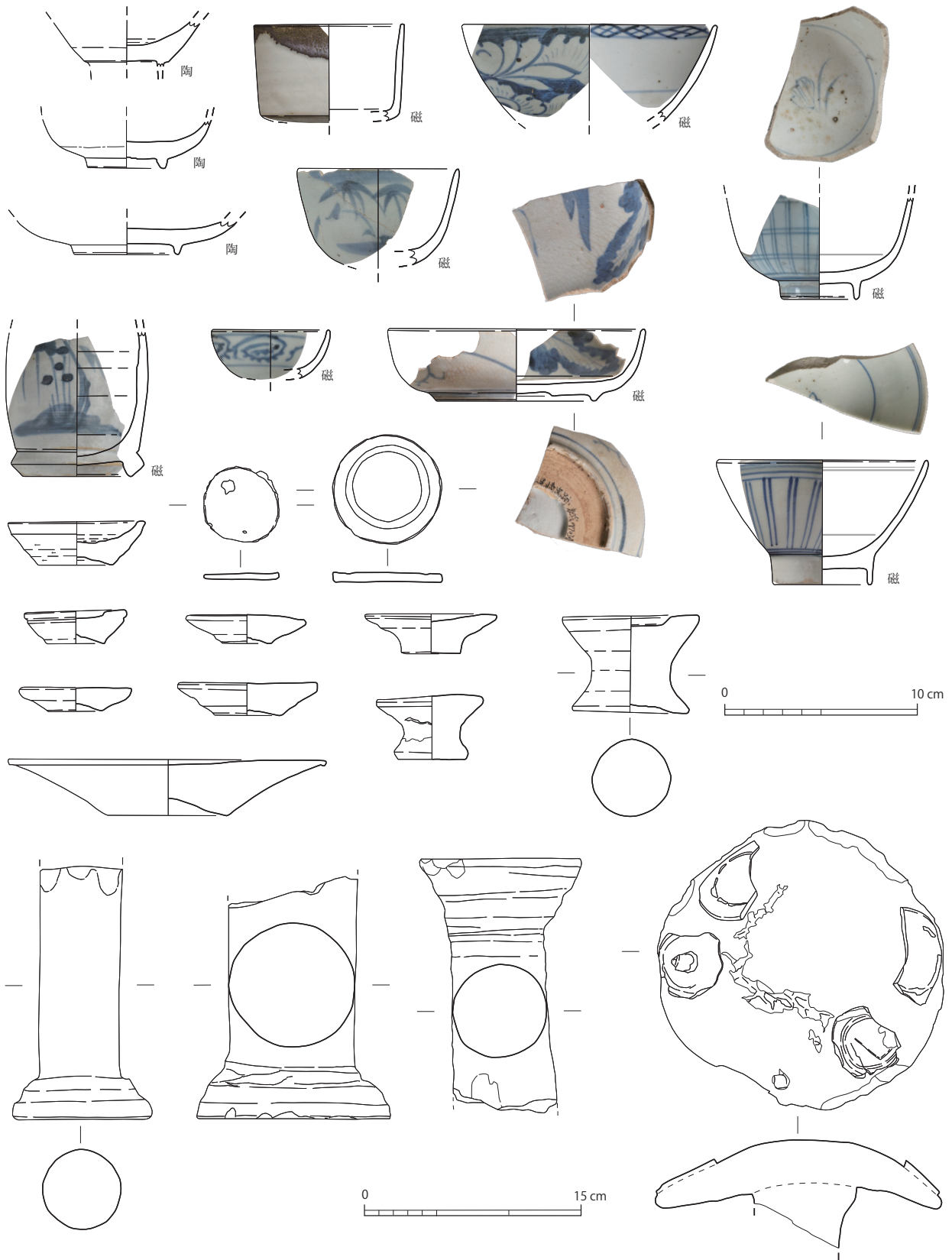
窯跡位置図 『大牟田』（1/25,000）



窯跡現況（遠景）



窯跡現況（近景）



黒崎焼窯跡出土遺物実測図 (1 / 3)

大牟田市教育委員会所蔵

豊前1 菜園場窯跡

所在地：北九州市小倉北区菜園場

経営：小倉藩

焼物名：上野焼

年代：17世紀

現況：移築し整備

県指定有形文化財（考古資料）

備考：市2023として周知化

小倉藩主細川家のお楽しみ窯で二代目の忠利御用の窯とされる。かつては幻の窯とされてきたが、都市計画道路建設に先立ち発見され、昭和54・57年（1979・1982）に財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室により愛宕遺跡として発掘調査が行われた。現在は隣接地に移築され、県指定有形文化財（考古資料）として保存されている。

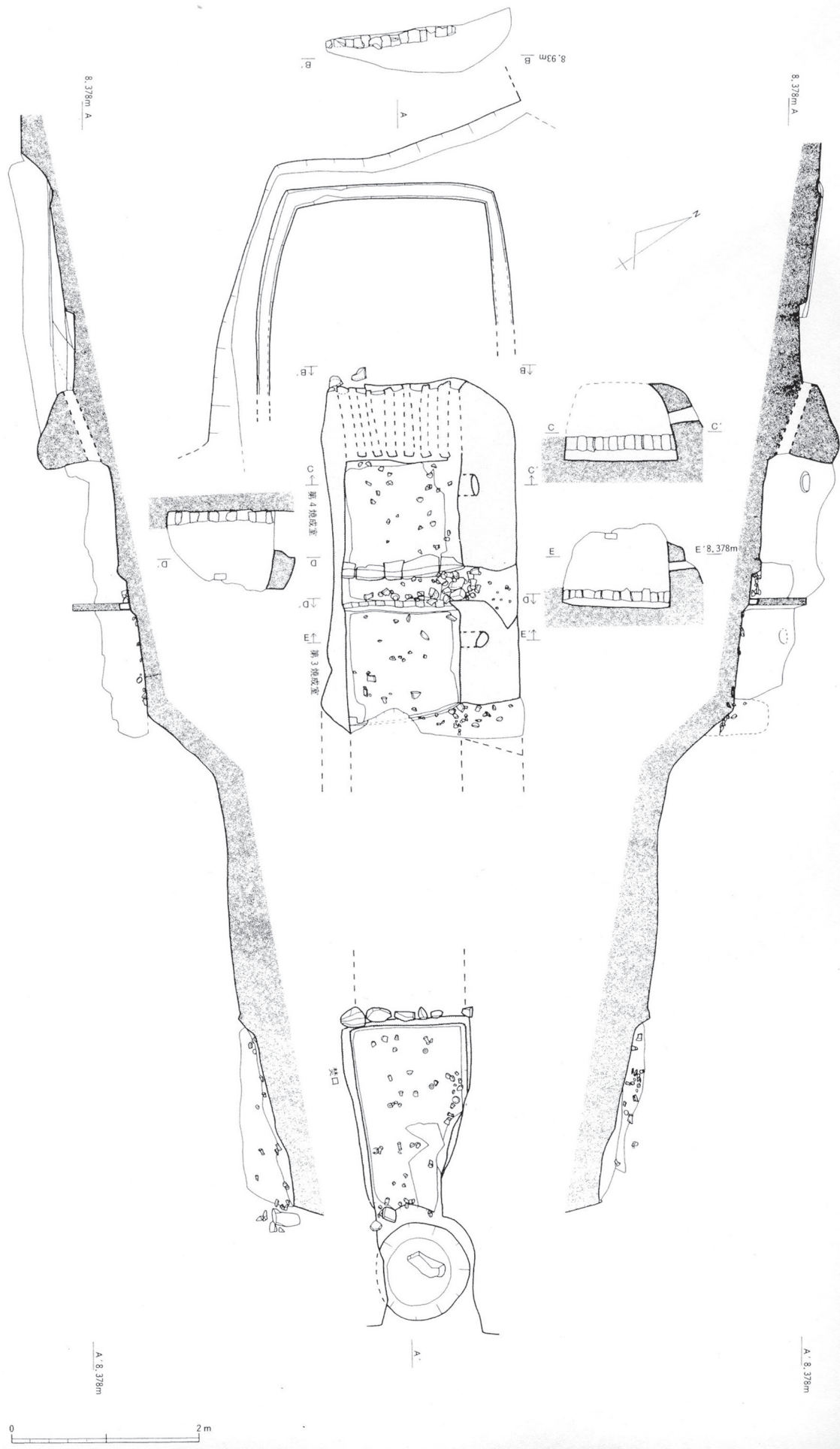
愛宕山東麓、旧板櫃川左岸の河口付近の標高2～11mの緩斜面に位置する。全長16.6mの割竹形登窯で、焚口、焼成室4室を持つ。出土品には陶器の碗・茶入・水指等があり、藁灰釉、鉄絵、刷毛目、三島手など多彩であり、白磁や染付、焼締陶も見られる。窯道具はトチン、ハマが出土しており、貝目跡が顕著に残る。



窯跡位置図 『八幡』 (1/25,000)



窯跡（調査時）
北九州市提供



菜園場窯跡実測図 (1/60)

豊前4 釜ノ口窯跡

所在地：田川郡福智町上野字釜蓋

経営：小倉藩

焼物名：上野焼

年代：慶長7年(1602)～寛永9年(1632)

※1601～1632年説あり

現況：山林

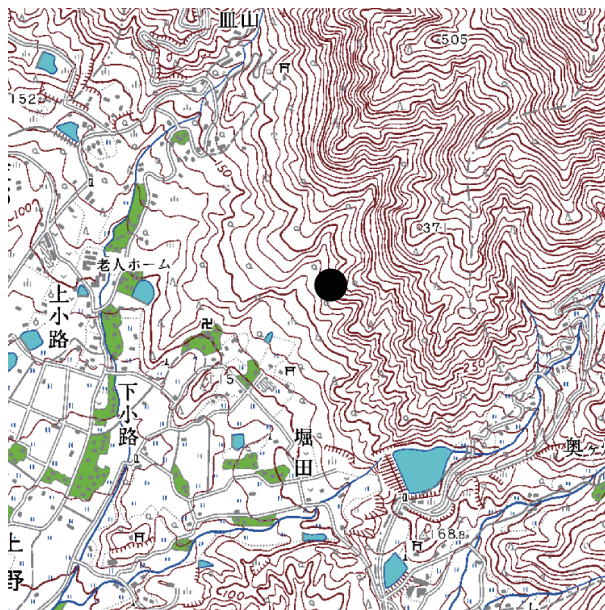
備考：県890015として周知化

慶長7年(1602)に細川忠興が小倉に入城後まもなく尊楷一族により創業されたとされる。細川氏が肥後熊本城への移封とともに八代に移るまでの約30年間操業された。元和8年(1622)の『田川郡家人畜改帳』に上野村焼物山に「焼物師八人 売子十人」とあり、本窯に係るものと考えられる。

福智山の南西山麓の集落域から外れた標高約160mに位置する。昭和30年(1955)に日本陶磁協会等が主体となり調査を実施し、全長約41mの胴木間と15室からなる割竹式の登窯を検出した。窯は3回の改築した状況がみられるという。窯周辺には工房跡かと想定される平坦地がひろがる。

陶器の皿・碗・茶入・水指・片口など多種多様な出土品がみられるが、正式な報告書が未刊であるため、実態がつかみ難い。

昭和30年(1955)5月27日(再び昭和32年(1957)8月13日)に史跡の仮指定がなされたが、指定には至っていない。

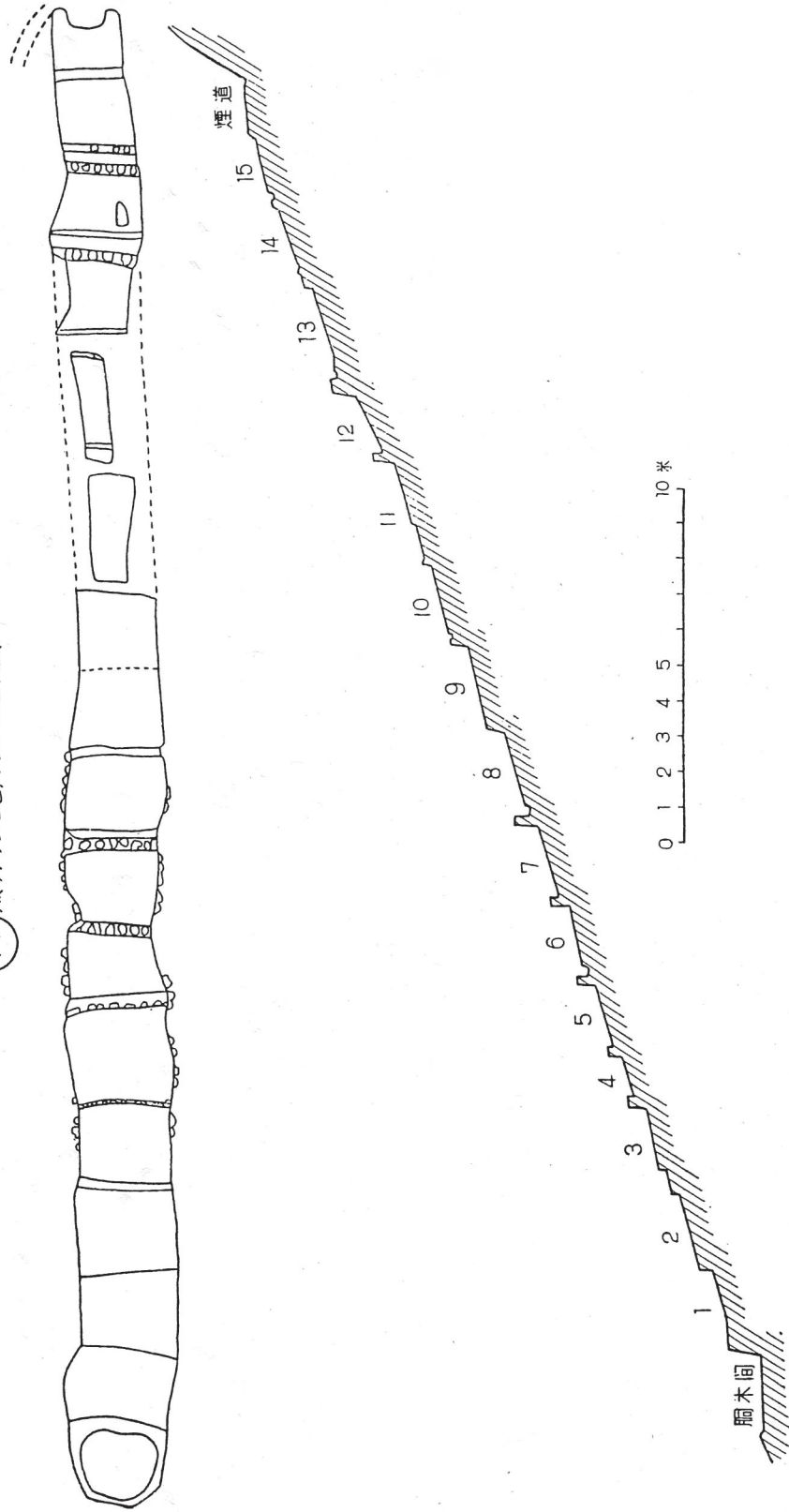


窯跡位置図 『金田』(1/25,000)



窯跡現況(近景)

74 窯のプランとセクションの見取図



釜ノ口窯跡実測図 (1/200)

豊前6 皿山本窯跡

所在地：田川郡福智町上野字皿山

経 営：小倉藩

焼物名：上野焼

年 代：元和・寛永年間～明治4年(1871)

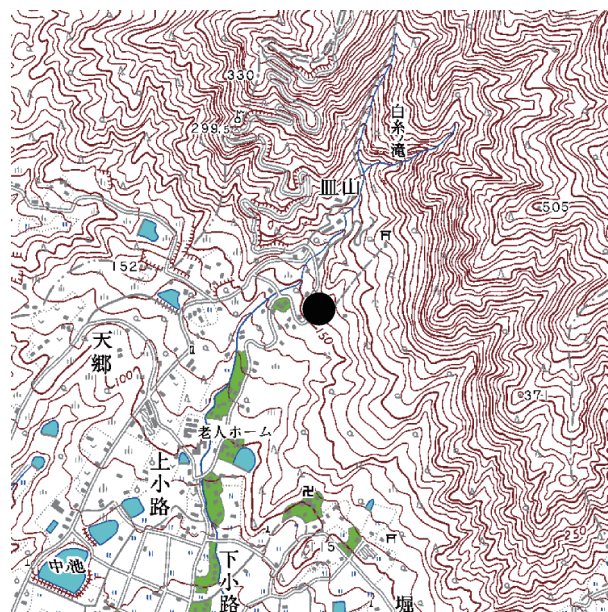
現 況：竹林

備 考：県 890014 として周知化

豊前小倉藩の御用窯であり、細川藩時代の創業と考えられる。細川氏の肥後移封に伴い尊楳は長男・次男を連れて八代へ移るが、上野では三男と娘婿の二家が継承し、本窯を操業したとされる。

福智山南西山麓に位置し、釜ノ口窯から一つ尾根を挟んだ北西にあたる。周辺は福智山信仰にかかる坊跡が点在する。

窯は明治期まで長期にわたって営まれ、厚い物原が形成される。長大な構造が想定されるが、具体的な室数等、規模は不明である。小笠原藩時代の操業が中心であり、多種多様な技法・釉薬の陶器がみられる。釜ノ口窯と共通する古式の陶片が含まれるため、開窯は細川藩時代の釜ノ口窯に並行する時期まで遡る可能性がある。



窯跡位置図 『金田』(1/25,000)



窯跡現況(近景)



窯跡現況(窯跡石碑)

豊前9 岩屋高麗窯跡

所在地：田川郡福智町弁城字岩屋

経営：小倉藩

焼物名：上野焼

年代：慶長・元和年間～寛永年間

現況：山林 道路

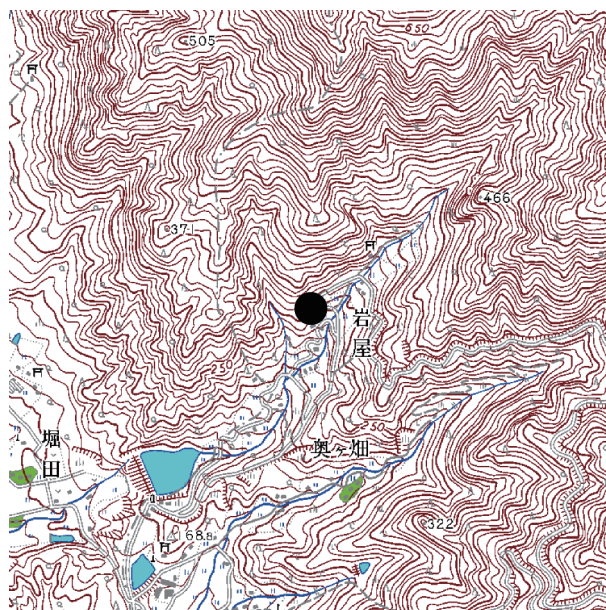
備考：県 840002 として周知化

元和8年(1622)の『田川郡家人畜改帳』に弁城村焼物山に「焼物師五人 売子十一人」とあり、本窯に係るものと考えられる。元禄7年(1694)の『豊州紀行』にはみられず、皿山本窯で主体的にみられるような小笠原期のものが含まれないため、操業期間は釜ノ口窯に近いものと想定される。

福智山南西山麓に位置し、釜ノ口窯からは南に尾根を隔てた比較的狭い谷地形に位置する。この谷も福智山信仰に重要な谷とみられ、坊跡が連なる。

かつては通焰孔が並んでいた状況がみられたが、現在では確認できない。これは窯上部であったとされ、道路拡幅時に失われた可能性がある。規模・構造等は不明である。

出土品には陶器の皿や碗類の他、多様な器種がみられる。



窯跡位置図 『金田』(1/25,000)



窯跡現況 (近景)



窯跡現況 (窯跡石碑)

豊前 12 田香焼窯跡

所在地：田川郡香春町高野字常安

経営：小倉藩

焼物名：高野田香焼

年代：天保年間 (1831 ~ 1845) ~明治

現況：竹林

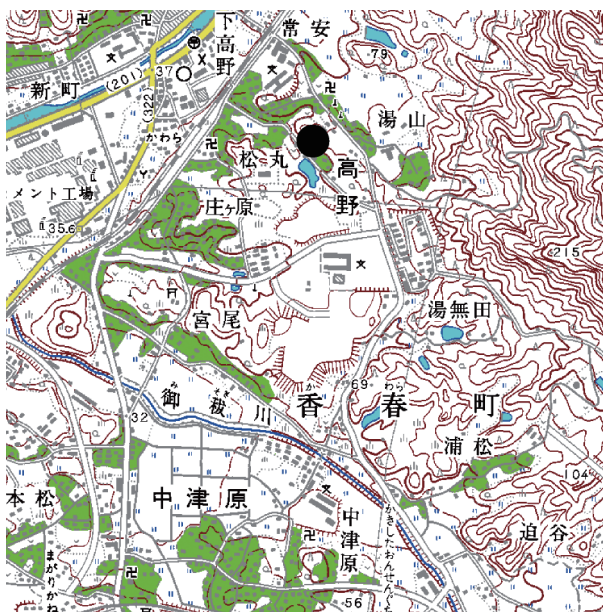
備考：町 225 として周知化

奥田儀三郎が分家して、天保5年(1834)にはすでに開窯していたとされるが、文献記録がほとんどなく詳細は不明である。田香焼の廃窯後は山岡徹山親子が昭和31年(1956)に香春焼を築窯した。

飯岳山から北西に延びる丘陵の先端、金辺川左岸に位置する。丘陵南西斜面に築かれ、長さ約22m、幅約7mの窪地を確認した。南西側の下る急斜面や池が物原にあたり、遺物片が散在する。出土品には陶器の碗・皿・徳利・水甕・花筒・茶碗・湯呑・狛犬や窯道具がある。「清」の銘がみられる。磁器も焼成したが、出土品はごく僅かである。

周辺の墓地には奥田儀三郎の墓がある。

北西に隣接して香春焼の窯が残るが、現在は使用されておらず、香春焼は飯岳山北麓で継承されている。香春焼には「かわら・香春」の銘がある。



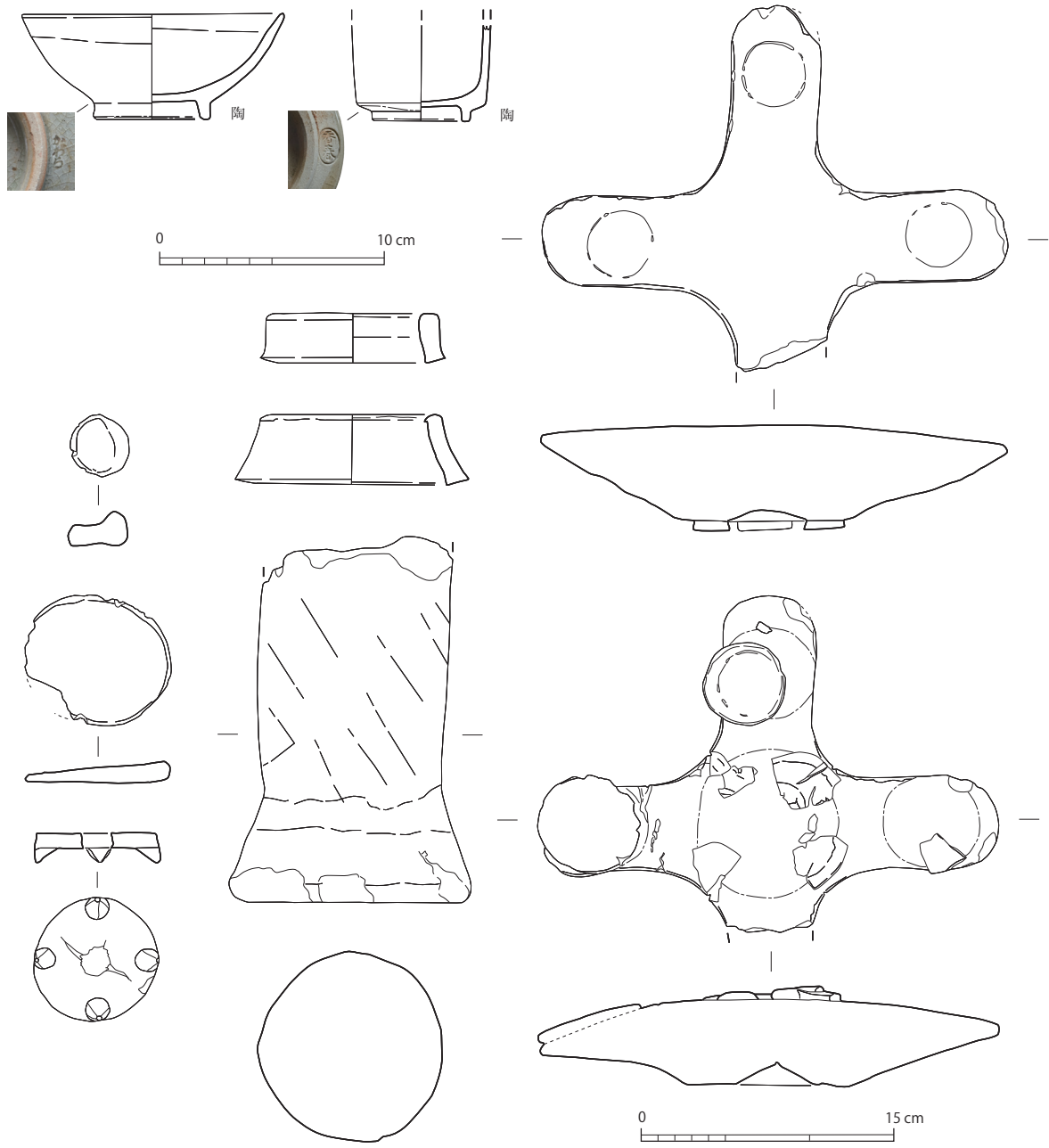
窯跡位置図 『田川』(1/25,000)



窯跡現況 (近景)



奥田儀三郎の墓



田香焼・香春焼窯跡出土遺物実測図（1/3・1/4）香春町教育委員会蔵



田香焼・香春焼窯跡出土遺物

豊前 14 田香焼窯跡

所在地：田川郡大任町堂原

経営：小倉藩

焼物名：今任田香焼

年代：寛政年間～明治

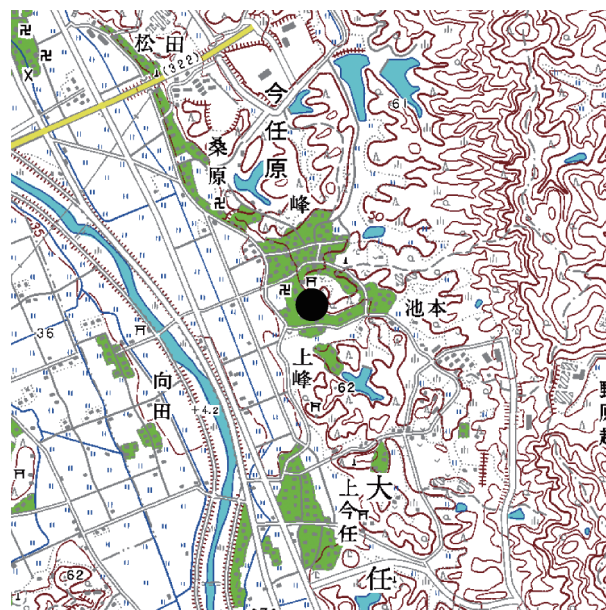
現況：竹林

備考：町 225 として周知化

上野焼の系譜に連なる窯跡。寛政 8 年 (1796) に成立した天草上田家文書『近国焼物山大概書上帳』に「藤原(堂原)皿山 窯一登 此数六間」「今藤(今任)皿山 窯一登 此数凡六七間」とし、「藤原(堂原)皿山」には 8 人の陶業者がおり、「楽焼師」が 1 人いたと記される。この記述から、寛政年間には開窯していたものと判断できる。終焉の時期は不明である。

彦山川右岸の標高 50m 程度の小丘陵南斜面に位置する。平成 6～8 年 (1994～1996) に大任町教育委員会によって発掘調査が行われ、2 基の窯が確認されている。1 号窯は全長 12～15 m 程の階段状連房式登窯で、焚口と焼成室 5 室がある。トンバイの使用は通焰孔、火あぜのみである。2 号窯は全長 10.5 m の階段状連房式登窯で焚口と焼成室が 3 室検出され、トンバイが壁材にも使用される。

碗・皿・鉢・すり鉢・片口・徳利等の日常雑器を主としていたが、小笠原藩茶道師範小市自得齋の指導のもと茶陶も焼いたという。上野焼に見られる象嵌や緑青釉の存在が知られる。また、少数ながら磁器を焼いていたことが判明している。窯道具にはトチン、ハマ、タコハマ、サヤ鉢などが見える。とくに、サヤ鉢に足のつく特異な窯道具が目目される。



窯跡位置図 『田川』 (1/25,000)

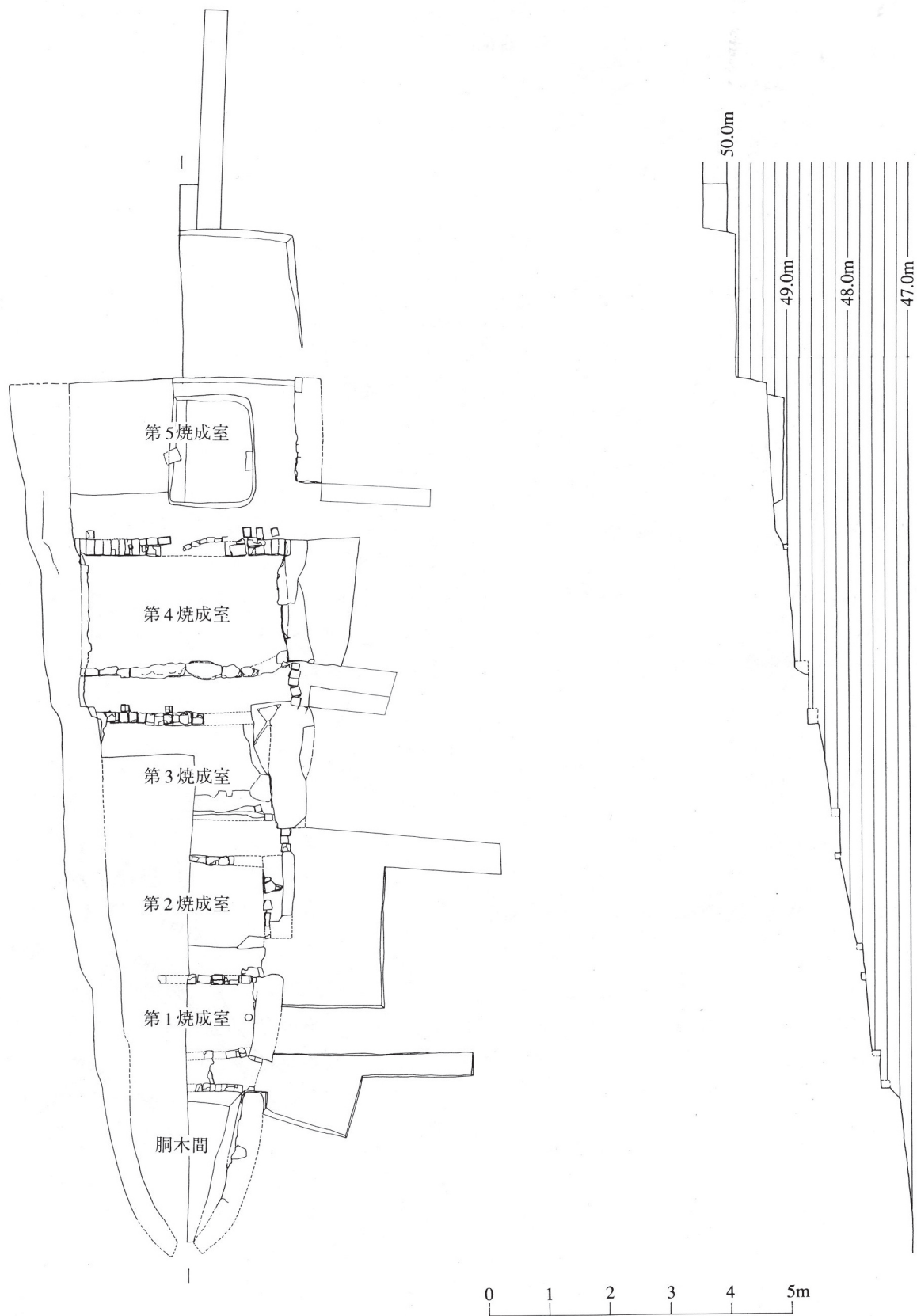


窯跡現況 (遠景)



窯跡 (調査時)

大任町教育委員会提供



田香焼 1 号窯跡実測図 (1/100)

豊前 15 乙子焼窯跡

所在地：京都郡みやこ町上高屋字乙子

経営：民窯

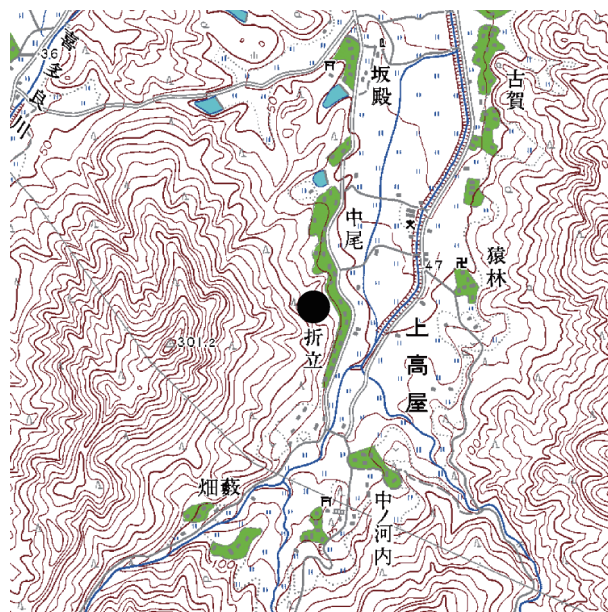
焼物名：乙子焼

年代：江戸時代

備考：町 910226 として周知化

近世の操業免許の記録があり、藩の奨励策に応じた開窯と考えられる（国作手永大庄屋日記 安政5年9月21日条）。

高屋川左岸の帝釈天山麓に所在する。山林に碗や鉢等の陶器片やトチン・ハマ等の窯道具、トンバイが散布する。連房式登窯とされるが、現況で窯体は確認できない。陶片の量は多くはなく、操業期間はそれほど長くない可能性がある。



窯跡位置図 『豊前本庄』 (1/25,000)



窯跡現況（遠景）

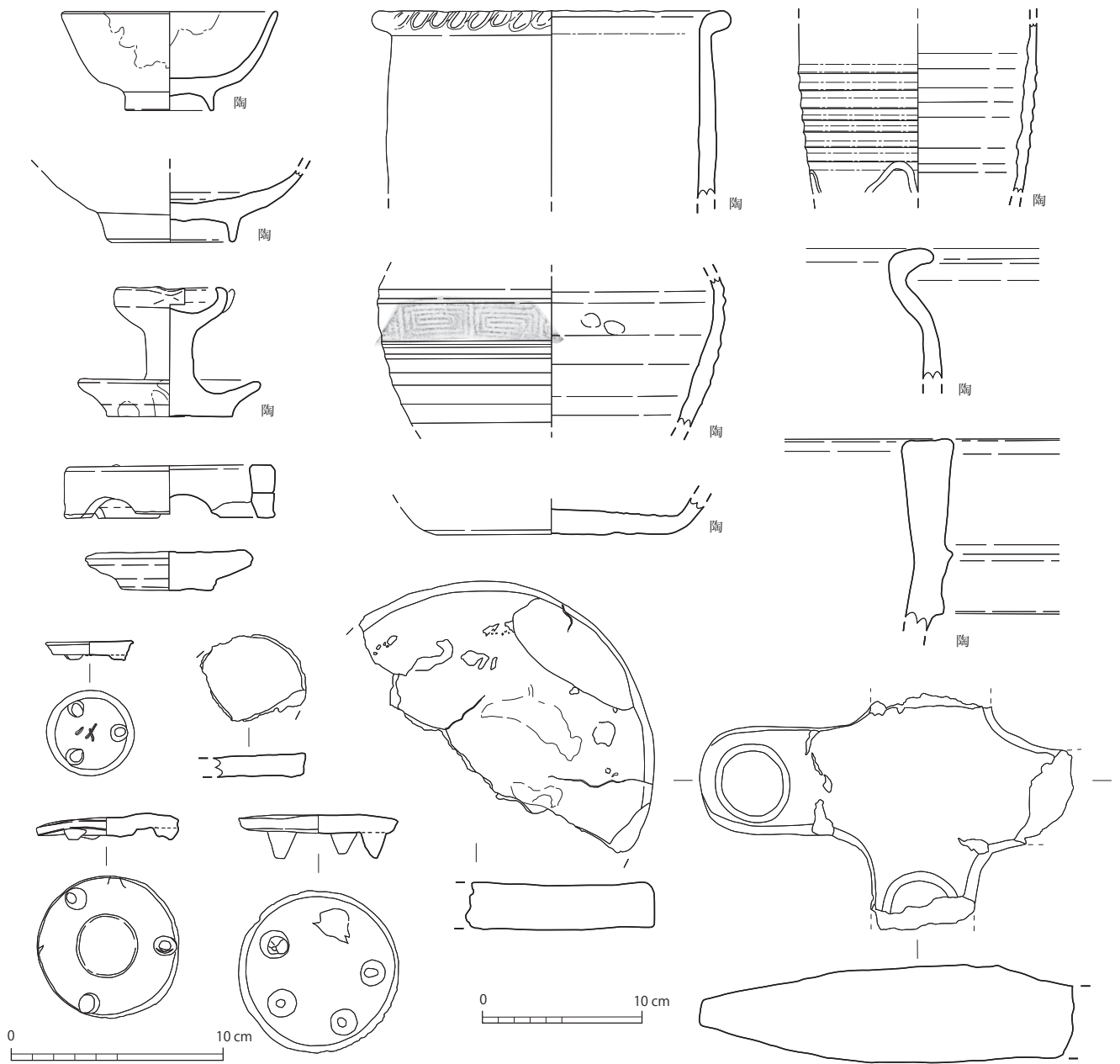


乙子焼窯跡出土遺物

犀川町教育委員会『城井遺跡群』（1992）所収分



窯跡現況（近景）



乙子焼窯跡出土遺物実測図（1 / 3 ・ 1 / 4）

九州歴史資料館所蔵



乙子焼窯跡出土遺物

豊前 16 錦原皿山窯跡

所在地：京都郡みやこ町大字豊津

経 営：民窯

焼物名：豊津焼

年 代：江戸後期？～明治

現 況：竹林

備 考：「石走り南遺跡」

町 920112、県 920140 として周知化

明治 2 年 (1869) 豊津開府の需要で瓦を焼いたとされる。

昭和 30 年 (1955)、豊津町遺跡調査で発見される。錦町と石走り西山麓に所在したとされるが、錦町のみ残るものと見られる。今川と祓川に挟まれた南北に延びる低丘陵上に位置する。

みやこ町歴史民俗博物館には小笠原家別邸「御内家」に葺かれていた瓦が保管されており、本窯で焼かれた可能性が高い。「皿山」の地名から、陶磁器を焼いた可能性もあるが、実態は明らかでない。



窯跡位置図 『行橋』 (1/25,000)



窯跡現況 (遠景)



小笠原家別邸「御内家」に葺かれた瓦

豊前 18 唐原焼窯跡

所在地：築上郡上毛町上唐原

経 営：

焼物名：唐原焼

年 代：

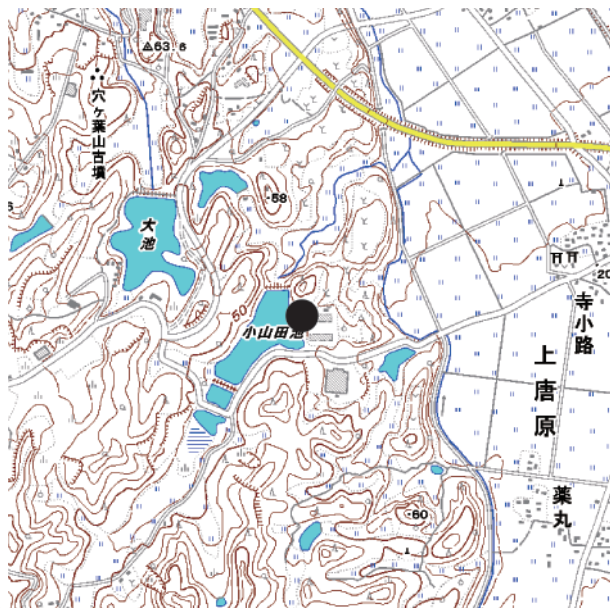
現 況：池

備 考：上毛町指定史跡

黒田長政が中津城に入った際に、高取焼陶工八山に焼かせたと伝わるが、採集資料からは古く溯るものは確認されない。

山国川左岸の低丘陵斜面に位置し、昭和 30 年 (1955) 頃に築造された池畔にある。階段状に窯の床面と判断される面が観察され、窯道具等が採取された。

採集資料は参考文献の報告書に紹介されているもの以外に、旧制福岡高等学校歴史地理資料室「玉泉館」にも所蔵されており、現在は九州大学総合研究博物館に収蔵されている。



窯跡位置図 『土佐井』 (1/25,000)



窯跡現況 (遠景)



窯跡現況 (近景)

IV 総括

1. 調査成果

(1) 調査表1

調査表1では筑前53件、筑後32件、豊前21件の総数106件の窯跡の情報を得た。それぞれの旧国別に状況をみている。

(筑前)すでに窯跡の所在が確認されているのは、16件である。それ以外に今回の現地踏査で窯跡を確認できたのは8件、現地で窯跡を確認できなかったが、窯跡の関連遺物を確認できたのが7件である。今回の調査で確認できなかった窯跡は18件で、その内2件は消滅していた。

筑前 53件

※()内は調査表1の番号

○確認されている窯跡 16件

発掘調査 16件		
永満寺宅間窯跡 (1)	上畑窯跡 (10)	須恵焼窯跡 (29)
内ヶ磯窯跡 (2)	千石窯跡 (11)	中野上の原窯跡 (32)
山田窯跡 (4)	犬鳴窯跡 (13)	火口谷窯跡 (33)
猪之鼻窯跡 (5)	能古焼窯跡 (16)	金敷様裏窯跡 (38)
白旗山窯跡 (8)	西皿山窯跡 (23)	一本杉窯跡 (39)
		釜床窯跡 (42)

○今回の調査で窯跡又は遺物を確認した窯跡 15件

窯跡 8件	遺物 7件
黒田窯跡 (6)	池の谷窯跡 (37)
野間焼窯跡 (27)	奥畑瓦窯跡 (41)
役所畑新窯跡 (30)	浄満寺窯跡 (47)
旧下組窯跡 (35)	
旧上組窯跡 (36)	
	野口窯跡 (7)
	東皿山窯跡 (22)
	宇美障子岳窯跡 (31)
	十文字窯跡 (40)
	鎌研窯跡 (43)
	三並ヒエデ窯跡 (46)
	野鳥窯跡 (48)

○今回の調査で確認できなかった窯跡 18件

不明 7件	参考文献からの情報 9件	現在も続く 4件
大鋸谷窯跡 (17)	山部窯跡 (3)	石崎焼 (49)
友泉亭窯跡 (18)	相田窯跡 (9)	糟尾焼 (50)
荒戸山窯 (19)	上野窯 (14)	
東松山窯 (20)	勝野峰畑窯跡 (15)	
田嶋窯 (21)	英一窯 (24)	
鳥飼茶屋窯 (25)	日明窯跡 (44)	
大明神窯跡 (34)	雷山窯跡 (45)	
		消滅 2件
		浅ヶ谷〔朝谷〕窯跡 (12)
		今川高取窯跡 (26)
		宗七焼窯跡ほか (28)
		津屋崎人形 (51)
		宰府瓦 (52)
		今宿人形 (53)

(筑後)発掘調査が行われたのは、現在の久留米市にある2件のみで少ない。現地調査を行い、陶器片や窯道具などを採集できた10件については、窯跡の所在を判断できた。今回の調査で確認できなかった

筑後 32件

○確認されている窯跡 2件

発掘調査 2件
朝妻焼窯跡 (3)
東野亭〔野中〕焼窯跡 (4)

○今回の調査で窯跡又は遺物などを確認した窯跡 10件

窯跡 5件	遺物 5件
一の瀬〔朝田〕窯跡 (1)	本星野焼窯跡 (15)
赤坂焼〔三原〕窯跡 (12)	星野十籠焼窯跡 (16)
釈形焼窯跡 (19)	鹿子生焼窯跡 (20)
二川〔後田〕焼窯跡 (25)	池の本焼窯跡 (21)
黒崎焼窯跡 (28)	男ノ子焼窯跡 (22)

○今回の調査で窯跡が確認できなかった窯跡 18件

不明 14件	参考文献からの情報 4件	現在も続く 2件
柳原焼窯跡 (2)	野町焼窯跡 (14)	赤石焼 (29)
十三部焼窯跡 (5)	田の原焼 (17)	鶴東焼 (30)
日渡焼窯跡 (6)	今村焼窯跡 (18)	繩山〔水繩〕焼 (31)
青木焼窯跡 (7)	浜口〔小保〕焼 (23)	建山焼 (32)
久留米焼 (8)	蒲池〔柳河〕焼窯跡 (24)	
田川焼窯跡 (9)	バカツクラ〔姥ヶ懐〕窯跡 (26)	
坂東寺〔熊野〕焼窯跡 (11)	伏部焼窯跡 (27)	
※石碑のみ		
		川瀬焼 (10)
		水田焼 (13)

た窯跡は 20 件になる。

なお、鹿子生焼窯跡は約 30 年前に窯跡を確認していたが、近年の災害で破壊され消滅していた。さらに坂東寺〔熊野〕焼窯跡は石碑のみで、窯跡は確認できなかった。それ以外の 18 件については窯跡を確認できなかった。

（豊前）すでに窯跡を確認できるのは 6 件、それ以外の 3 件については、陶器片や窯道具など採集でき、現地踏査で窯跡の存在を判断できた。その他、12 件については参考文献からの情報のみで、新たな情報は得られなかった。

豊前 21件

○確認されている窯跡 6件 ○今回の調査で窯跡又は遺物を確認した窯跡 3件

窯跡 6件（発掘調査5件）	窯跡又は遺物 3件
菜園場窯跡（1）	田香焼〔高野〕窯跡（13）
釜ノ口窯跡（4）	乙子焼窯跡（15）
皿山本窯跡（6）	錦原皿山窯跡（16）
岩屋高麗窯跡（9）	
田香焼〔今任〕窯跡（14）	
唐原焼窯跡（18）	

○今回の調査で確認できなかった窯跡 12件

参考文献から情報 12件		
小倉清水焼（2）	吉右衛門谷窯跡（10）	太郎助楽焼（20）
高保窯（3）	甲賀焼〔幸賀窯〕（11）	水町焼（21）
カンバ窯跡（5）	鳩軒（12）	
山ノ神森ノ下窯跡（7）	添田皿山（17）	
かくし窯跡（8）	常山焼（19）	

○参考資料

参考資料として、明治～昭和時代にかけて窯業に関わる工場についても情報（p36～p45）を掲載している。この時代の窯業関連工場では、主に植木鉢、七輪、瓦、煉瓦、陶管、土管、衛生器、^{がいし}碍子などを製造していた。主に『筑前国続風土記』『筑前国続風土記付録下巻』『工場通覧』『全国工場通覧』『工学博士北村彌一郎窯業全集』などの参考文献と市町村からの情報により、筑前 72 件、筑後 100 件、豊前 9 件の総数 181 件が確認された。

筑前では、件数の多い順に現在の自治体別にみていくと、福岡市 22 件、遠賀郡芦屋町 8 件、北九州市 6 件、太宰府市 5 件、朝倉市 4 件、古賀市 4 件、遠賀郡遠賀町 4 件、遠賀郡水巻町 4 件、糸島市 3 件、飯塚市 2 件、宗像市 2 件、糟屋郡粕屋町 2 件、以下、大野城市、筑紫野市、嘉麻市、宮若市、糟屋郡志免町が各 1 件存在した。

福岡市では、市内の西新町や野間で、高取焼や野間焼の関連で植木鉢、陶管、煉瓦を製造していた。また遠賀町、水巻町、芦屋町では瓦製造の件数が 16 件と多く、この地域は瓦産業が盛んであったことが窺え、水巻町の副田瓦工場（56）は嘉永 4 年（1851）の開業との情報があるが、詳細については不明である。なお、江戸時代に始まる瓦製造は太宰府市（40～42・44）に、4 件ある。

筑後では久留米市 58 件、みやま市 24 件、柳川市 8 件、大牟田市 3 件、八女市 1 件、三潞郡大木町 6 件で、主に瓦製造が多い。筑後では江戸時代後期頃と考えられる日渡瓦窯跡（17）や明治時代～昭和時代にかけて善導寺で使用されたと考えられる善導寺瓦窯（18・19）がある。また久留米市城島地区の瓦は、城島瓦と呼ばれ、江戸時代から現在に至るまで瓦が製造されている。なお久留米市の一部地域で煉瓦・陶管、大牟田市では磁管が製造されていた。

豊前では、他の地域より情報が少ない。北九州市5件、豊前市2件、田川郡糸田町1件、田川郡大任町1件の9件であり、工場では衛生器、煉瓦、瓦を製造していた。なお豊前では、豊前市（8・9）で江戸時代及び明治2年（1869）から瓦製造が行われていた。

（2）調査表2

調査表2については、主に『筑前国統風土記拾遺』、『日本近世窯業史』の情報により、窯業の関連遺構として、筑前42件、筑後8件、豊前6件と総数56件を確認した。

筑前では、種別1（陶土の採掘地・磁石場など原料の採集地や集積地）について、土取り跡3件、原土や釉薬に関わる採掘地21件の情報を得た。詳細な場所までは確認できなかったが、これらが関連する焼物としては、高取焼、小石原焼、瓦町焼、野間焼、博多人形に関連すると想定される。時代は江戸時代が中心だが、明治以降のものもある。種別4（古陶磁生産に関連する神社・記念碑・墓地〔墓碑〕）の関連としては、近年に作られた窯跡の石碑が3件（永満寺宅間窯跡、内ヶ磯窯跡、山田窯跡）、陶工の墓石及び慰霊碑が6件あった。なお、陶神や火の神様、土神様など窯業に関連する石碑3件は、『小石原村史』に記載がある。その他、窯業に関連する神社は2件で、天照太神宮（高取焼）、皿山山王神社（野間焼）があたる。

筑後では、4についての情報が8件あった。その内、赤坂焼、坂東寺焼、水田焼、男ノ子焼、池の本焼、二川焼の石碑などが7件、星野焼の陶工の墓が1件ある。

豊前では、種別1の原土の採掘地が2件、種別4の上野焼の石碑が2件、陶工の墓が2件を確認した。陶工の墓2件の内、1件は田香焼（香春町）の陶工の墓である。

2. 福岡県における近世の窯跡と窯道具について

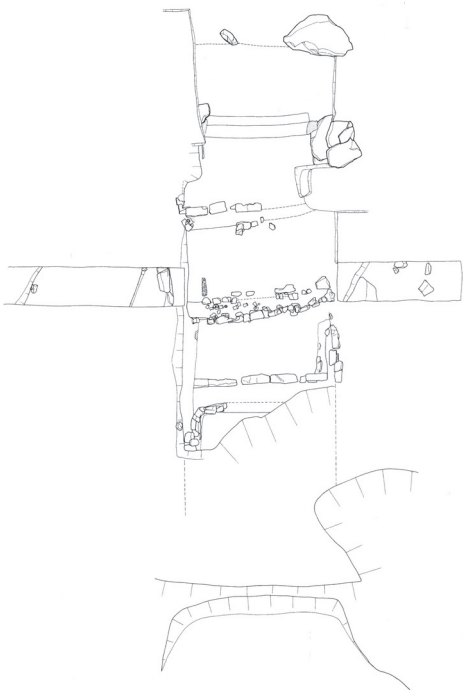
（1）窯構造

p149に掲げた表はこれまで発掘調査が行われた窯跡の調査成果をまとめたものである。（註1）

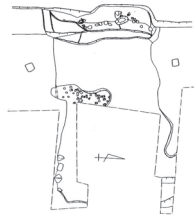
焼成室の計測値サンプルの検出方法については、『考古学ライブラリー 肥前陶磁』（大橋1989）を参考にし、先に今回調査した窯跡のデータを加え、それぞれの窯の形状の特徴を示す胴木間から焼成室4室前後の1室の計測値で比較した。

福岡県での窯跡の構造は、割竹式登窯と階段状連房式登窯の2種類に限られる。今のところ、肥前などで見られる単室登窯は検出されていない。県内で発掘調査が行われた近世窯業遺跡は佐賀県に比べると非常に少ないが、高取焼系窯跡では、時代順で永満寺宅間窯跡（筑前1）、上畑窯跡（筑前10）、千石窯跡（筑前11）、内ヶ磯窯跡（筑前2）、白旗山1号窯跡（筑前8）、犬鳴1号窯跡（筑前13）、釜床1号窯跡（筑前42）、一本杉1・2号窯跡（筑前39）、中野上の原窯跡（筑前32）、火口谷1・2号窯跡（筑前33）、金敷様裏3号窯跡（筑前38）がある。上野焼系窯跡では、釜ノ口窯跡（豊前4）、菜園場窯跡（豊前1）、田香焼1・2号窯跡（豊前14）、それ以外の窯跡として朝妻焼窯跡（筑後3）、東野亭焼窯跡（筑後4）などがある。ただ発掘調査が行われた釜ノ口窯跡・一本杉1号窯跡・金敷様裏3号窯跡は概要報告のみ、上畑窯跡については未報告である。

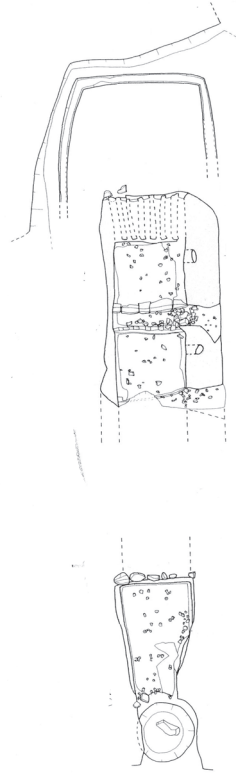
以上の調査結果を分析する上で、副島邦弘、大橋康二、野上建紀の3人の先行研究が参考になる。副



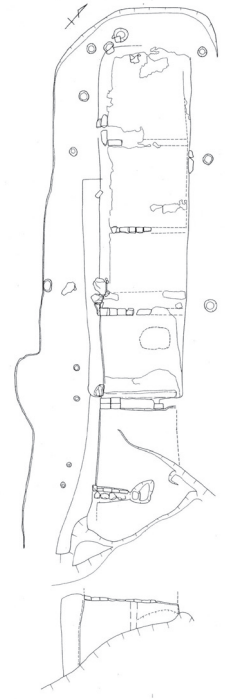
1 永満寺宅間窯跡



2 上畑窯跡



6 菜園場窯跡

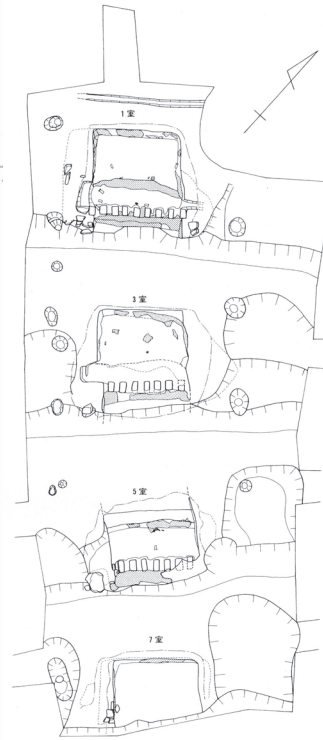


8 犬鳴1号窯跡

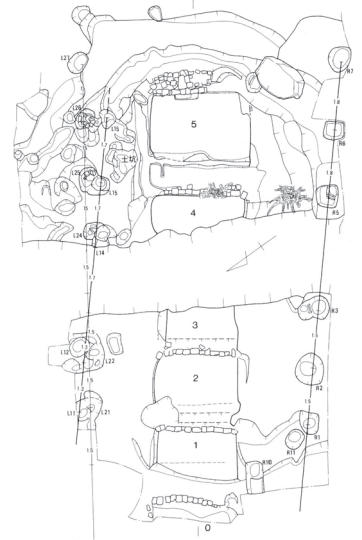


4 釜ノ口窯跡

5 内ヶ磯窯跡



7 白旗山1号窯跡

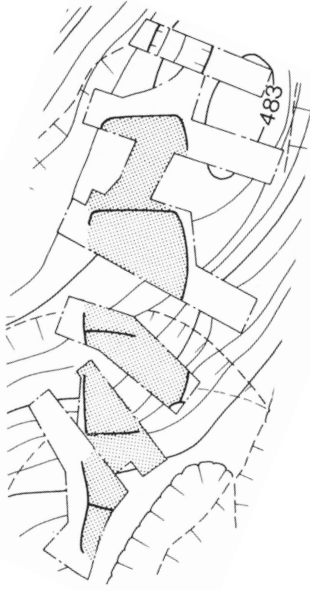


9 釜床1号窯跡

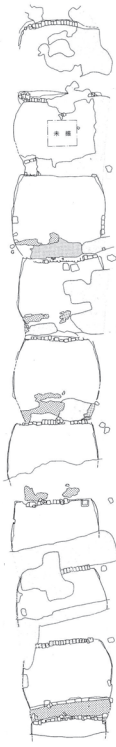


3 千石窯跡

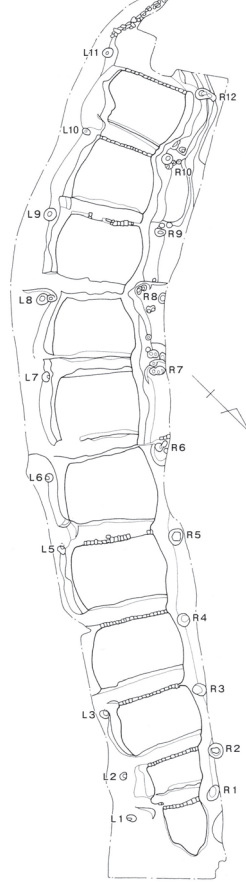




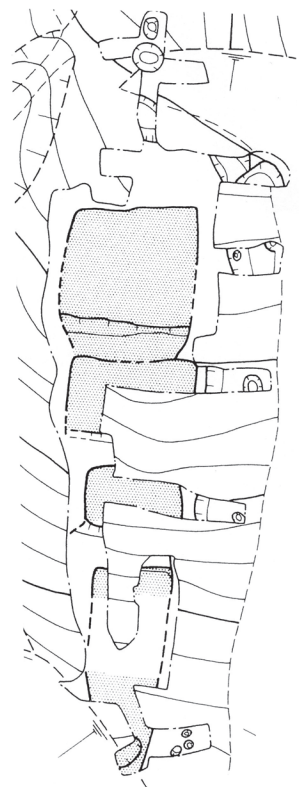
10 一本杉 1号窯跡



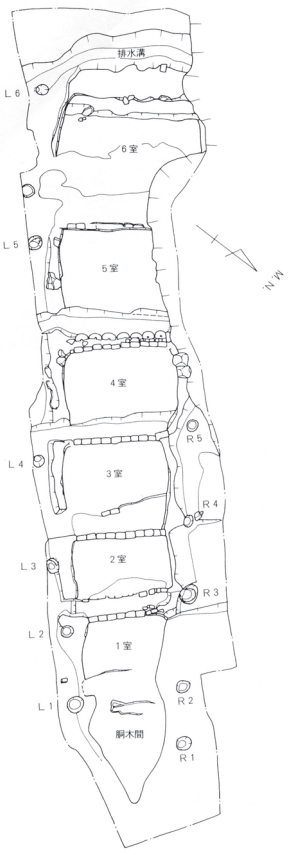
12 中野上の原窯跡



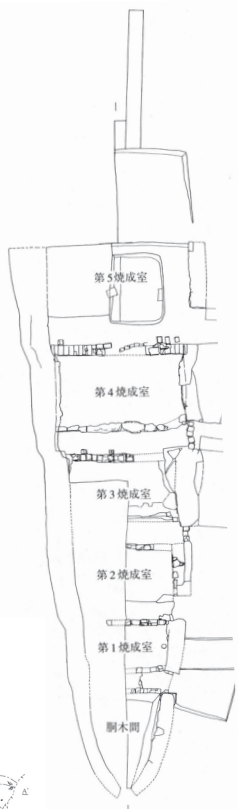
13 火口谷 1号窯跡



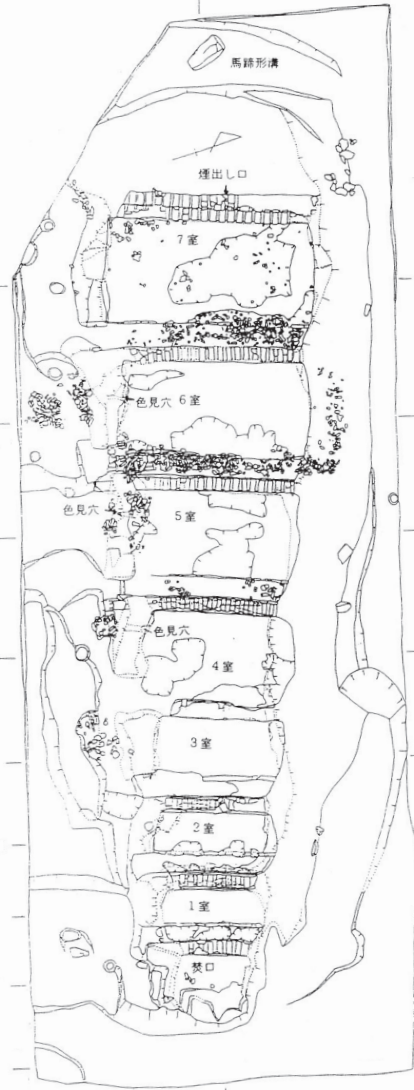
15 金敷様裏 3号窯跡



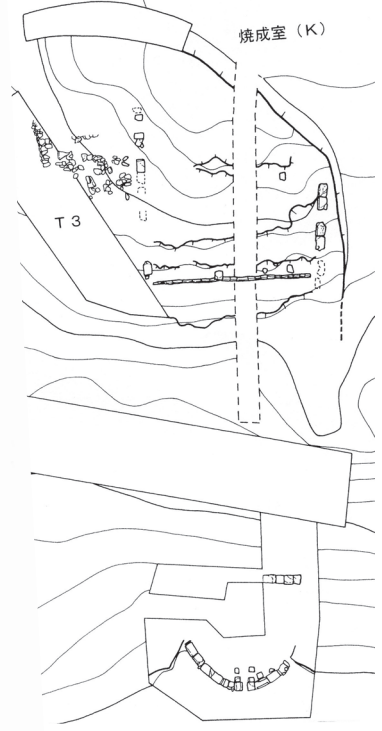
11 一本杉 2号窯跡



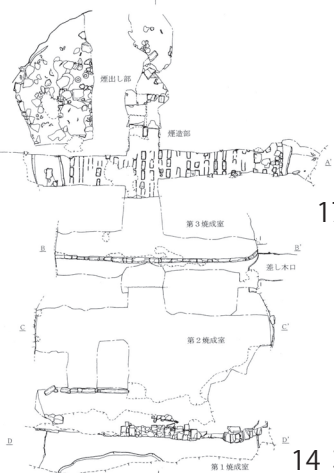
17 田香焼 1号窯跡



16 能古焼窯跡



19 東野亭焼窯跡



14 朝妻焼窯跡

島（副島 1983）は、福岡県内の窯跡を3つの登窯（割竹型登窯、半地下式階段状連房登窯、割竹型階段状連房登窯）に分類した。大橋は焼成室の平均幅・奥行きを計測して6つのグループに分け、そのグループごとに出土した窯道具を分類した（大橋 1989）。さらに『福岡の陶磁』で、福岡県の17世紀～18世紀の窯跡の位置付けを行った（大橋 1992）。野上建紀は『肥前の築窯技術の伝播について』（野上 2006）で、肥前でみられる3つの窯構造（単室登窯、割竹式登窯、階段状連房式登窯）から福岡県で検出された窯について分類した。これらの考察を踏まえて、今回、窯構造・窯道具という2つの視点から本県の特徴について考えたい。

○割竹式登窯

割竹式登窯の外観は竹を二つに割って伏せたような形状で、内部は竹の節に当たるところが間仕切りの隔壁になり、天井はアーチ型で、蒲鉾形となる。火はその隔壁に設けた通焰孔により窯内を巡る。また室と室との境は段差が小さい。平面は縦長形又は正方形で、中軸線は焚口から窯尻まで直線である。

県内の割竹式登窯の代表的な窯跡は、永満寺宅間窯跡と菜園場窯跡である。窯の形状はいずれも直線であるが、焼成室の形状は永満寺宅間窯跡で幅3.5 m前後の広い横長形で段差はないが、菜園場窯跡は奥行2 mを超える縦長形で段差があり、室の形状や大きさ、段差の有無で違いが認められる。

これ以降の割竹式登窯とされるのは17世紀後半の犬鳴1号窯跡がある。窯の形状は直線で、室の形状は正方形である。焼成室の大きさは2.6 mと菜園場窯跡の幅1.8 mよりやや大きく段差がある。菜園場窯跡とは焼成室の大きさで異なるものの、焼成室の形状や段差の有無などから犬鳴1号窯跡に影響を与えた可能性がある。

さらに上畑窯跡も割竹式登窯の可能性がある。焼成室1室程度の調査であるが、幅2.7 m、奥行3.9 mを測る縦長形の焼成室1室を確認した。

○階段状連房式登窯

階段状連房式登窯は、山腹の傾斜に添って地上にアーチ状の燃焼室を連ねた窯である。焼成室の境は段差を階段状に設け、平面は梯形で、中軸線は各室で異なる。

階段状連房式登窯は、県内では17世紀初頭～前半の釜ノ口窯跡と内ヶ磯窯跡が古いが、17世紀初頭の釜ノ口窯跡が若干先行する。両窯の形状は焼成室が連なる直線状で、焼成室の形状は横長形で、幅が釜ノ口窯跡で2.0～3.4 m（註2）、内ヶ磯窯跡で幅3 m前後となる。内ヶ磯窯跡の焼成室幅と近い窯として千石窯跡では、残存幅2.8 mを測る。この後、17世紀前半～中頃の白旗山1号窯跡で幅2.1 m前後、17世紀中頃～後半の釜床1号窯跡は幅2.0～2.6 mで正方形となる。

17世紀後半の一本杉2号窯跡以降の焼成室の平面形はまた横長形に変化し、肥前の陶工と関連があるとされる中野上の原窯跡は胴張り横長形となり、焼成室の大きさもこれまでの約3 m以下から4 m以上と、1 m以上大きくなる。18世紀前半の朝妻焼窯跡ではこの傾向が拡大し、幅6.1 mを測る焼成室も登場する。

なお、一本杉2号窯跡以降は窯の形状が直線であったものが、胴木間から徐々に焼成室が大きくなって行く扇形へと変わる（註3）。扇形の窯跡の胴木間～焼成室4室までの横幅は、一本杉2号窯跡で2.05～3.05 m、火口谷1号窯跡で2.85～4.7 m、田香焼1号窯跡で2.2～3.5 m、金敷様裏3号窯跡で2.1～3.5 m、能古焼窯跡で2.68～4.0 m、須恵焼新窯で2.0～3.4 m（註4）と1～2 m横に広がって

扇形になる。

また窯構造では遺構の残存状況に差異はあるが、各窯跡におけるトンバイ（直方体をなす窯体材）の使用が鍵となる。トンバイは、永満寺宅間窯跡～白旗山1号窯跡の17世紀前半までは通焰孔のみ使用されたものが、17世紀後半の犬鳴1号窯跡以降では焼成室の奥壁全体に使用範囲が広がる。さらに18世紀後半の能古焼窯跡ではトンバイの使用が焼成室5～7室に限定されるが、最も新しい19世紀中頃の東野亭焼窯跡では胴木間や焼成室の奥壁に加え、側壁にもトンバイが使用されており、この頃にはトンバイの窯での使用範囲が広がる。

以上、福岡県の近世窯跡構造の特徴をまとめると、下記の通りとなる。

- ・割竹式登窯は17世紀初期から始まり、17世紀後半の犬鳴1号窯跡以後は姿を消す。
- ・階段状連房式登窯は、17世紀初頭の釜ノ口窯跡、やや遅れて内ヶ磯窯跡から始まる。
- ・階段状連房式登窯の焼成室の形状は当初、横長形から正方形へ、その後横長形へと変化する。
- ・横長形へと変化した焼成室は、17世紀末の肥前の陶工と関連がある中野上の原窯跡から胴張り横長形となる。
- ・窯の形状は直線から扇形へ変化する。扇形は17世紀後半の一本杉2号窯跡から始まり、これ以降は扇形となる。
- ・トンバイの使用範囲が17世紀後半以降、通焰孔のみの使用から奥壁全体へと変わる。19世紀中頃の東野亭焼窯跡では焼成室全体に使用範囲が広がる。

（2）窯道具

福岡県内の近世窯跡からは、トチン・ハマ・サヤ・シノ・チャツ・ダンゴ（ダゴ・団子状）などの窯道具が出土しており、この様相から窯の変遷を追うことができる。

17世紀初期の永満寺宅間窯跡ではトチン、ハマのみだが、内ヶ磯窯跡ではシッタ、ハマ、トチン、輪ドチ2点が出土する。この輪ドチは茶入れなどを焼くために使用されたとの指摘がある（註5）。この後に続く白旗山1号窯跡・釜床1号窯跡でも茶器が作られており、ドーナツ状焼台（輪ドチ）の出土が報告されている。菜園場窯跡ではトチン、ハマ、クサビ形焼台かと思われる1点が出土する。

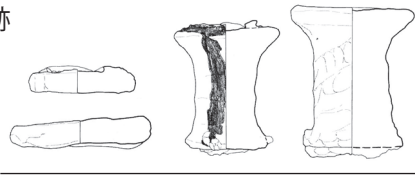
17世紀後半の犬鳴1号・2号窯跡、釜床1号窯跡、一本杉2号窯跡の共通のものとしてトチン・ハマ・クサビ形焼台（※釜床1号窯跡では出土していない）が出土する。これ以外のものとして釜床1号窯跡では桶胴形サヤ、棒状・ドーナツ状焼台（輪ドチ）・円盤状焼台などが出土する。桶胴形サヤは白旗山1号窯跡でも出土する。同時期の一本杉2号窯跡ではシノやチャツの出土がある。チャツは肥前の影響を受けた窯道具との指摘があり（註5）、1650年以降に出現するチャツが一本杉2号窯跡、中野上ノ原窯跡、火口谷1・2号窯跡で出土する。17世紀末には、中野上の原窯跡で断面が逆台形状になるハマが出土する。他にも磁器製のハマ・チャツもあるが、この時期唯一磁器生産を行った中野上の原窯跡でしかみられない。またトチンに押印、スタンプ、ヘラ書きを施したものは中野上の原窯跡、火口谷1号窯跡で出土する。

18世紀前半の朝妻焼窯跡ではトチン・逆台形ハマ・チャツ・シノ・サヤが出土する。ここでは磁器も焼かれていることから磁器製のチャツも出土する。

18世紀中頃～後半にかけては、窯跡の報告書が刊行されておらず、詳細は不明である。

18世紀末～19世紀中頃の窯跡では田香焼1号窯跡では、タコハマ（3足・4足・6足）、目、トチン、

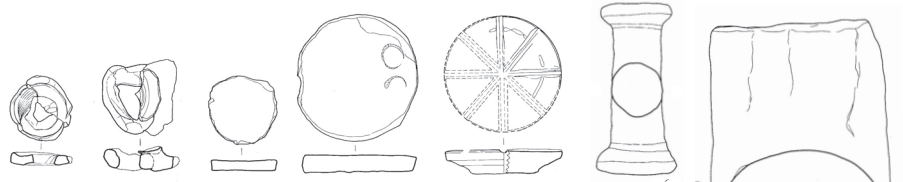
永満寺宅間窯跡
17世紀初頭～



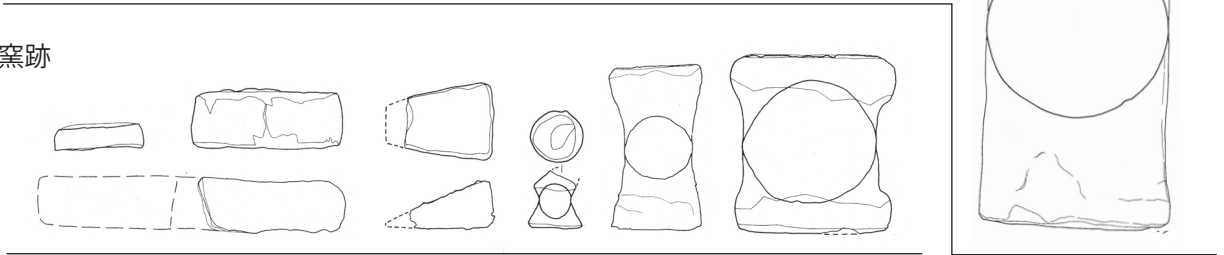
0 10cm

0 15cm

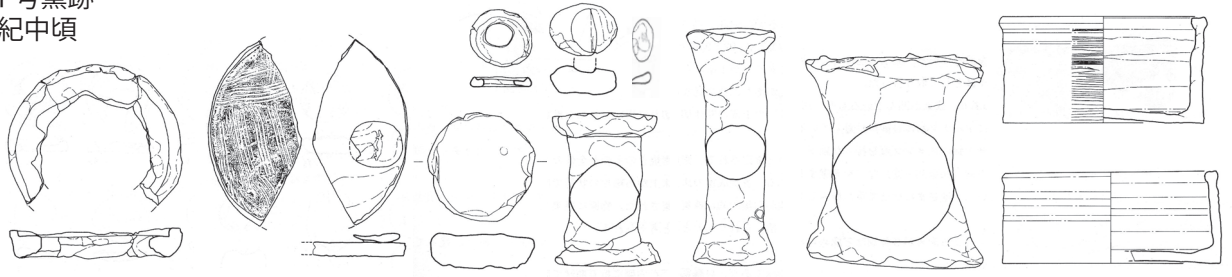
内ヶ磯窯跡
17世紀前半～



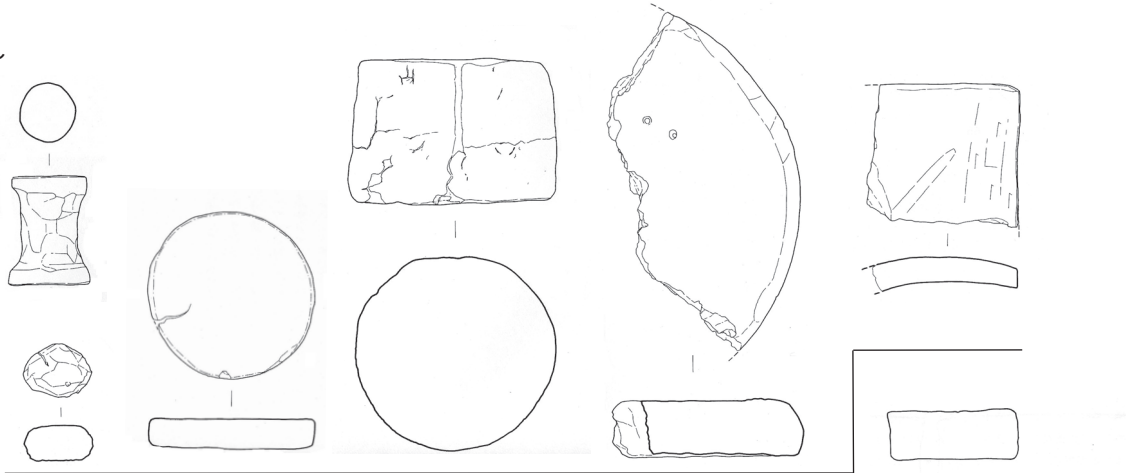
菜園場窯跡



白旗山1号窯跡
～17世紀中頃



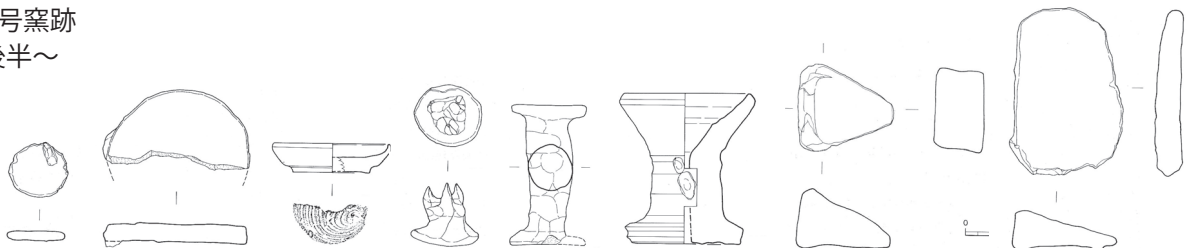
犬鳴1号窯跡
17世紀中頃～



釜床1号窯跡

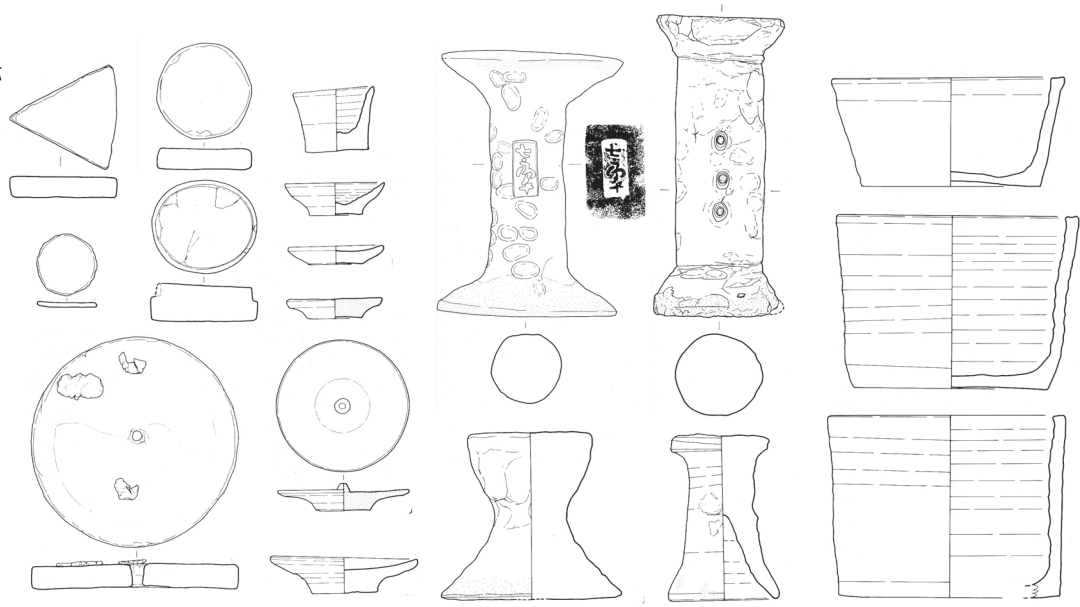
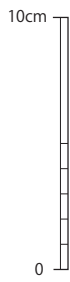


一本杉2号窯跡
17世紀後半～

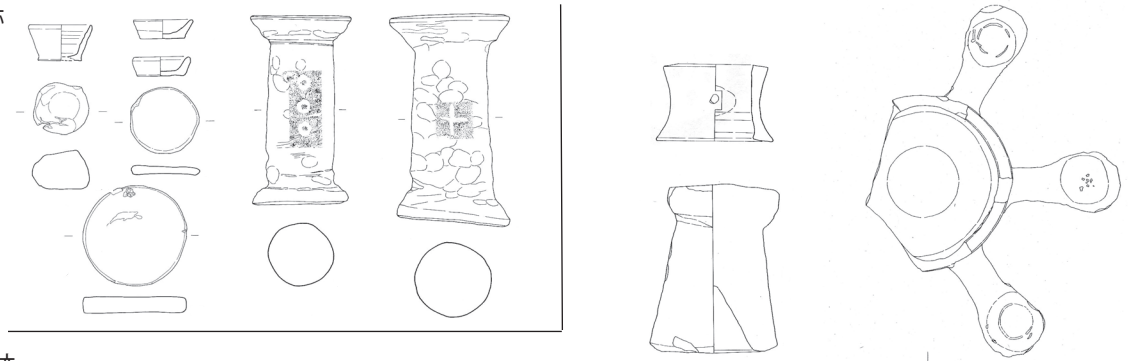


窯道具変遷図1 (1/3、1/4)

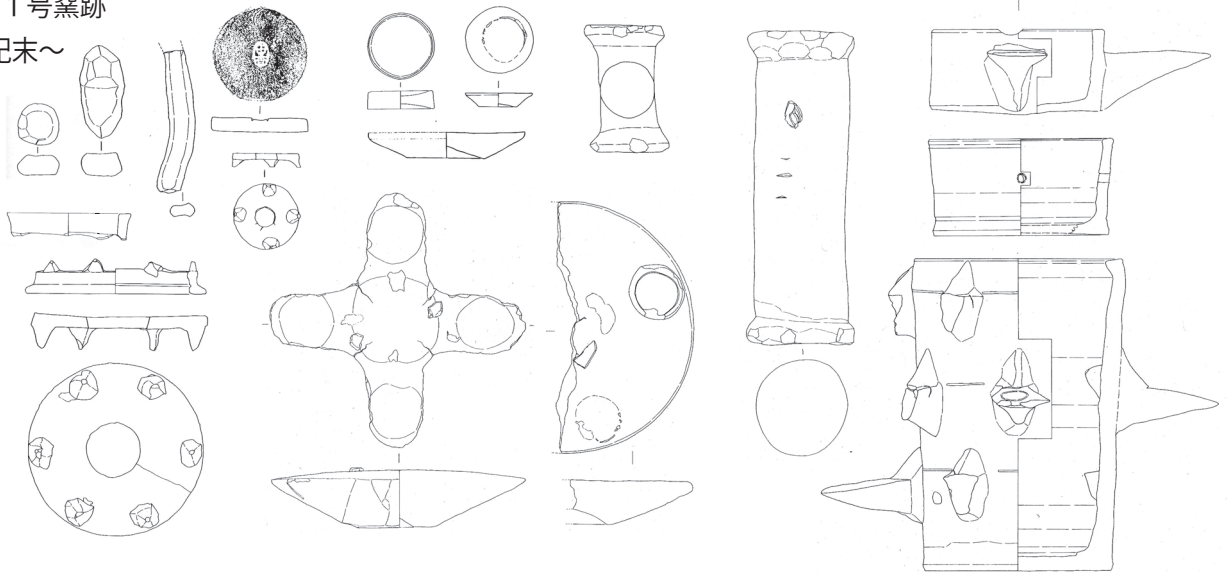
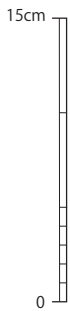
中野上の原窯跡
17世紀後半～



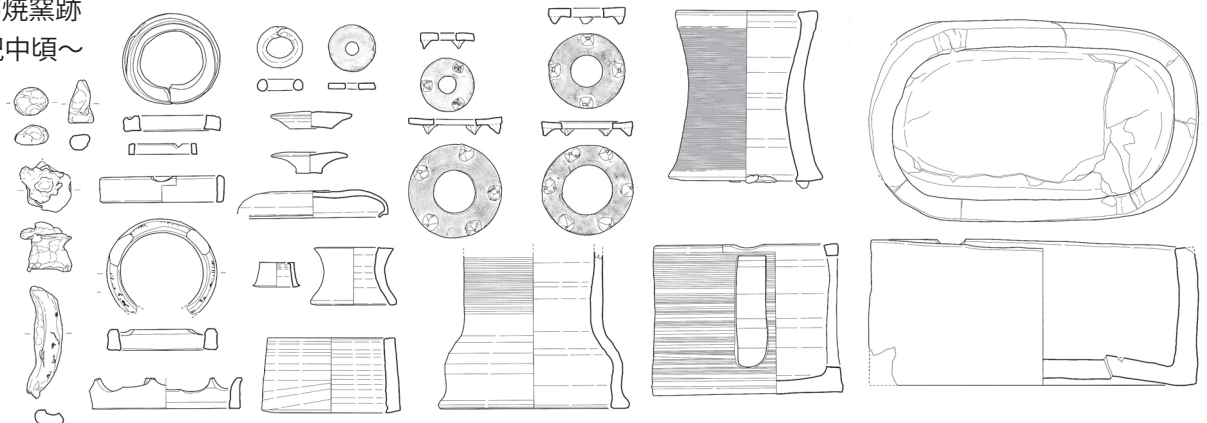
火口谷1号窯跡
～18世紀前半



田香焼1号窯跡
18世紀末～



東野亭焼窯跡
19世紀中頃～



窯道具変遷図2 (1/3、1/4)

足付ハマ、環状（冠状）焼台、テンビン、脚付サヤなどの窯道具がみられる。環状（冠状）焼台や脚付けサヤは、肥前でみられない窯道具で、今のところ福岡県内では最古である。その他にタコハマは役所畑新窯跡、野口窯跡、三並ヒエデ遺跡、鹿子生焼窯跡のように筑前及び筑後で出土する。また脚付サヤについては、猪之鼻窯跡と黒田窯跡で今回の調査の際に採集された。脚付サヤ・環状（冠状）焼台についても肥前に類例がないことから、18世紀末以降に関西など他地域からの技術の流入も考える必要がある。

続く19世紀中頃の東野亭焼窯跡では、輪ドチ、ダンゴ、ハマ、逆台形ハマ、足付ハマ、環状（冠状）焼台、ツク、桶型サヤ、楕円形サヤ、支脚、焼台など多様な窯道具が出土するが、トチンやチャツの出土はない。ここで出土する環状（冠状）焼台と類似のものが、19世紀前半の赤坂焼窯跡でも表採しており、東野亭焼窯跡と赤坂焼窯跡との関連が窺える。

なお、上記の窯道具の流れは、大橋の区分（大橋1989）に照らし合わせても、肥前との時期的な相違はそこまで大きくないが、環状（冠状）焼台、脚付サヤなど肥前に見られない窯道具もあり、18世紀末以降に他地域からの技術流入も想定しうることが福岡県の窯道具の大きな特徴の一つである。

（3）窯跡の時期

今回の調査及び既刊報告書と文献史料から福岡県内の初期の窯については、割竹式登窯の高取焼系窯跡である永満寺宅間窯跡、上野焼系窯跡である釜ノ口窯跡と菜園場窯跡があり、17世紀初頭に開窯し、閉窯は17世紀前半に収まる。

永満寺宅間窯の開窯は『高取歴代記録』による慶長5年（1600）説と『皿山役所記録』の慶長10年（1605）がある。菜園場窯跡は初代小倉藩主、細川忠興の小倉入部の慶長7年（1602）の時期以降を根拠にして慶長8年（1603）開窯と考えられていたが、2代細川忠利のお楽しみ窯の可能性が高く、クサビ形焼台など他の窯道具の出土はそのことを示す。釜ノ口窯跡に係る文献史料はないが、尊階一族により始められたとされることから慶長7年（1602）開窯と考えられている。これ以降、階段状連房式登窯の内ヶ磯窯跡が営まれる。内ヶ磯窯跡について『高取歴代記録』と『筑前国続風土記』では、慶長19年（1614）に開窯したとする。続く寛永元年（1624）には、内ヶ磯窯を営んだ高取八蔵らが福岡藩主2代黒田忠之の逆鱗に触れ山田村（山田窯跡）へ追放されるが、藩主の許しを得て白旗山に寛永7（1630）年に移る。17世紀後半には、犬鳴皿山に住む新四郎により犬鳴1・2号窯跡が寛文年間（1661～1673）に開窯し、貞享4年（1687）に藩の命令により閉窯する。

『高取歴代記録』によると同時期には小石原鼓（釜床1号窯跡）で、2代高取八蔵貞明が寛文5年（1665）に開窯し、元禄17年（1704）には閉窯する。さらに『高取歴代記録』では、寛文9年（1669）に小石原中野皿山に高取八之丞が移り住むとあり、その窯が一本杉1・2号窯跡と想定される。小石原中野では、『筑前国続風土記』によると天和2年（1682）にも肥前の陶工が来て陶器を作るとされ、これが中野上の原窯跡の開窯の時期を指すと考えられる。この閉窯については紀年銘のある土管の出土から、享保7年（1722）と考えられ、操業期間としては17世紀末～18世紀前半と考えられる。

これ以後の窯については、朝妻焼、能古焼、田香焼、東野亭焼が文献史料に記されている。そのうち朝妻焼窯跡については、『石原家記』では正徳5年（1715）に6代久留米藩主が有田・伊万里の陶工を招いて開窯したと記録される。

能古焼窯跡については『筑前国続風土記附録』によると「明和の比より此の島にて陶器を製す」とあ

福岡県の各窯概要

窯跡名	造り	窯の形状	全長 (m)	傾斜角	室数	室の形状	焼成室計測サンプル			段差	トンバイ使用	文献等の時期	考古地磁気測定 推定年代	備考
							室番号	幅 (m)	奥行 (m)					
1 永満寺宅間窯跡	割竹式登窯	直線	16.6	11° 30'	6	横長形	4	3.5	2.15	なし	通焰孔のみ	慶長5年 (1600) ~ 寛永元年 (1624)	AD1595 ± 15	
2 上畑窯跡	割竹式登窯	直線?	3.9+			縦長形		2.7	3.9			17世紀初頭?		永満寺宅間窯跡と同時期か
3 千石窯跡	階段状連房式登窯?								2.8+			17世紀前半?	AD1640 ± 20	永満寺宅間窯跡と同時期か
4 釜ノ口窯跡	階段状連房式登窯	直線	41 (42.5)	10~18°	15	横長形	4	3	2.6	あり	通焰孔のみ	慶長7年 (1602)		尊隆一族により始まる
5 内ヶ磯窯跡	階段状連房式登窯	直線	46.5 + α	19°	14	正方形	4	3	3.1	あり	通焰孔のみ	慶長19年 (1614) ~ 寛永元年 (1624)	AD1610 ± 30 AD1700 ± 30 AD1700 ± 50 AD1590 ± 30	
6 菜園場窯跡	割竹式登窯	直線	約16.6	約15°	4	縦長形	4	1.8	2.3	あり	通焰孔のみ	慶長8年 (1603) ~ 元和5年 (1619)	AD1630 ± 25	
7 白旗山1号窯跡	階段状連房式登窯	直線	25前後	19°	10前後	正方形	3	2.15	2	あり	通焰孔のみ	寛永7年 (1630) ~ 17世紀後半	AD1630 ± 20	
8 大鳴1号窯跡	割竹式登窯	直線	18.5 + α	12°	8 + α	正方形	4	2.6	2.6	あり	各室奥壁のみ	寛文年間 (1660~1673) ~ 貞享4年 (1687)	AD1550 ± 50 AD1580 ± 30 AD1650 ± 20 AD1440 ± 15 AD1710 ± 30	大鳴血山に住む新四郎が焼く
9 釜床1号窯跡	階段状連房式登窯	直線	11 + α	10° 48'	6 + α	正方形	5	2.6	2.6	あり	各室奥壁のみ	寛文5年 (1665) ~ 元禄17年 (1704)	AD1440 ± 15 AD1710 ± 30	高取八蔵貞明 (2代目) が白旗山より移る
10 一本杉1号窯跡	階段状連房式登窯	直線	13 + α		4 +	正方形	4 ?	2.6	2.6		各室奥壁のみ	17世紀後半		
11 一本杉2号窯跡	階段状連房式登窯	直線	20	10°	6	横長形	4	2.95	2.35	あり	各室奥壁・通焰孔・火アゼ	寛文9年 (1669)	AD1680 ± 30 AD1720 ± 30	新之丞が中野に移った時の窯か?
12 中野上の原窯跡	階段状連房式登窯	直線	38.7 + α	12°	10	胴張り横長形	4	4.55	3.9	あり	各室奥壁のみ	天和2年 (1682) ~ 享保7年 (1722)	AD1700 ± 15	
13 火口谷1号窯跡	階段状連房式登窯	弓なり 扇形	42	8°	10	胴張り横長形	4	4.7	4.4	あり	各室奥壁のみ	18世紀前半~中頃		
14 朝妻焼窯跡	階段状連房式登窯	扇形	8.8 (約40)		3 (9)	胴張り横長形	2 (8?)	6.1	4	あり	各室奥壁及び側壁の一部	18世紀前半		6代久留米藩主が有田・伊万里の陶工招いて築く
15 金数様裏3号窯跡	階段状連房式登窯	扇形	15	12° 30'	4	胴張り横長形	4	3.5	3.1		各室奥壁のみ	18世紀中~後半		
16 能古焼窯跡	階段状連房式登窯	扇形	22		7	胴張り横長形	4	4	2.4	あり	5~7室奥壁のみ	明和~天明年間 (1764~1787)		
17 田首焼1号窯跡	階段状連房式登窯	扇形	12 (15)	13°	4 (5)	胴張り横長形	4	3.4	2.6	あり	通焰孔・火アゼ	寛政年間 (18世紀末) ~ 明治維新前後	AD1810 ± 25	文政11年 (1828) 十時甫紹の弟子啓吉が開窯
18 須恵焼窯跡 (新窯)	階段状連房式登窯	扇形	22	11°	7	横長形	4	3.4	3.4	あり		19世紀ごろか		
19 東野亭焼窯跡	階段状連房式登窯		15.8 +	16°	4~5		3	5		あり	奥壁・側壁	慶応元年 (1865) ~ 明治8年 (1875)	AD1850 ± 30	

ることから明和~天明年間 (1764 ~ 1787) の 18 世紀中~後半の操業と考えられる。

田香焼窯跡は、上野焼の十時甫紹の弟子啓吉が文政 11 年 (1828) に開窯したとされてきたが、寛政 8 年 (1796) 成立の『近国焼物山大概書上帳』にも記載があることから、開窯の時期が 18 世紀末に遡る可能性がある。

東野亭焼窯跡では、『加藤田日記』『筑後将士軍談』に慶応元年 (1865) 7 月に開窯し、さらにその年の 9 月に窯開きしたと記されており、19 世紀中~後半頃の操業と考えられる。

これ以外の窯については、発掘調査が行われておらず、詳細な時期が不明であるが、赤坂焼などでは『筑後赤坂焼』において、19 世紀前半~昭和時代まで操業した窯の場所の変遷についても詳細に記されている。

なお、発掘調査された窯跡のほとんどで考古地磁気測定推定年代が行われており、この理科学的に推定された年代は概ね文献の時期に収まっている。

註

- 1 各窯跡については、調査報告書を参考にした。それについては、巻末の参考文献に掲載した。なお、表は調査報告書などの図面から計測した。
- 2 釜ノ口窯跡の数値については、概要報告の図面から導き出した。再調査により、焼成室の数値は変わる可能性が大きい。
- 3 一本杉 2 号窯跡については、報告書で調査担当者が窯の形状が未広形になるとの指摘がある。
- 4 須恵焼新窯については、須恵町教育委員会からオルソ写真を提供して頂き、それから数値を導き出した。
- 5 輪ドチが茶入れなどを焼くために使用されたことやチャツの出現の時期については、大橋 (1992) の指摘がある。

3. 文献史料調査の成果と課題

福岡県近世窯業関係遺跡調査にあたり、基礎的作業として関連する文献史料（史料）の情報を収集した。現在の福岡県域における近世窯業に関する史料は多岐にわたる。この調査では、刊本を対象として、近世窯業に関する先行研究を参考として史料を探索し、また近世地誌等、関連する情報が採録されていることが見込まれる史料を博捜し、情報を収集した。集成した史料の情報は、編年順に表3に整理した。

(1) 集成した文献史料

近世窯業関係の史料は、製作された陶磁器が各藩の特産物であることから、藩または民間で編纂した地誌や史書に情報がみられる。福岡藩であれば、『筑前国続風土記』、『筑前国続風土記附録』、『筑前国続風土記拾遺』、『黒田家譜』、『石城志』など、久留米藩であれば、『北筑雑藁』、『米府年表』、『石原家記』、『筑後地鑑』、柳川藩であれば、『南筑明覧』、それ以外は古代の大宰府が統治した九国二嶋（九州全域）を対象とした地誌である『太宰管内志』といった地誌や史書にみえる。あわせて、久留米藩の『山方小物成方格帳』など藩の物産に関する記録にも情報が掲載される。高取焼に関する『高取歴代記録』、『筑前高取家旧記』や、『久留米藩土器司田中家資料』など、陶磁器の製作者による記録もある。

その他、寛政8年（1796）に天領天草の支配を預かる島原藩の大横目大原甚五左衛門の要望により上田源作（宜珍）が作成した『近国焼物山大概書上帳』、「添田町諸商賣諸職書上帳」（添田手永大庄屋中村家文書）、「上高屋、内垣村諸納控写」（京都郡みやこ町犀川上高屋の乙子焼）、『桑野岳幸家文書』の「年代記」など地方文書や、日記などの古記録にもみえることがあるので、未翻刻の史料まで探索すれば、関連史料は枚挙にいとまがない。

高取焼や上野焼などの陶磁器は、茶会で使用されることがあるので、『有楽亭茶湯日記』、『松屋会記』、『小堀遠州会記』、『元禄会記』、『清風軒会記』、『文政会記』など茶人の日記や茶会記、細川三斎及び忠利の書状、『三斎公伝書』など茶書にも登場する。

上記の紙媒体に書かれた古文書、古記録、編纂物のほか、伝世又は、出土した陶磁器の刻書や染付などの銘文も多くの情報を伝える史料である。

(2) 集成した文献史料にみえる焼き物と窯

本調査で集成した文献史料が、地誌や陶磁器の製作者の記録、茶会記を中心としているため、これらにみえる焼き物や窯には偏りがある。豊前国の窯は、近世初期の史料を中心に豊前焼や小倉焼、上野焼がみえる。地元の記録ではない、茶人が記した茶会記などの史料にみえることから、豊前焼と呼ばれる焼き物には上野焼が含まれている可能性がある。

田香焼は、『勾金地方郷土史資料』や『近国焼物山大概書上帳』に、文政8年（1825）に開窯されたと伝える。田香焼の伝世品の銘文として、天保5年（1834）の紀年が「筒形花生」（大任町指定有形文化財）の箱本体及び添え状にあり、安政3年（1856）の紀年が緑釉徳利の外底面に墨書の文字で「安政三 □□ 辰十月」とあることなどが知られる。

筑前国の窯は『筑前国続風土記』をはじめとする地誌が充実しているため、特に高取焼とその窯に関する史料が多い。内ヶ磯窯跡から白旗山窯跡、東皿山窯跡、西皿山窯跡へという窯の変遷に関する情報も追うことができる。高取焼の小石原鼓の釜床窯跡や高取焼系の中野上の原窯跡、犬鳴窯跡も『筑前国

続風土記』などの地誌を中心に史料がみられる。

須恵焼についても、宝暦年間（1751～64）に寺社司の下吏の新藤安平が開いたことなどがみえる。伝世品の銘文からわかることとして例えば、明和6年（1769）に、須恵焼の白磁釈迦像台座（須恵町指定有形文化財）の外底に「明和六年 丑四月八日 施主 植木村現蔵」、内底に「須恵皿山作者 森氏」の銘（須恵焼最古の銘）があり、天明4年（1784）に、須恵焼の染付花瓶（須恵町指定有形文化財）の外面の染付銘に「天明四年 皿山 忠一」とある。文化11年（1814）に、須恵焼の染付龍雲文鉢の外底面高台内の染付による文字に「文化十一年 戊四月初 長澤氏 山泉画」（須恵町指定有形文化財 No.14）とある。また能古焼について、『筑前国続風土記附録』には、明和年間（1764～72）より残嶋（能古島）にて陶器を製したことがみえる。

筑後国の窯は、地誌や久留米藩、柳河藩の記録に、蒲池焼、坂東寺焼、水田焼、朝妻焼、釈形焼、星野焼などの史料がある。筑後国にも多くの窯があったが、地誌が筑前国ほどは充実していないので、史料からわかる情報はそれほど多くはない。久留米藩では坂東寺焼、柳河藩では蒲池焼が近世初期に開かれたことがわかり、伝世品の箱書から元禄11年（1698）には釈形焼がみられる。『石原家記』から正徳4年（1714）または同5年（1715）に上妻郡釈形焼物師文右衛門の手伝夫が、惣郡より割方にて出されたとあり、釈形焼とのつながりが伝承される。『筑後志』は、「その製は肥州（肥前国）の伊万里焼にひとしい」とも述べている。

『筑後志』は「半田土鍋」について、下妻郡水田村の近藤家が製する所で、立花藩主が毎歳江戸幕府に献上していたと記し、「風爐前土器」についても、上妻郡熊野村の田中家の製する所で、やはり江戸城に献上していたとする。水田焼や坂東寺焼に関する記録と思われる。

星野焼については伝世資料として、室山神社蔵の星野焼の灯籠（八女市指定有形文化財）を載せる器台に「奉寄進 元文三戊午天 九月吉日 本星野 与次右衛門」とともに「作者 吉田小右門 大塚幸次郎」と刻まれ、元文3年（1738）の紀年銘がある。寛政7年（1795）に久留米藩で『山方小物成方格帳』を小川勘左衛門が補筆し、「同所本星野名二而皿・茶碗焼之事」として、元文2年（1737）に、同所仙頭与次右衛門が願いによって仰せ付けられ、釈形焼の手筋で焼立てたが、それ以後断絶し、今では近年同村内の十籠名で（つまり十籠焼として）、宇平次が焼立てているとある。

伝世品からわかることとして、天保3年（1832）の柳原焼の大皿の篋刻に「天保三辰年八月朔日於柳原浅田薰保定造之」とあり、九州医学専門学校の富田新氏蒐集の高台破片に、天保三辰年八月十三日と刻したものと、良八作と自己の名を篋刻したものとがある。また文政2年（1819）に、朝田焼（一の瀬焼）の伝世品の染付鶴文茶碗の入った木箱の銘記に「文政二卯年二月二十三日 生葉郡浅田村一の瀬谷大福山（不明）鶴絵茶碗 拾 平塚」とあり、文政6年（1823）に、やはり一の瀬焼の磁器染付瓶の胴部外面の染付銘に「皿山」「文政六年 閏仲秋」とある。

（3）成果と課題

福岡県域の近世窯業に関する文献史料を収集したが、いまだ刊本を中心とした調査にとどまり、陶磁器の製作者や藩政史料、地方文書などを悉皆的に調査することには及ばなかった。主な窯や陶磁器の開窯などに関する情報を大観すると、上野焼や高取焼のように、近世初期に朝鮮半島からの陶工による窯のほかは、18～19世紀になって各地で開窯されていく趨勢がみて取れる。残された課題としては、やはり、未刊行史料を博捜し、史料の充実を図ることに尽きると言えよう。

表3 歴史史料調査

焼物名	番号	関連窯名	年月日	史料名	内容	備考
瓦		不明	天正5年(1577)11月20日	『宗像社第一御宝殿御棟上之事置札』	「一棟瓦師之事 博多津中道場僧金師、小工武人御祝…」→宗像社第一宮の造営に博多の瓦職人が関わっていることがわかる。	宗像市1996
			天正20・文禄元年(1592)10月30日	『宗湛日記』	豊臣秀吉、博多の神屋宗湛邸の茶湯会に臨む	川添ほか1980
高取焼			天正20・文禄元年(1592)	『高取歴代記録』など	「黒田長政、八山を拝謁す。長政の命により後藤又兵衛の家人・桐山常右衛門が八山夫婦及び一子を連れて渡海し来る。長政は文禄3年に朝鮮より帰国。」	尾崎2013
豊前焼			天正20・文禄元年(1592)12月26日	『豊前以来由緒覚』		九州陶磁文化館2010 永竹ほか1982
		不明	慶長3年(1598)	北九州市八幡西区木屋瀬 木屋瀬資料館 備前焼大甕	慶長3年 捨土 叶 ひねりつち □□上々	(財)北九州市1982
豊前焼		不明	慶長8年(1603)3月11日	『有楽亭茶湯日記』	豊前焼茶碗に見ゆ	朝日新聞1981 磯野1980
蒲池焼			慶長9年(1604)11月7日・11月9日	『立花家旧臣文書』 『家永系譜』	11月7日 筑前国守・田中吉政は土器師・家永彦三郎を土器司に命じる。 「近世地方近世年表」は『立花家旧臣文書』『家永系譜』を参考として、11月9日吉政蒲池村土器師家永方親に禄を与ふ」と記述する。	永竹ほか1982 九州陶磁文化館1992/2010 伊東1948
豊前焼			慶長18年(1613)3月11日	『有楽亭茶湯日記』	「慶長十八年三月十一日昼 客。牧野伊予、伊藤基吉、堀田次郎八。懸物、珠光文。花入、角頭巾。花、白玉。茶入、盛法印の古瀬戸茶入。茶、竹の節。茶碗、豊前焼」	井上1943 赤池町1977
高取焼		内ヶ磯窯 千石窯 上畑窯	慶長19年(1614) 寛永7年(1630)	『筑前高取家日記』	「鞍手郡内磯と云所御陶所に御引移に相成し也其近辺にて開地田島武町余の所無貢にて拝領被仰付弟子等仕立専井土陶を可製旨承伝門弟子附の者も多く有え候事」	永竹1977
高取焼		内ヶ磯窯 白旗山窯 釜床窯	慶長19年(1614) 寛永7年(1630)	『筑前国統風土記』 卷29「土産考上」	「鷹取瓷器(やきもの) 鷹取焼は朝鮮軍の時、長政公の手にも、朝鮮人あまたとらはれ来りし中に、瓷器を製する上手あり。名を改めて八蔵と云。…慶長十九年の比より、鞍手郡内磯と云所に製し、寛永七年の比、穂波郡合屋の中村の白旗山の北の麓に移りて製し、寛永七年より上座郡鼓村にて製す。頃年福岡城の南田嶋村の東野松山にて製す。」	貝原1710
高取焼		内ヶ磯窯 白旗山窯 釜床窯	慶長19年(1614) 寛永7年(1630)	『太宰管内志』 「筑前之18(鞍手郡)の「高島居ノ城」の項	「…また太閤朝鮮攻の時加藤清正彼國にて瓷器を製する者をつれ来たりて肥後國にて是を造らしむ其者ノ名を井戸新九郎と云故に其製せし器を井戸焼と云後に長政朝臣彼者を筑前に召されて鷹取ノ手塚水雪に命じてそにて瓷器を制せしめ給ふ是に依て鷹取焼となづく、慶長十九年より同郡内ヶ磯と云ふ處にて八蔵と云に仰せて焼かしめらる是を八蔵やきと云其後寛永七年穂波郡合屋ノ中村ノ内白旗山の北ノ麓に移りてやく、寛永七年より又上座郡鼓村にうつりてやく今の陶工は新九郎が末裔なり、」	伊藤1969
高取焼		内ヶ磯窯	慶長19年(1614)	『筑前国統風土記』 『高取歴代記録』	内ヶ磯窯開窯。	西日本新聞1992 尾崎2013
豊前焼			元和5年(1619)正月23日	『吉田梵舜日記』	「元和五年 正月二十三日 晴 次豊前沢村大学之助ヨリ豊前焼之壺三ツ来。使者之由也。 同年 四月十六日 晴 朝食西洞院振舞、康首座令同道也、予豊前今壺焼二ツ持参也。」	井上1943 赤池町1977
上野焼			元和5年(1619)	『吉田梵舜日記』	豊前古上野と思われる「豊前壺三ツ使者持来」と記載ある。	永竹1980.1/1980.5
高取焼			元和6年(1620)	『筑前国統風土記』 『西高取家本東山高取焼仕法記』	「五十嵐次左衛門が忠之に召し抱えられ内ヶ磯において高取陶工と共に製陶に携わらようになるのはこの頃か。」	尾崎2013
釈形焼?			元和6年(1620)12月	有馬豊が国元の家老に宛てた書状3通	「黒木の焼物」についての記述がみられる。	星野1998
上野焼		釜ノ口窯 血山本窯 岩屋高麗窯	元和8年(1622)6月22日	『田川郡家人番御改帳』	〔辨城村焼物山〕戸数30、人口63(男36・女27)、男の内訳:焼物師5、売子11、馬11 〔上野村焼物山〕戸数22、人口65(男37・女28)、男の内訳:焼物師8、売子10、馬7、牛1	井上1943 永竹1975/1977/1982 九州陶磁文化館2010

焼物名	番号	関連窯名	年月日	史料名	内容	備考
豊前焼			元和9年(1623)3月4日	『吉田梵舜日記』	「元和九年 三月四日 晴 次白川在所藤田浄源、豊前之壺水指一ツ、息太郎 左衛門染江染付鉢、餅三十添遣也、弥兵衛使也。」	井上1943 赤池町1977
坂東寺焼			元和9年(1623)3月9日	『久留米藩土器司田中家資料』	「其方事久留米御城土器作二被下御究候、依夫、高 式拾石分御役儀被成御免候、則御分領内土物屋司 被仰付候間、可得其意者也 元和九年亥三月七日 鶺鴒基右衛門[花押] 上妻郡内坂東寺村 平兵衛どの」	古賀1979
高取焼		山田窯	寛永元年(1624)	『高取歴代記録』など	この頃、八山父子、朝鮮への帰国を願い出て忠之の 勤氣にふれ山田村に蝋居となる。山田窯開窯。	朝日新聞1981 永竹1977/1982 西日本新聞 1992 九州陶磁文化 館1992 尾崎2013
豊前焼			寛永2年(1625)	『松屋会記』『小堀遠州会記』	『松屋会記』に「肥後ヤキ茶ワン小倉水指」、『小堀遠 州会記』に「筑前焼茶碗」と見ゆ。	朝日新聞1981
高取焼			寛永5年(1628)4月23日・24日	『小堀遠州会記』	「茶入筑前焼」「筑前焼水指」の名で高取焼が初見。	西日本新聞 1992 尾崎2013
上野焼			寛永6年(1629)7月14日・9月23日	細川三斎公及び忠利公の書状	上野焼の記述あり。 「上野の焼物師の内、我々いつも……」 「上野焼物師江戸へ来事迷惑ガルニ付而ハ、……」	井上1943 赤池町1977
高取焼		白旗山窯	寛永7年(1630)	『筑前国続風土記』巻12「穂波郡 榎村 合屋」の項	「…高取の蓋器(やきもの)、鞍手郡の内が礪にて焼 て後、寛永七年の此より、中村の内、白旗山の北の 麓に移り、三十二年此地にてやく。白旗山及庄内 の寛光山の木をきり。白旗山に檜樹多し。白旗山 西は合田村に属し、東は中村に属せり。」	貝原1710
高取焼		白旗山窯	寛永7年(1630)	『大宰府管内志』『筑前之18(鞍手郡)』の 「高鳥居ノ城」の項	「高鳥居ノ城」の項に「…瓷器を制せしめ給ふ是に依 て鷹取焼となづく、慶長十九年より同郡内々礪と云 ふ處にて八蔵と云に仰せて焼かしめらる是を八蔵や ぎと云其後寛永七年穂波郡合屋ノ中村ノ内白旗山の 北ノ麓に移りてやく、寛文七年より又上座郡鼓村にう つりてやく今の陶工は新九郎が末裔なり、」	貝原1710
高取焼		白旗山窯	寛永7年(1630)	『筑前国続風土記』 『高取歴代記録』 『高取家記録』	白旗山窯開窯。	筑紫1938 永竹 1977/1980.1/19 80.5/1982 高鶴1990 西日本新聞 1992 九州陶磁文化 館2010 尾崎2013
高取焼			寛永10年(1633)5月1日		「遠州茶会に「高取」焼水指が初出」	尾崎2013
小倉焼			寛永17年(1640)4月17日	『三斎公伝書』(茶道四祖伝書)	「寛永十七年卯月十七日朝。吉田(京都)三斎公へ。 客、辻関斎老、松屋久重兩人。……(略)……塩煮山 椒。小倉焼皿〔図あり〕。……(コクラヤキトモツタ水 サン。山ノ井御茶入、袋に入)……〔図あり〕」	井上1943 赤池町1977
蒲池焼			慶安2年(1649)	『三猪郡誌』	「土器師家永彦三郎方親没す年八十一(三猪)」	伊東1948
高取焼		白旗山窯		『高取歴代記録』	「八蔵重貞(八山)、白旗山にて没(8月)。嫡子、八郎 右衛門多病のため、次男新九郎が二代となり八蔵貞 明を名乗る」	筑紫1938 永竹1977・永竹 ほか1979/1982 朝日新聞1981 九州陶磁文化 館1992 西日本1992 尾崎1994
			万治4・寛文元年(1661)8月	久留米市日吉町三本松町遺跡出土「色 絵鳳凰唐草文托」の外底の年号銘	「万治四己丑閏八月吉日」	久留米市1992
上野焼			寛文4年(1664)10月5日	『御口切之覚』(古市自得齋筆記)「忠真 公御口解」	茶会記に、上野焼茶碗使用「薄茶盤上野」	井上1943 美和1958 赤池町1977 朝日新聞1981

焼物名	番号	関連窯名	年月日	史料名	内容	備考
高取焼		釜床窯	寛文5年(1665)	『筑前国続風土記』巻38「早良郡上 鹿原村」の項	「宝永五年の春より陶工高取・五十嵐二人を移して陶器を製せしめらる。今にしかり。寛文五年より元禄十七年までハ、上座郡鼓村にて陶工せり。」	加藤・鷹取 1977/1978
高取焼		釜床窯	寛文5年(1665)	『高取歴代記録』 『高取家文書』	白旗山から小石原へ御陶所(窯)を移す。	西日本1992 尾崎2013
高取焼		釜床窯	寛文7年(1667)	『筑前国続風土記』巻29「土産考上」	「寛文七年より上座郡鼓村にて〔瓷器を〕製す」	貝原1710
高取焼		釜床窯	寛文7年(1667)	『筑前国続風土記』巻21「上座郡(上)鼓村」の次行事社の項の「天照大神宮」	「釜床に在り。・明和年中に此神の靈験に依て盜賊の難を避し事高取家記にあり。本編に寛文七年國君より高取の陶工を此村の額に置て陶器を焼くとあれど何れの時に絶しに歟今は爰にては製せずなりぬ。」	青柳1993
高取焼		内ヶ磯窯 白旗山窯 釜床窯	寛文7年(1667)	『大宰管内志』「筑前之18(鞍手郡)」の「高鳥居ノ城」の項	「・瓷器を制せしめ給ふ是に依て鷹取焼となづく、慶長十九年より同郡内内ヶ磯と云ふ處にて八蔵と云に仰せて焼かしめらる是を八蔵やきと云其後寛永七年穂波郡合屋ノ中村ノ内白旗山の北ノ麓に移りてやく、寛文七年より又上座郡鼓村にうつりてやく今の陶工は新九郎が末裔なり、」	伊藤1969
高取焼		釜床窯	寛文7年(1667)	『石原家記』	「此年上座郡鼓村に焼物始まる。元來合屋焼物師此處に移る(石原)」	伊東1948
高取焼		釜床窯	寛文10年(1670)	『筑前国続風土記』巻11「上座郡 鼓村」 『高取家文書』 巻29「土産考上」	「・鼓河内の内、つると云所に、寛文十年國君より高取の陶工を遣はしおかれ、陶器をやく。今に其所にあり。」 「寛文七年より上座郡鼓村にて〔瓷器を〕製す」	貝原1710
坂東寺焼		坂東寺窯	延宝3年(1675)	『北筑雑業』1巻	「坂東寺ノ側二民居有リテ陶ヲ善クス。其酒盞爐具ノ類ノ如キハ深草半 田ノ甄家ト雖モ、亦及バズ。故二府君每歲之ヲ東武ニ獻ジタマフ。」	
高取焼		中野上の原窯	天和2年(1682)	『筑前国続風土記』巻11「上座郡 小石原村 中野」の項 『筑前国続風土記附録』巻18「上座郡下小石原」の項の「中野」 『筑前国続風土記拾遺』巻21「上座郡(上) 小石原村」の項の「土産」	「・此所に天和二年より陶工来り住して陶器を作る。肥前伊萬里の磁器にならへり。中野焼と云。」 「上座郡下 小石原」の項の「中野」に「天和年中よりの陶製ハ止て、享保の末より高取焼にならひて民用に便する磁器を製せり。産工なり。今陶家八戸、甕三所にあり。・」 「中野にて陶器を製す。罫(とくり) 花瓶 碾茶壺 摺盆 瓦寶(いび)等の類なほ種々の土器を造る窯三處に在り。天和二年白瓷を製して中野焼と云しを後に其製は止て高取焼に習て民用の諸器を作る。・」	貝原1710 加藤1977/1978 西日本新聞 1992 尾崎2013
高取焼		中野上の原窯	天和2年(1682)	『筑前国続風土記』巻30「土産考上 器用類」の項	「中野瓷器」「土器(かわらけ)」「天和二年始て上座郡小石原村の南、中野と云所にて、國君光之公陶器を作らしむ。是は肥前松浦郡伊萬里の陶工来り傳ふ。大明の製法にならへる也。其製猶いまた精巧ならずといへとも、甚民用に便あり。」	貝原1710
高取焼		中野上の原窯	天和2年(1682)	『筑前国続風土記』巻33「土産考上 土石類」の項	「瓷器(やきもの)土」「上座郡中野に多し。初中野にてやき物をやかんとして、其土のある所を広く所々に求めんとせしに、中野にをのづから有し故、他に求めず、天然の幸なり。」	貝原1710
坂東寺焼 水田焼		坂東寺窯 水田焼窯	天和2年(1682)	『筑後地鑑』上巻	「・東の大門ノ側二、居民アリテ陶ヲ善クス。其酒盞爐具ノ類ノ如キハ、深草半田ノ甄家ト雖モ亦及バズ故二府君每歲之ヲ東武ニ獻ジタマフ。」 「同邑ノ側二土師ノ流アリテ陶ヲ善クシ、半田土鍋ヲ作ル。〔数寄屋用フル所ノ爐具〕本朝比類ナン。故二每歲府君之ヲ東武ニ獻ゼラル。」 「下妻郡 水田村北嶋ニテハ藍蓋井筒陶シ、殊ニ半田土鍋ハ天下ノ美物ナリ。・〔後略〕」	西1682((筑後 遺籍刊行会 1979))
高取焼		中野上の原窯	貞享元年(1684)	『高取歴代記録』	「この頃、八山の孫・八之丞貞正、小石原中野に移る。」	西日本新聞 1992 尾崎2013
上野焼			元禄年中(1688~1704)	『元禄会記』	(年号不詳)16日「/ 水指 上野 /」 (同年)10月16日「/ 茶入 上野 /」 (同年)11月28日「/ 水指 上野瓢箪 /」 (年号不詳)正月19日「/ 香炉 上野氣安麒麟 /」 (年号不詳)3月26日「上野焼御用二付出立・・・」	井上1943
高取焼		大鋸谷窯	元禄元年(1688)	『高取歴代記録』	「この前後に、福岡城の南、田嶋村大鋸谷に窯を開く(大鋸谷窯)。三代光之隠居、四代綱政襲封(12月)	西日本新聞 1992 尾崎2013

焼物名	番号	関連窯名	年月日	史料名	内容	備考
高取焼			元禄3年(1690)	『高取歴代記録』 『黒田家譜』網政記	「この頃、絵師の狩野昌運、黒田藩の御用絵師となり、御用陶器に絵付けを行う」	
高取焼		大鋸谷窯	元禄5年(1692)	陶器蛙形合子	「元禄5年出来 八郎」の墨書銘	歴民2001
高取焼		大鋸谷窯	元禄6年(1693)	陶器唐獅子形香炉	「元禄6年 窯八郎」の墨書銘	歴民2001
上野焼			元禄7年(1694)	『萬寶全書』巻8「古今和漢道具知鈔」	上野焼の記事	
上野焼			元禄7年(1694)	『貝原益軒豊国紀行』	上野付近の記事 元禄7年4月5日「此里にすへ物作りて焼く籠土有」	森1939 井上1943
釈形焼			元禄11年(1698)	伝世品の箱書	「元禄11戊寅」と記す	永竹1982
上野焼			元禄13年(1700)	古市無元齋「元禄(十三辰年)会記(三)」	「/釜戸屋真形/上野細口花入(花)馬リン/綾部茶入」の記述	井上1943
高取焼			宝永年中(1704~1711)	『高取歴代記録』	「御陶山御仕立」	尾崎1994
高取焼		大鋸谷窯	元禄17・宝永元年(1704)	『高取歴代記録』	「八蔵、鼓村より博多奥乃堂へ引越す。大鋸谷窯、不意に御取りくずしとなる」	九州陶磁文化館1992 西日本1992 尾崎2013
高取焼		内ヶ磯窯 白旗山窯 釜床窯	元禄17・宝永元年(1704)	『筑前国統風土記附録』巻38「早良郡上鹿原村」の項の「陶器所」	「宝永五年の春より陶工高取・五十嵐二人を移して陶器を製せしめらる。今にしかり。寛文五年より元禄十七年までハ、上座郡鼓村にて陶工せり。元禄十七年の春、陶師高取某博多に居を移し、早良郡田嶋村の内六反間にて陶製せり。今も其跡あり。」	加藤・鷹取 1977/ 1978
高取焼		小石原鼓窯	元禄17・宝永元年(1704)	『筑前国統風土記附録』巻46「土産考上」の項の「鷹取瓷器」	「・寛文五年より元禄十七年迄は、上座郡鼓村にて製せしか、元禄十七年の春鷹取八蔵・井戸焼の事本編に見へたり。…」	加藤・鷹取 1977/ 1978
高取焼		釜床窯 荒戸山窯 西皿山窯	宝永5年(1708)	『筑前国統風土記附録』巻38「早良郡上鹿原村」の項の「陶器所」	「宝永五年の春より陶工高取・五十嵐二人を移して陶器を製せしめらる。今にしかり。寛文五年より元禄十七年までハ、上座郡鼓村にて陶工せり。元禄十七年の春、陶師高取某博多に居を移し、早良郡田嶋村の内六反間にて陶製せり。今も其跡あり。享保三年上座郡小石原村に居住せし陶工数人招かせられ、民用の陶器を製造せり。此所を土俗西皿山といふ。陶工の家廿七軒、窯所三ヶ所あり。」	加藤・鷹取 1977/1978
高取焼		釜床窯 荒戸山窯 東皿山窯 西皿山窯	宝永5年(1708)	『筑前国統風土記拾遺』巻43「早良郡上鹿原村付皿山」の項	「枝郷皿山 俗に西皿山と云。享保三年より上座郡小石原村の陶工数家を爰に移して陶器を製せしめらる。…村の北西新町の南辺に小山あり。上の山といふ。宝永五年の春陶器所と定らる。即陶工高取五十嵐の二氏爰に居を移して 其始ハ上座郡鼓村に在。其後博多住す。香爐 水指(礮茶壺) 天目(茶盃) 香合等種々の器物を製せしめらる。良工なり。世の人爰を東皿山といふ。」	青柳1993
高取焼		荒戸山窯	宝永5年(1708)	『高取歴代記録』	荒戸新町に窯を開く	西日本1992
高取焼		犬鳴窯	宝永7年(1710)	『筑前国統風土記』巻13「鞍手郡 上新入村 犬鳴山」の項	「此地にて近年炭をやき、紙をすき、瓷器を作る。…近年は犬鳴山にて陶器を作らず。又炭をやもかす。大山の木もなくなりし故なり。」	貝原1710
高取焼			宝永7年(1710)	『筑前国統風土記』巻29「土産考上 器用類」の項	「鷹取瓷器(やきもの)」「鷹取焼は朝鮮軍の時、長政公の手にも、朝鮮人あまたとらはれ来りし中に、瓷器を製する上手あり。名を改て八蔵と云。又加藤清正の手にも、一人上手あり。新九郎と云。二人ともに、高麗にて井戸土と云色の者にて、八蔵は新九郎が甥也。…又五十嵐次左衛門と云者あり。肥前唐津寺澤家に仕へ、彼家を浪人して、筑前に来る。此者追戸瓷器の法を習ひ、其外種々の製を鍛錬せり。…慶長十九年の比より、鞍手郡内磯と云所にて製し、寛永七年の比、穂波郡合屋の中村の白旗山の北の麓に移りて製し、寛文七年より上座郡鼓村にて製す。頃年福岡城の南田嶋村の東の松山にて製す。」	貝原1710
			宝永7年(1710)	『筑前国統風土記』巻31「土産考上 器用類」の項	「土器(かわらけ)」「早良郡飯盛村にて作る所の土器尤よし。博多及夜須郡甘木村にも作るといえども、飯盛の製に及はず。」	貝原1710

焼物名	番号	関連窯名	年月日	史料名	内容	備考
			宝永7年(1710)	『筑前国続風土記』巻32「土産考上 器用類」の項	「瓦」「博多に瓦町とて、瓦工の集り住る町一坊あり。屋瓦及もろもろの瓦器を作る。夜須郡甘木、糟屋郡青柳、宗像郡赤馬など所々に作る。又近年志摩郡今宿にて作る。」	貝原1710
朝妻焼			正徳4年(1714)	『米府年表』	「五月上妻郡朝妻に焼物場出来(府)」	伊東1948
朝妻焼			正徳4年(1714)	『石原家記』	「上妻郡萩形焼物師文右衛門手伝夫、惣郡より割方にて出」	浅野1935 佐々木1991/2006
朝妻焼			正徳5年(1715)	『石原家記』	「上妻郡萩形焼物師手伝人足、惣郡より指出御用。皿山主山崎屋丸左衛門云々」	佐々木2006
高取焼		東皿山窯	正徳6・享保元年(1716)	『高取歴代記録』	東皿山窯開窯	西日本1992
高取焼		西皿山窯	享保3年(1718)	『筑前国続風土記附録』の巻38「早良郡上 鹿原村」の項の「陶器所」	「宝永五年の春より陶工高取・五十嵐二人を移して陶器を製せしめらる。…享保三年上座郡小石原村に居住せし陶工数人招かせられ、民用の陶器を製造せり。此所を土俗西皿山といふ。陶工の家廿七軒、窯所三ヶ所あり。」	加藤・鷹取1977/1978
高取焼		西皿山窯	享保3年(1718)	『筑前国続風土記拾遺』巻31「鞍手郡下 感田村」の「浄福寺」の項	「○薬土 行常と云處の松山の下より白土を出す。早良郡西皿山の焼物に用ゆる薬土也。毎年福岡へ出す。」	青柳1857
高取焼		西皿山窯	享保3年(1718)	『筑前国続風土記拾遺』の巻43「早良郡上 鹿原村付皿山」の項	「枝郷皿山 俗に西皿山と云。享保三年より上座郡小石原村の陶工数家を爰に移して陶器を製せしめらる。今八年を追て番昌し漸く村落をなせり。…」	青柳1993
高取焼			享保6年(1721)	朝倉市甘木の高雄山観音寺にある「陶製 狛犬 一对」(朝倉市指定有形文化財[工芸品];1974.1.10指定)に刻まれた年号	片方の狛犬の左足に「奉寄進 享保六年辛丑歳 夜須郡甘木七日町住人」、別の狛犬の右足に「早良郡田嶋鳥越山ニテ尾藤孫七之造」	甘木市1996
高取焼			享保7年(1722)	朝倉郡東峰村中野上の原窯跡の6・7室から出土した陶管	「口(享)保七年 口月三日」「八寸口 中野 重人 五郎八」のへら書き文字	小石原村1988
高取焼		中野上の原窯	享保10年(1725)	朝倉郡小石原村(東峰村)の行者堂内の陶製灰色狛犬(山犬)の銘	「享保拾年 筑前上座郡中野皿山住 己ノ四月吉祥日 長沼与三右衛門作」	小石原村やきもの関係年表
高取焼		中野上の原窯	享保14年(1729)	行者堂内の灰釉陶製狛犬一对[白・茶色 狛犬(山犬)]の背面の刻銘	「筑前国 上座郡小石原村皿山 長沼三右衛門 享保拾四年三月十八日」/「享保拾四年 筑前上座郡中野皿山住」	永竹ほか1982 歴民2001 小石原村やきもの関係年表
高取焼			享保16年(1731)	高取焼の鯉形土器の刻銘	「享保十六亥歳 二月十五日成 胤良為」 「享保十六季亥 二月十九日 写生 状 胤良為」	歴民2001
高取焼			享保21・元文元年(1736)	『筑前国続風土記附録』巻19 上座郡下「小石原」	「天和年中よりの陶製ハ止て、享保の末より高取焼にならひて民用に便する磁器を製せり。雇工なり。今陶家八戸、竈三所にあり。…」	加藤・鷹取1977/1978
星野焼			元文3年(1738)	室山神社蔵の星野焼の灯籠(八女市指定有形文化財)を載せる器台	「奉寄進 元文三戊午天 九月吉日 本星野 与次右衛門」とともに「作者 吉田小右門 大塚幸次郎」と刻まれる	九歴2016
高取焼			元文年中(1736~1741)	『筑前国続風土記拾遺』の巻25 嘉麻郡上 上山田村の両神宮の項の「土産」	「猪鼻に陶冶二戸あり。茶碗 土鍋 花瓶 酒壺 鉢等の類を造る。抑此村に陶器を製する始ハ元文の比に起れり。然るに其後 中絶せしを、文化十年猪鼻の農人再興し、今専ら諸方に販きて家産とす。木城に唐人谷と呼處あり。むかし唐人來住して磁器を焼し事ありと云ふ。是元文の比にか又其以前の事が詳ならず。鷹取焼の元祖ハ朝鮮人也。其流の陶工なる故何となく唐人谷とよふか。猶考ふへし。」	青柳1993
高取焼			寛保元年(1741)	『高取歴代記録』	西皿山窯開窯	西日本1992 尾崎2013
高取焼			寛延2年(1749)	『高取歴代記録』	「高取東山御焼物所之記」が高取焼仕組記録として作られ、高取権八・五十嵐次兵衛ら高取陶工に渡される	尾崎2013
須恵焼			宝暦8年(1758)	『筑前国続風土記附録・同拾遺』	新藤安平常興、白磁に適した磁土を発見、有田南川原の陶工の指導により須恵窯開窯	九州陶磁文化館2010・永竹ほか1982
須恵焼			宝暦14・明和元年(1764)	『筑前地方近世年表』	『筑前国続風土記拾遺』を参考として「此年新藤安平糟屋郡須恵村に窯を築き、南京焼を製す(拾)」と記述	伊東1948
			宝暦末~明和初(1763~1764)	『望春隨筆』	「……長谷山浄満寺に皿山あり。摺鉢・水瓶類也とそ。宝暦の末より明和之初迄焼たりしか後退転す。……」	秋月1996 甘木歴史2006

焼物名	番号	関連窯名	年月日	史料名	内容	備考
須恵焼			宝暦年中(1751~1764)	『筑前国統風土記附録』の巻34「表糟屋郡上 須恵村」の項の「皿山」	「伊勢山東原といふ所にあり。〔案るに上古陶器を作りし地なる故、村の名をもすへと云にや。防州にもすへ崎と云所有。〕宝暦年中寺社司の下吏新藤安平といへる者発起して新に陶器窯を営造し、南京焼を製せん事を有司に請ふ。」	加藤・鷹取 1977/1978
須恵焼			宝暦年中(1751~1764)	『筑前国統風土記拾遺』の巻40「表糟屋郡下 須恵村」の「土産」	「瓷器 伊勢山東原と云所にて製す。今其地を皿山と呼へり。〔西須恵の地雑居す。但上須恵に近し。〕居民三拾二戸窯二所に在。本登〔廿二竈〕新登〔十三竈〕と云。白瓷の茶碗 花瓶 酒壺 盆 鉢 其外種々の皿器を焼出す。此處は大いに近く薪木多く且洞流に依て水碓を数多構へ陶土を舂しめ人功を助くれば陶師の便宜自ら地利に叶へり。其初宝暦年中寺社司の下吏に新藤安平と云者有。南京焼の器物を製せん事を官に請ければ、則許容有て同十四年此所に窯を築き・〔後略〕」	青柳[1993]
能古焼			明和年中(1764~1772)	『筑前国統風土記附録』の巻40「早良郡下 残島」の項	「明和の比より此嶋にて陶器を製す。」	加藤・鷹取 1977/1978
			明和2年(1765)	『石城志』巻7の「土産 上」「瓦工」の項	「土器師瓦町に住す、数家あり。天正6年丁丑、宗像社を大宮司氏貞再造せられし時、煉瓦師博多津中道場僧金師といふ名あり。されば古へより当津にて瓦を作りしなるべし。」	津田1977
			明和2年(1765)	『石城志』巻7の「土産 上」「瓷器(スヤキモノ)」の項	瓦町に陶工数家あり。近世、惣七〔先祖は播州より来る正木氏。〕といふ者良工にて、「風爐・手爐・丁字風爐・或は臺ヒチリン・智首坐ヒチリン・又は植木鉢・やうの物を製す。〔智首坐は聖福寺の塔頭盧白院に住せり。炭薪を用ゆるに便利なる事を工夫して、初て此ヒチリンを作らしめり。〕江戸具外近国にて是を賞す。」	津田1977
			明和2年(1765)	『南筑明覧』山門郡柳川城の「城外・市中・沖ノ端並二城下ノ村」の項	「一 南筑ノ産物ニテ、毎歳東武二進献スル品物ハ三月、風爐前土器、鹽鴨、六月、和紙、海草 九月、底取灰土鍋、海月、十一月、干白芋茎、鱗蓋辛」	戸次1765(筑後遺籍刊行会1979)
蒲池焼			明和2年(1765)	『南筑明覧』三漕郡の項	「一 蒲池村ノ家永彦三郎ハ、土器師ナリ。太閤朝鮮征伐ノ時、肥前名護屋ニ於テ土器ヲ献ゼシガ、太閤御感アリテ御朱印ヲ給ヒ、土器師ノト為シヌ。今ニ二十三石ヲ領ス。」	戸次1765(筑後遺籍刊行会1979)
			明和4年(1767)	『桑野岳幸家文書』の「年代記」、「明和四丁亥」の項	「当春ヨリ鞍手郡山口村百姓惣兵衛ト申者」屋鋪工伊万里焼皿茶碗類焼出ス、所々ヨリ見物多シ」	西日本文化協会1990
須恵焼 高取焼 伊万里焼 風		西皿山窯 山口浅ヶ谷窯	明和4年(1767)	肥後天草の庄屋・上田家に伝わる『近国焼物山大概書上帳』	「筑前領焼物山三ヶ所」須恵皿山・西町皿山・山口皿山	須恵町2003
上野焼			明和4年(1767)	上野焼の獅子形香炉外面の刻書	「行歳七十七 十時甫好」	歴民2001
須恵焼			明和6年(1769)	須恵焼の白磁釈迦像台座(須恵町指定有形文化財 No.11)	外底に「明和六年 丑四月八日 施主 植木村現蔵」、内底に「須恵皿山作者 森氏」の銘(須恵焼最古の銘)	歴民2001
上野焼			明和7年(1770)	上野焼の白釉鉄釉流し彫牡丹文徳利の外面の刻書	「行年八十歳 十時甫紹作」	歴民2001
高取焼			明和8年(1771)	『高取歴代記録』	「七代治之、友泉亭に於て御焼見學」	西日本1992
上野焼			明和~安永年中(1764~1781)	「本登御用目録控」(『萬々代控』〔吉田文書〕)	上野焼の土として伊方土・夏吉土・市場土・笹尾土が登場する。	井上1943
坂東寺焼 水田焼			安永6年(1777)	『校訂筑後志』巻二の「土産」	半田土鍋 「下妻郡水田村近藤家の製する所、最も絶品なり。府君毎歳東武に進献あり。」	
坂東寺焼 水田焼			安永6年(1777)	『校訂筑後志』巻二の「土産」	風爐前土器 「上妻郡熊野村、田中家の製する所、甚だ奇品なり、是も亦邦君江城に進献あり。又大小の土器あり、俗これを三斗、五斗、七斗間の土器と号す。又杯(さかつぎ)・土器(かはらけ)あり、上品を内曇(うちぐもり)と名く。」	
釈形焼 星野焼 朝妻焼			安永6年(1777)	『校訂筑後志』巻二の「土産」	陶器 「生葉郡星野村十籠名の産なり。往年上妻郡釋形(しゃくかた)焼を伝來し、近世建山焼の茶器を製す、最も好品なり。先君命ありて、御井郡朝妻の地に於て陶器を製し遠近に販ぐ。其製肥州の伊萬里焼に齊し、今廃せり、惜むべし。」	

焼物名	番号	関連窯名	年月日	史料名	内容	備考
坂東寺焼 水田焼			安永6年(1777)	『校訂筑後志』巻之二的「土産」	坏子「下妻郡水田村・三瀬郡田川村の産、風爐・火鉢・水甕等の製、大に民用に利あり。」	
高取焼			安永8年(1779)	『高取歴代記録』	「東山高取焼仕法記」を五十嵐次兵衛・高取唯作・高取市郎ら藩に提出	尾崎2013
高取焼			安永8年(1779)	『高取歴代記録』	『血山役所記録』成る	西日本1992
能古焼			天明元年(1781)	『筑前国統風土記拾遺』の巻43「早良郡上 残嶋浦」の「神宮寺」の項	「・・此寺の上の山に陶器を造る土あり。天明の初年此土を取て製せしかいくほとなく其事やみたり。」	青柳1993
須恵焼			天明4年(1784)	須恵焼の染付花瓶(須恵町指定有形文化財 No.12)の外面の染付銘	「天明四年 血山 忠市」	歴民2001
宗七焼			天明6年(1786)	達磨像体外の刻書	「西戒壇祖師堂達磨 口覚大師尊像 博多津陶工正木宗七壁茂造 天明六年丙午閏十月初五日 古横岳徳隠薩和尚寄附 現住戒壇院太室玄昭謹記」	歴民2001
須恵焼 能古焼			天明7年(1787)	有田の『血山代官旧記覚書』(多久文書)	「筑前、鋸嶋、須恵両山へ有田筋より佐十郎と申す者、焼物細工に罷越し居り候段、相聞き候に付、補方のため、下目付共差し越され候処…(略)…佐十郎は有田中樽新九郎・良之進・為次郎と名を替えた。小倉あか山(清水山)へ所を替えた。絵書きき作十郎の元の名は長之進・為次郎といい、武雄筒江山の者であり、親の新九は血山に出生し筒江山に在りながら血山上幸平山に居る」	九州陶磁文化館1992 大橋1989 宇治2010
高取焼			天明8年(1788)	小石原高取の陶器の厨子の刻書	「謹再興祠製口(員)満攸 口天明八戊申年 晩秋吉辰日 龜門山大先達 権大僧都法印 龜石坊有弁 白敬」	歴民2001
上野焼			天明年中(1781~1789)	『八代郡誌』	「肥後高田焼(八代)藤四郎家三代藤四郎豊前上野へ至り、十時孫右衛門、同榮藏、渡久之丞、吉田善藤太へ陶法を伝授す。」	井上1943
上野焼			寛政2年(1790)	『万々代控』	上野焼、銅釉からできる緑青釉初めて現われる	九州陶磁文化館1992/2010 永竹ほか1982 朝日新聞1981
宗七焼			寛政4年(1792)	香炉の体外の刻書	「寛政四年 正木宗七作 (印銘)」	歴民2001
星野焼			寛政7年(1795)	久留米藩で『山方小物成方格帳』を小川勘左衛門が補筆する	「同所本星野名二而血・茶碗焼之事 / 元文二巳年(1737)、同所仙頭と次右衛門依頼被仰付、釈形焼之手筋二焼立候処、其以後断絶、只今二而は近年同村之内十龍名二而、宇平次焼立候、御目付才判二而乾山焼之手筋も焼立被仰付候事」	佐々木2006
			寛政8年(1796)	『近国焼物山大概書上帳』	「柳川領血山之分」に黒崎血山、星野血山、「筑前領血山之分」に須恵血山、西町血山、「豊前領血山之分」に天野血山、藤原血山、添田血山、今藤血山、漆尾血山、清水血山、小石原血山が記述される	大橋2010
高取焼		中野上の原窯	寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻18 上座郡下小石原の項の「中野」	「天和年中よりの陶製ハ止て、享保の末より高取焼にならひて民用に便する磁器を製せり。塵工なり。今陶家八戸、竈三所にあり。…」	加藤・鷹取1977/1978
高取焼			寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻18 上座郡下赤谷村の項	「スギソイといふ所に白土石を産す。」	加藤・鷹取1977/1978
高取焼		犬鳴窯	寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻25 鞍手郡上犬鳴谷の項	「・・昔は磁器を作り、炭を焼、紙を漉、…」 「血山跡」に「柚の木谷口と云所にあり。本編に見へたる陶器を製せし所也。今も犬鳴焼といふ、焼物稀に民家にあり。」	加藤・鷹取1977/1978
高取焼			寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻27 鞍手郡下頼野村の「鷹取山古城」の項	「永満寺村に境へり。此山の西北の谷ニかまの尾と云所有り。古へ陶器を焼し所といふ。…」	加藤・鷹取1977/1978
			寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻28 遠賀郡元上畑村の項	「此村中にて陶器を掘出せる事あり。宗像大宮司繁栄の時祭器を作りし所なるにや。」	加藤・鷹取1977/1978

焼物名	番号	関連窯名	年月日	史料名	内容	備考
須恵焼			寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻34 表糟屋郡上 須恵村の項の「皿山」	「伊勢山東原といふ所にあり。〔案るに上古陶器を作りし地なる故、村の名をもすへと云にや。防州にもすへ崎と云所有。〕宝暦年中寺社司の下吏新藤安平といへる者発起して新に陶器窯を営造し、南京焼を製せん事を有司に請ふ。有司其地所と薪材の料をあたへ安平に陶器の事を宰判せしむ。年々に陶工せる磁器をえらひ國用に充て其餘八他州にも販く事を許さる。安平ハ安永五年に功勞を賞し土籍に列せらる。翌年病をもつて没せり。其子長平父か遺跡を給ひ陶山の事を司らしめらる。渠もまた才覚ある者にて自ら業製して南京陶に擬す。製する所いよいよ精密にして奇麗なり。抑安平か始て南京焼を企てける由来を尋るに、宝暦の初年須恵村の内、蓬谷に金山間堀と云所有。又近村の諸山にて農夫等石炭を多く鑿り出しけるに、その堀り揚置たる土の中に陶器に用ひて好き白土あり。是をもつて西皿山 早良郡鹿原村 陶工を招寄、試に陶するに其製好からず。故に相しれる者一人をえらひ費用をあたへ、彼白土を携へ肥前国佐賀領南河原山の陶家に遣し、其法を習はしむ。其者六十餘日逗留して焼物の秘法を学ひ得て、もろもろの器物を焼出し携へ帰らぬ。しかりといへども、安平微賤の身にて最初に陶工を起せし時、家財を沽却しければ今更大なる作業を企へき餘蓄なし。幸に親しき富家二三輩をかたらひ、資財を借用して其志を遂げ、今に至りてかく繁昌を得待るとなん。」「登窯・陶器所等を表現した挿図あり」	加藤・鷹取 1977/1978
高取焼		釜床窯 田島窯 西皿山窯	寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻38 早良郡上 鹿原村の項の「陶器所」	「宝永五年の春より陶工高取・五十嵐二人を移して陶器を製せしめらる。今にしかり。寛文五年より元禄十七年までハ、上座郡鼓村にて陶工せり。元禄十七年の春、陶師高取某博多に居を移し、早良郡田嶋村の内六反間にて陶製せり。今も其跡あり。享保三年上座郡小石原村に居住せし陶工数人招かせられ、民用の陶器を製造せり。此所を土俗西皿山といふ。陶工の家廿七軒、窯所三ヶ所あり。」	加藤・鷹取 1977/1978
高取焼		田島窯	寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻38 早良郡上 田嶋村の項	「六タンマといふ所にていにしへ陶器を製せし事あり。皿山の處にしろせり。今も陶器の破れ残り。」	加藤・鷹取 1977/1978
能古焼			寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻40 早良郡下 残島の項	「明和の比より此嶋にて陶器を製す。」	加藤・鷹取 1977/1978
高取焼		大鳴窯 釜床窯 田島窯 西皿山窯	寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻46 土産考上 「鷹取瓷器(やきもの)」の項	「はしめ鞍手郡鷹取に居て瓷器を製す。故に鷹取焼と云となん。本編に詳なり。今も鷹取山古城の西北に釜の尾と云處あり。是陶器を製せし跡なるへし。又遠賀郡城畑村・鞍手郡大鳴谷にも陶器を製せし事有。…寛文五年より元禄十七年迄は、上座郡鼓村にて製せしか、元禄十七年の春鷹取八蔵居を博多に移し、早良郡田嶋村の内六反間、又那珂郡下鑿固村の大鋸谷にて製する事廿余年にして、又早良郡鹿原村の内、上の山にかまを移して今に製せり。其陶土ハ御笠郡向佐野村の土を佳とす。享保の初年鹿原村の内に陶工を置く。今西皿山と云。民間に用ゆる井桶及種々の磁器を製す。日用に便あり。其葉石は穂波郡合屋郷中村の内、高宮と云所より採用す。」	加藤・鷹取 1977/1978
高取焼		中野上の原窯	寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻46 土産考上 「中野陶器」の項	「本編に見ゆ。上座郡小石原村の内中野にて焼し昔の瓷器、たまたま民間に遺れるを見るに、南京の染付ありて奇麗なり。…又博多に慶長・元和の比、高原五郎七と云者あり。…今豊前国上野の陶工は、此五郎七か子孫也と云。また本州上座郡の小石原の陶工も五郎七か末也と云。…」	加藤・鷹取 1977/1978
須恵焼			寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻46 土産考上 「須恵陶器」の項	「宝暦の初糟屋郡須恵村にて製せしめらる。伊萬里焼とならひて世に愛せらる。其製伊萬里に同し。…凡國中に磁器を製する所、上座郡小石原・嘉麻郡漆生村の内黒田・早良郡鹿原村の内同郡残嶋等なり。遠賀郡上畑村の土中よりも陶器を掘出す事あり。宗像大宮司盛なりし時に、祭器を製せし所なるへし。」	加藤・鷹取 1977/1978
			寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻46 土産考上 「土器(かわらけ)」の項	「本編に早良郡飯盛村の製佳品なるよし見え侍れども、今は製せず。かはらけ屋敷といふ名のミ残り。博多にては今も多く作る。近年裏糟屋郡古賀村の内花津留年及夜須郡甘木町にて多く製す。…」	加藤・鷹取 1977/1978
			寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻46 土産考上 「瓦」の項	「本編に見へたり。今博多瓦町に瓦師数家あり。…此町の瓦師等は昔より今に至りて丁役を免除し給ふ。此外宗像郡赤馬・穂波郡飯塚・裏糟屋郡濱男・夜須郡甘木・上座郡久喜宮・志摩郡今宿・早良郡鹿原等にも瓦師あり。今宿の瓦尤よし。府廷にもささく。」	加藤・鷹取 1977/1978

焼物名	番号	関連窯名	年月日	史料名	内容	備考
			寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻46 土産考上「瓦町陶」の項	「博多瓦町・祇園町辺に、瓦器〔焙轆(ほうろく)師といふ〕を製する家六七戸あり。火鉢・火ちりん・手爐等數品を製す。就中宗七と云者良工なり。…又夜須郡甘木・裏糟屋郡濱男にても瓦器類を製すれども、博多の瓦器に及はず。」	加藤・鷹取 1977/1978
			寛政10年(1798)	『筑前国統風土記附録』巻46 土産考上「土石類」の項	「瓷器土」「本編に出たり。穂波郡中村の内高宮といふ所の土八、早良郡西皿山に採用中。又同郡相田村の内やしき、上座郡赤谷村の内すぎぞい、鞍手郡中山村の内さるはみ、福井村の内さるはみ等にもあり。」	加藤・鷹取 1977/1978
皿山		野鳥窯	享和2年(1802)	『長舒公記』	「秋月陶山を野鳥村に開く」	(伊東1948)
			享和2年(1802)	『古史捷』	「島原三重町金助同人子弟蔵右同町伊右衛門同人女房筑前小石原村武助同人女房延岡小峯町勝弥同人女房同人娘せいゞ九人皿山掛仕候二付下末広村助三郎方工宿為致度願被仰付」	郷土文化研究所1964 小石原やきもの関係年表
皿山		野鳥窯	享和2年(1802)	『望春随筆』	「…作り人ハ豊前上野より二・三人来り、小石原よりも来る。後ハ豊前イマトウト云所よりも来る。寛政十一・二年より凡十年斗作る。摺鉢・イビ瓶・徳利之類也。都て小石原焼に似たり。…」	甘木歴史2006
			文化3年(1806)	宗七焼の女形面の体外の刻書	「文化三年五月 正木宗七作 (印銘)」	歴民2001
			文化9年(1812)	[中村平左衛門日記]	豊前6代藩主小笠原忠固が小倉城下篠崎邑の清水皿山の窯場に立ち寄り、作品を見物した	北九州市歴博2000
			文化10年(1813)	『筑前国統風土記拾遺』の巻25 嘉麻郡上 上山田村の両神宮の項の「土産」	「猪鼻に陶冶二戸あり。茶碗 土鍋 花瓶 酒壺 鉢等の類を造る。抑此村に陶器を製する始ハ元文の比に起れり。然るに其後中絶せしを、文化十年猪鼻の農人再興し、今専ら諸方に販きて家産とす。…」	青柳1993
須恵焼			文化11年(1814)	須恵焼の染付龍雲文鉢の外底面高台内の染付による文字	「文化十一年 戊四月初 長澤氏 山泉画」 (須恵町指定文化財 No.14;1982.4.1指定)	歴民2001
上野焼			文化13年(1816)	小笠原藩の御茶道頭古市氏11代自得齋の『江戸会記』	「 / 水指 萩 / 茶入 瀬戸耳付 / 茶碗 古上野 不変銘 銘 / 茶杓 山田宗也作 /」 文化14年正月23日、同年7月17日、同年6月3日にも上野焼が見える	井上1943 美和1942
上野焼			文化14年(1817)	『江戸会記』	「文化十四年六月三日 / 江戸、小笠原近江守亭 / 掛物 忠苗公御文、御茶頃絵御文 / 近江守様京二条御番の時なり / 釜、壺、古浄味作。水指、南蛮平 / 茶入、古上野 黄葉。」	赤池町1977
一の瀬焼			文政2年(1819)	浮羽・朝田焼(一の瀬焼)の伝世品の染付鶴文茶碗の入った木箱の銘記	「文政二卯年二月二十三日 生葉郡浅田村一の瀬谷大福山(不明) 鶴絵茶碗 拾 平塚」	浮羽町1988(上) 永竹1982
上野焼			文政3年(1820)	小笠原藩の御茶道頭古市氏11代自得齋の『清風軒会記』	「 / 茶碗 古上野 /」 同年5月13日、文政5年正月元旦、同年正月2日、同年2月5日、同年2月28日、3月7日、文政6年正月元旦、同年3月7日、文政7年正月2日、同4月14日、同年5月17日、同年閏8月22日、同年9月13日、同10月3日、同年12月12日、文政8年正月22日、文政12年正月18日、文政13年正月2日、同年2月26日、同年同月28日にも上野焼関連で瓢形手付、狂言袴、香炉、茶入、薄茶入、水指、花入、茶碗、鉢などが見える	井上1943
須恵焼			文政4年(1821)	『筑前名所図会』巻9	須恵皿山の記述がある	高倉1996 九州歴史資料館2009
上野焼			文政6年(1823)	小笠原藩の御茶道頭古市氏11代自得齋の『文政会記』	「 / 香合 上野 亀 / 花入 一重、作不知、花サン口 / 水指 上野 /」 同年8月12日にも上野焼が見える	井上1943
一の瀬焼			文政6年(1823)	朝田焼(一の瀬焼)の磁器染付瓶の胴部外面の染付銘	「皿山」「文政六年 閏仲秋」	久留米市史1996 歴民2001
田香焼			文政8年(1825)	『勾金地方郷土史資料』	「此年田川郡高野常安にて田香焼を始む」	伊東1948
田香焼			文政8年(1825)	『近国焼物山大概書上帳』	田香焼の藤原皿山(堂原焼)、今藤(今任焼)についてはこれよりも古く開窯していた	香春町2001
須恵焼			文政11年(1828)	須恵焼の染付菊花文神酒徳利の外面の染付銘	「文政十一年 霜月吉祥日 上須恵皿山 小山田勝兵衛」「十六弁菊花文奉寄進」 (須恵町指定文化財 No.15;1982.4.1指定)	歴民2001

焼物名	番号	関連窯名	年月日	史料名	内容	備考
高取焼		西皿山窯	文政11年(1828)	西皿山窯跡(藤崎遺跡第35次調査)出土の窯道具の刻書	「文政十一年 子五月吉日」	福岡市2006 力武2016
上野焼			文政13・天保元年(1830)	小笠原藩の御茶道頭古市氏11代自得齋の『天保小倉会記』	「 / 花入 上野 華、白梅 / 」 同月3日、同年2月20日、同年3月6日、同年11月26日にも上野焼の茶入・建水・花入・香合が見える	井上1943
柳原焼			天保3年(1832)	筑後柳原焼の大皿の篋刻	「天保三辰年八月朔日於柳原浅田薫保定造之」 九州医学専門学校の富田新氏蒐集の高台破片に、 天保三辰年八月十三にちと刻せるものと、良八作と自己の名を篋刻せるものがある。	梅野1934
			天保5年(1834)	『望春随筆』巻2の「皿山」の項	浄満寺皿山、野鳥皿山の記述あり	秋月1996
田香焼			天保5年(1834)	「筒形花生」の箱本体及び添え状	天保5年の紀年がある (大任町指定有形文化財)	大任町1998 歴民2001
高取焼			天保 8年(1837)	『小石原村皿山記録』	高取源十郎重定、高取吉十郎重義により記される	小石原やきもの 関係年表
須恵焼			天保 9年(1838)	染付菊文瓶子型神酒德利(佐谷神社旧蔵)一対の外面の染付による文字	「天保九戊戌 三月吉日 願主 百田五内是村」 (須恵町指定文化財 No.16; 1982.4.1指定)	歴民2001
高取焼		西皿山窯	天保 9年(1838)	西皿山窯跡(藤崎遺跡第35次調査)出土の窯道具の刻書	「戊十一 西皿山 天保九年」	福岡市2006 力武2016
高取焼		釜床窯	天保 9年(1838)	『太宰府管内志』筑前之18鞍手郡の項	「…寛文7年より又上座郡鼓村にうつりてやく」	小石原村第5集
上野焼			天保10年(1839)	小笠原藩の御茶道頭古市氏11代自得齋の『文政天保京江戸会記』	「 / 建水 上野 / 」 天保12年11月5日にも上野焼水指が見える	井上1943
高取焼		永満寺窯 白旗山窯 釜床窯	天保12年(1841)	『太宰管内志』筑前之18(鞍手郡)「高鳥居ノ城」の項	当郡永満寺村の内に高取井ノ古城とてあり…また 太閤朝鮮攻の時加藤清正彼國にて瓷器を製する者 をつれ来たりて肥後國にて是を造らしむ其者ノ名を 井戸新九郎と云故に其製せし器を井戸焼と云後に長 政朝臣彼者を筑前に召されし鷹取ノ手塚水雪に命じ てそにて瓷器を製せしめ給ふ是に依て鷹取焼とな づく、慶長十九年より同郡内内ヶ嶽と云ふ處にて八 蔵と云に仰せて焼かしめらる是を八蔵やきと云其後 寛永七年穂波郡合屋ノ中村ノ内白旗山の北ノ麓に 移りてやく、寛文七年より又上座郡鼓村にうつりてや く今の陶工は新九郎が末裔なり、	
星野焼			天保12年(1841)	『太宰管内志』筑後之2(生葉郡)「星野」の項	「[筑後志二卷]に陶器は生葉郡星野村十龍名の産 あり往年上妻郡形焼を伝来し近來建山焼の茶器 を製す尤好品なり先君命有て御井郡の地にして陶器 を製しめ給ふ是を遠近に販ぐ其製肥州の伊万里焼 に等し今廃せり惜しむべしとあり。」	
坂東寺焼			天保12年(1841)	『太宰管内志』筑後之7(上妻郡下)「坂東寺」の項	「…東大門ノ側有民居善陶如其酒盞爐具之類雖深 草半田之甄家亦不及府君每歲獻之東武など見えたり、 …[後略]」	
水田焼			天保12年(1841)	『太宰管内志』筑後之7(下妻郡)	「…さて下妻郡水田村に土師ありて半田(ハンダ)土 鍋とて名産を出すその事くはし[く地鑑]に見えたり、」	
上野焼			天保12年(1841)	『太宰管内志』豊前之3(田川郡下)「城田郷」の項	「…序に云上野ノ瀧より少し下ノ方に上野ノ皿山とて 陶器を作る處あり上野焼とて名産なり其製様は世に 勝れてエミなる事もなければも酸酒ノ類を入れ置くに 長く傷ふ事なし是は近古に筑前国鞍手郡高鳥井より 移れりと云高鳥居に居たりし陶工は太閤朝鮮征伐の 時加藤清正彼國よりつれ来たりし陶師の子孫なり上 野にあらひて当郡今任村又小倉の清水にも陶器を 作れども其(ソノ)製はるかにおとれり、」	
			天保13年(1842)	筑紫野市原田の原田地区遺跡第80地点(原田宿の代官所跡)から出土した小石原産陶器の徳利の墨書銘	「天保十三 染屋[嘉]口 寅三月」	筑紫野市2018
宗七焼			天保13年(1842)	宗七焼の施釉陶器の炉の外面の刻書	「天保十三壬寅年 口口吉日 天神 陶工正木宗七 口口 作」	歴民2001
須恵焼			弘化 3年(1846)	蓋裏鉄絵虎文蓋付染付牡丹唐草文鉢の蓋裏	「七十八翁秋圃(花押)」	歴民2001
上野焼			嘉永7・安政元年(1854)	田内梅軒の『陶器考、同附録』嘉永7年、安政2年著述、明治16年刊	上野焼の記述あり	(井上1943)

焼物名	番号	関連窯名	年月日	史料名	内容	備考
田香焼			嘉永7・安政元年(1854)	個人所有の香炉蓋裏の刻銘	「安政年 銅原 田香」	大任町2004 歴民2001
野間焼			安政3年(1856)	『福岡藩民政誌略』	「那珂郡野間村柳河内にて焼物を製す(民)」 京都の陶工佐々木与三を招き、野間血山窯開窯。	伊東1948 九州陶磁文化 館1992/2010 永竹ほか1982
田香焼			安政3年(1856)	緑釉徳利の外底面に墨書の文字	「安政三 〇〇 辰十月」	歴民2001
高取焼		中野上の原窯	安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻21 上座郡(上)小石原村の項の「土産」	中野にて陶器を製す。罌(とくり)花瓶 碾茶壺 摺盆 瓦寶(いび)等の類なほ種々の土器を造る窯三處に在り。天和二年白瓷を製して中野焼と云しを後に其製は止て高取焼に習て民用の諸器を作る。・・」	
高取焼		釜床窯	安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻21 上座郡(上)鼓村の「大行事社」の項の「天照大神宮」	「釜床に在り。・・延宝九年陶師高取氏建立す。其家祖以来転任せし處々の神を勧請すと云。明和年中に此神の靈験に依て盜賊の難を避し事高取家記にあり。本編に寛文七年國君より高取の陶工を此村の鶴に置て陶器を焼くとあれど何れの時に絶しに歎今は爰にては製せずなりぬ。」	
			安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻21 上座郡(上)赤谷村の項	「村ノ東杉添と云處より陶器の葉に用る白土を出す。」	
			安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻25 嘉麻郡上山田村の兩神宮の項の「土産」	「猪鼻に陶冶二戸あり。茶碗 土鍋 花瓶 酒壺 鉢等の類を造る。抑此村に陶器を製する始ハ元文の比に起れり。然るに其後中絶せしを、文化十年猪鼻の農人再興し、今専ら諸方に販きて家産とす。木城に唐人谷と呼處あり。むかし唐人來住して瓷器を焼し事ありしと云フ。是元文の比にか又其以前の事か詳ならず。鷹取焼の元祖ハ朝鮮人也。其流の陶工なる故何となく唐人谷とよふか。猶考ふへし。」	
			安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻26 嘉麻郡下漆生村の項	「……田中に陶工二戸有。其製猪鼻焼に類す。豊前国上野の流なり。」	
高取焼		犬鳴窯	安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻29 鞍手郡上大鳴谷の項	「・・又血山址本谷筋に在。今も其所を血山と云。高原五郎七 慶長元和頃の人と云者瓷器を製せし所なり。今は陶工なし。犬鳴焼とて其陶器を民家に稀に持伝ふ者有。・・〔後略〕」	青柳1857
高取焼		犬鳴窯	安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻31 鞍手郡下乙野村の項	「……又乙野原と云處に高原五郎七と云者の墓あり。此者は犬鳴谷にて瓷器を焼し者にて土を此地より取しと云ふ。……」	青柳1857
			安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻31 鞍手郡下鶴田村の項	「・・豊前国上野焼の瓷器の葉を用る土を出す。其代物として年々し播鉢三十を当村に贈る。」	青柳1857
高取焼			安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻31 鞍手郡下永満寺村の「土産」	「・・又古へ当村にて高取焼とて陶器を製せしか今ハ絶たり。其跡ハ宅間の南豊前国上野に通ふ山径の側に在。今も竈床と云。傍にある池をかま池と云。破瓦など多し。猶土産門に詳也。」	青柳1857
			安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻32 遠賀郡元上畑村の「荒平社」の項	「村南菅町余羅か岳の麓に唐人山といふ處あり。宗像家在城の侍此所に陶器を焼しか其煙城中にかけりいふせしとて是を廢せられしよし伝へたり。今に其破瓦土中に埋れてあり。其昔唐人來り焼初し故に名つくといふ。」	
			安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻37 宗像郡中大井村の項	「・・又土器田と云地有。宗像の祭の土器を製せし處也と云」	

焼物名	番号	関連窯名	年月日	史料名	内容	備考
須恵焼			安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻40 表糟屋郡下 須恵村の「土産」	「瓷器 伊勢山東原と云所にて製す。今其地を皿山と呼へり。[西須恵の地雑居す。但上須恵に近し。] 居民三拾二戸窯二所に在。本登[廿二竈] 新登[十三竈]と云。白瓷の茶碗 花瓶 酒壺 鉢 鉢其外種々の器物を焼出す。此處は大山に近く薪木多く且洞流に依て水碓を数多構へ陶土を舂しめ人功を助ければ陶戸の便宜自ら地利に叶へり。其初宝暦年中寺社司の下吏に新藤安平と云者有。南京焼の器物を製せん事を官に請ければ、則許容有て同十四年此所に窯を築き土木の料を与へ安平をして其事を指揮せしめらる。扱出す所の焼器をえらひ国用に充て其余は他州にも販く事を許さる。・・[中略]・・抑安平か此山を起せし始末を聞に、宝暦の初年須恵村の内蓬谷の金山まふと云所及近辺の諸山にて石炭を採穴の内より掘出せる白土を見て、西皿山[早良郡鹿原村]の陶工を招寄て試に陶器を焼しむるの其製良からず。故に相知れる者一人を撰ひ用脚を与へ彼白土を齎し肥前国佐賀領南河原山の陶家に遣し其法を習はしむ。其者六拾余日逗留して焼物の秘術を学ひ得て数品の器物を焼出して携へ帰りぬ。・・[後略]	
高取焼		西皿山窯	安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻43 早良郡上鹿原村付皿山の項	「枝郷皿山 俗に西皿山と云。享保三年より上座郡小石原村の陶工数家を爰に移して陶器を製せしめらる。今八年を追て番昌し漸く村落をなせり。」 「村の北西新町の南辺に小山あり。上の山といふ。宝永五年の春陶器所と定らる。即陶工高取五十嵐の二氏爰に居を移して 其始ハ上座郡鼓村に在。其後博多住す。香爐 水指(碾茶壺) 天目(茶盃) 香合等種々の器物を製せしめらる。良工なり。世の人爰を東皿山といふ。」	
能古焼			安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻43 早良郡上残嶋浦の「神宮寺」の項	「・・此寺の上の山に陶器を造る土あり。天明の初年此土を取て製せしかいくほとなく其事やみたり。」	
高取焼		田島窯	安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻45 早良郡下田嶋村の「友泉亭」の項	「陶器所 六段間と云所にて昔陶器を製せり。今も其破綻たるもの多く残れり。」	
			安政4年(1857)	『筑前国続風土記拾遺』巻48 志摩郡上谷村の「土産」の項	「・・又瓦工三戸あり。其製殊に佳なり。」	
田香焼			安政4年(1857)	金森得水の『本朝陶器攷證』	「田川郡香春村 田香焼のこと八田川今任村にて焼物いたし候、上手ゆへ段々世話いたし、当時香春村に住居仕候て焼立候、田香の二字ハ自得より遣し候、則當時初代にて候」	香春町2001 井上1943 藍田1937
			安政6年(1859)	原田家津屋崎人形型(通称加藤清正像)の陰刻銘	「安政六〇〇〇〇〇四月朔日」「〇〇〇間屋藤兵衛」	
田香焼			文久2年(1862)	緑釉徳利の外底面の刻書	「文久二 戌 四月廿日 田香」	歴民2001 大任町2004
須恵焼			文久3(1863)	染付仙人親子図茶杓立の体部外面の染付による文字	「文久三亥春日 紀荒写(花押)」「中牟田卯右衛門」	歴民2001
高取焼			元治2・慶応元年(1865)	東皿山窯の亀形蓋物の外底の刻書	「為山口用器雪杉重任製之/慶應元乙丑仲秋中旬」	歴民2001
須恵焼			慶応3年(1867)	「七卿在西日誌」	太宰府に滞在中の五卿(三条実美・三条西季知・東久世通禧・四條隆調・壬生基修)が須恵焼皿山陶所を見物する 「乗馬、午後須恵皿山陶所見物。宇美社参詣。暮夜帰宰。所々藤花盛開」	伊東1934
高取焼			慶応3年(1867)	東皿山の陶器の亀形蓋物の外底部の刻書	「為山口用器雪杉重任製之 慶應元乙丑仲秋中旬」	歴民2001
筑後赤坂焼			文久元年(1861)～慶応元年(1865)の頃に詠んだものか		野村望東尼が筑後赤坂焼を詠んだ歌あり 「筑後のまた見あるきけるにあか坂といふ處ありければ あか坂の埴生のこやのすえ物のいろはくろくそ焼いてにけり」	浅野1935
			慶応4・明治元年(1868)	「添田町諸商賣諸職書上帳」(添田手永大庄屋中村家文書)	「高野焼」「今任焼」の記述あり。 高野は香春町の、今任は大任町の、田香焼のこと	
乙子焼			慶応4・明治元年(1868)	「上高屋、内垣村諸納控写」に運上として辰十一月に記載	京都郡犀川町(みやこ町)上高屋の乙子焼がこれ以前に開窯していたらしい 「焼物釜 壺枚」	広津1981

注

(1)この表は、当館文化財調査室長補佐の伊崎俊秋氏(令和2年度当時)が作成したものを、学芸調査室学芸研究班の酒井が補訂したものである。

4 窯跡の保存と活用

今回の調査では、リスト上 106 件の窯跡を把握した。その内、窯本体の確認はできなかったものの陶片や窯道具、窯壁の発見等により確認したものを含め 52 件を確認することができた。その数はリストのおよそ半数であり、残りは所在場所の情報が不明確で、窯跡を特定できなかったものであり、災害等により消滅したものもあった。

既存資料や採集資料、文献史料からの検討により、それらの消長は p166 の表のように整理した。創業や廃絶の具体的な年代がおさえられるものは多くはないが、今後の調査により精度が高まることを期待したい。

第 1 章から述べてきた通り、近世窯業関係遺跡は、大名の庇護にあった国焼はもちろん、地域の産業や政策と深く関わり、地域文化の特色に相関する民窯も、福岡県あるいは当該地域にとって必要な埋蔵文化財として認識でき、必要なものについては埋蔵文化財包蔵地としての周知化と、重要なものについては指定等による保護措置が必要と考える。

重要なものとしての判断基準は、陶磁史的に画期となるもの、系譜において代表的なもの等が考えられ、かつ遺存状態が良いものが挙げられる。

旧国毎にみても、筑前国（福岡藩領）では、高取焼の永満寺宅間窯、内ヶ磯窯、山田窯、白旗山窯、釜床窯、大鋸谷窯、東皿山窯がある。これらの内、文化財指定を受けているのは永満寺宅間窯（直方市指定）、釜床窯（福岡県指定）である。内ヶ磯窯は調査後保全措置を図った上でダムに水没、山田窯はボタ山下に埋没、大鋸谷窯と東皿山窯は古い開発により状況が不明瞭である。特に白旗山窯は小堀遠州の好みを反映した高取焼を初めて焼成した窯であり、磁器焼成も実験的ながら取り組んでいる、高取焼の展開を考える上で画期となる窯であり、保護措置を図るべき窯と考える。

また、高取焼から派生し、民窯として展開していった、現在の小石原地区に点在する窯跡は、一本杉 2 号窯跡のみが福岡県指定史跡として指定されている。これらの窯は小石原村（現・東峰村）により体系的に確認調査が継続され、中野上の原窯跡・火口谷窯跡・金敷様裏窯跡の調査成果が公表されている。中野上の原窯跡は素材に恵まれず継続しなかったものの磁器生産に本格的に取り組もうとした窯であり、本県の陶磁器生産で重要な位置を占める。既に県指定の一本杉 2 号窯跡を含め、その後に展開する窯跡群を包括的に保護していくことも検討したい。

豊前国については、上野焼の釜ノ口窯跡、皿山本窯跡、岩屋高麗窯跡があり、お楽しみ窯である菜園場窯跡がある。菜園場窯跡は開発により確認され、現地から移設して保存されており、県の有形文化財（考古資料）の指定を受けている。上野焼の窯は岩屋高麗窯跡の一部が破壊されているものの、釜ノ口窯跡、皿山本窯跡いずれも残存しており、その持つ意義は極めて大きい。そのような意義から昭和 33 年（1958）から日本陶磁協会等が主体となり発掘調査が実施され、国指定の仮指定とされたものの、調査成果が十分に公表されなかったこともあり、未指定のままである。したがって、それぞれの窯跡や出土品の価値を明確化するための調査を経て、保護措置を図るべきである。その前提として、初期の釜ノ口窯跡を代表とした創業時期、技術系譜、製品の諸特徴の把握は、研究が比較的進んでいる高取焼と比較する上でも必須の作業である。また、基礎的な作業として、今回の調査ではかくし窯跡やカンバ窯跡等、先行研究で把握されているものの現地を特定できなかったものもある。上野焼の展開を考える上では、これら窯跡の確認が求められる。

筑後地域については、蒲池焼や坂東寺焼といった国焼の窯が、窯跡の確認等が十分なされておらず、平野部に位置することから大部分が失われている可能性があり、お楽しみ窯である柳原焼窯跡や東野亭焼窯跡も既に失われている。その中で、筑後において磁器生産に本格的に取り組んだ朝妻焼窯跡は特に重要である。

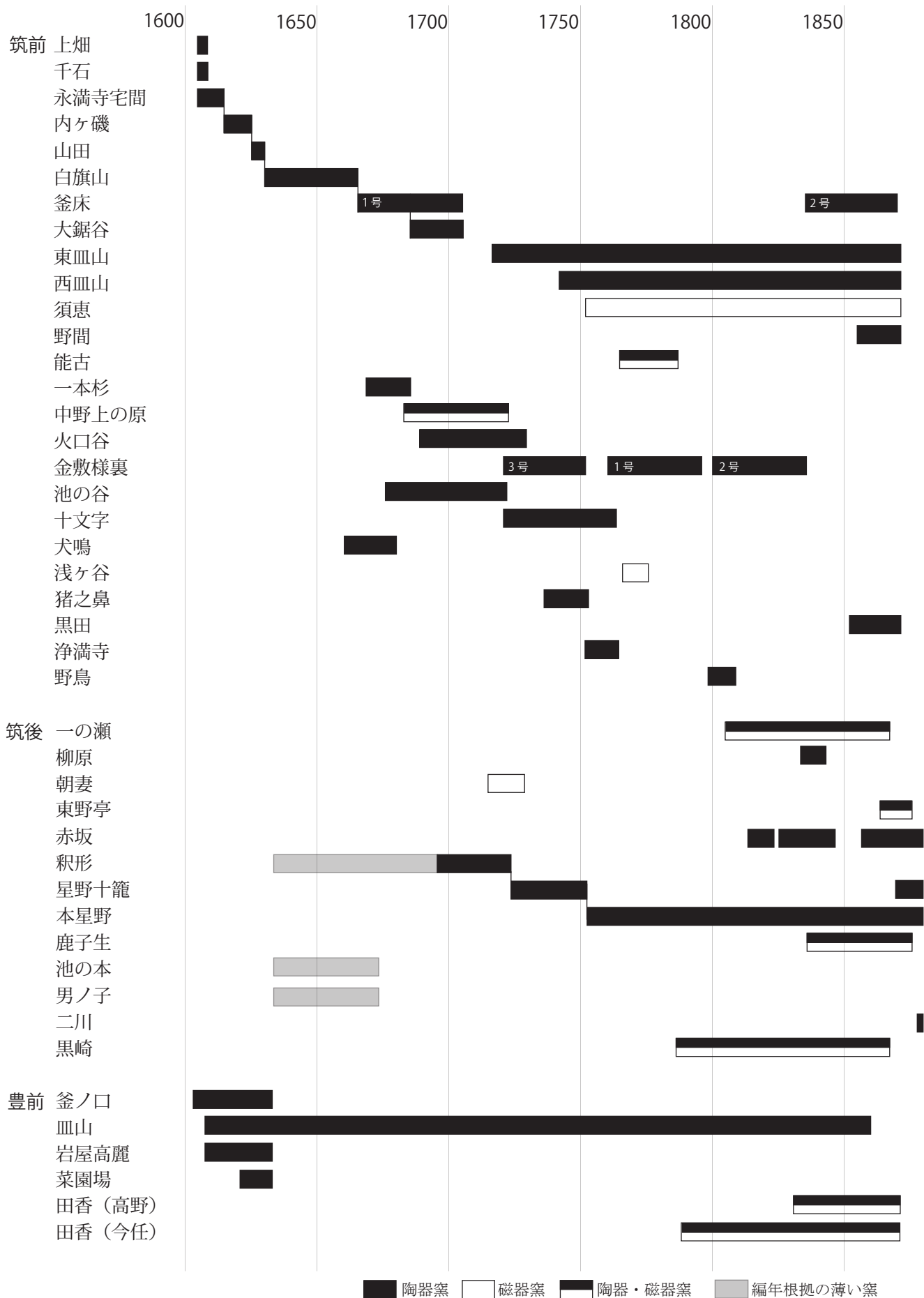
また、筑後地域は現在でも八女茶が大きな産業の一角を占めるが、この茶の文化は地域史として重要な位置付けがなされる。茶の貯蔵器である壺の生産は筑後山間部で早くから行われ、釈形焼や星野焼はそれを代表する。いずれも正式な発掘調査が行われておらず、操業時期は不明確なものも多い。釈形焼窯跡の創業時期や、より古式と考えられる池の本焼窯跡の詳細な情報が求められる。こうした茶生産に関わる陶器焼成窯については、学術的な確認調査を通して位置付けを行う必要がある。また、筑後地域の平野部の窯跡は既に失われたものが多いことを触れたが、二川焼は時期は比較的新しいとはいえ、上部構造の残存状況が良い。

隣県には佐賀県肥前古窯跡や大分県小鹿田焼、熊本県小代焼等、近世古窯跡を活かしながら現代の陶芸技術を継承している地域がある。佐賀や大分は窯や工房等が生む景観を文化的景観として保存するとともに特に佐賀では伝統的建造物群保存地区としても保全と活用が図られている。福岡県内では古窯跡を活かしたそうした取り組みは現時点では十分ではないが、今回の基礎的な把握を契機に保存と活用に向けた取り組みが活性化することを期待したい。

このように概観し、評価の方向性を示したが、注意すべきはそれぞれの窯業関係遺跡は、窯本体のみが保護の対象ではなく、工房を始めとして関連する諸遺構も保護の対象とすべき点である。県内の窯跡で積極的に工房が評価されているのは内ヶ磯窯跡と須恵焼窯跡のみである。検証するのは困難と思われるが、土取り場も意識する必要がある。また、窯に携わった工人の墓地も調査の対象となる。

今回行った近世窯業関係遺跡の現時点での悉皆的な把握により、課題や方向性が見出せるようになった。今回は埋蔵文化財包蔵地としての視点が主眼であったため、製品や窯道具の諸特徴については多く検討できなかった。今後、古代の土器編年と同様、近世遺跡を評価する上では出土する陶磁器の評価が肝要であり、そのためにも生産遺跡の評価が重要である。今回把握した窯跡とその出土品の検討が今回の調査を機に進展することを期待したい。

福岡県内窯業遺跡編年表（～明治）



V おわりに

この報告書では、令和2年～4年度の4年間に渡った近世窯業関係遺跡調査をまとめた。

調査当時はコロナ下の緊急事態宣言により、令和2年度の1年間は資料集約に時間を費やすだけであったが、令和3・4年度には、窯跡のある現地での調査指導委員会開催と重点調査を進められた。最後の令和5年度の調査指導委員会では、雨の中で現地で開催し、この報告書を刊行に向けての十分な協議を行うことができた。

今回の調査では、大きく第1次調査の悉皆調査と第2次調査の重点調査の2つを行った。

第1次調査では関連論文、市町村史誌、市町村発掘調査報告書、歴史史料などから情報を集めた。その結果、窯跡で106件、関連遺跡で56件の情報を得ることができたのは、今回の成果の一つである。情報の中には、参考文献からの情報のみで不明な窯跡も多々あるが、現時点での福岡県内の近世窯業関連遺跡についての情報をまとめることができた。

第2次調査では、重点調査として福岡県内の近世窯業を考える上で、高取焼、上野焼、小石原焼、その他の地域の窯跡に注目して、関連する窯跡28件について現地確認を行った。調査は主に現地へ赴き踏査を行い、現況や遺物の採集から窯跡の有無を判断した。調査に赴いたほとんどの窯跡で遺物を表採集することができ、窯跡の存在を証明し、今回の報告書では、できるだけ採集した遺物は、実測して掲載することに心がけ、これまで知られていない遺物についても掲載できたのも今回の成果である。

これら2つの悉皆調査と重点調査で得られた情報をまとめたこの報告書をもとに、確認調査や本調査で詳細な情報が判明していけば、新たな知見を得ることができると期待される。

しかし、この報告書を刊行することで、窯跡や関連遺跡の情報が広まることによる遺跡の盗掘などで保護が疎かになることだけは避けて頂きたい。この報告書で掲載した遺跡が、現状よりもより良く保護されることを期待して刊行されたものである。

埋蔵文化財として取り扱うべき遺跡の範囲については、「I はじめに」で先述したが、再度ここで重要な部分のみを述べると、近世の遺跡の取り扱いについては、「地域において必要なものを対象とすることができる」とされており漠然としている所も多い。しかし現在の私たちが福岡県の歴史やそれぞれの地域の歴史を考える上では、文献史料以外の情報を知る上で埋蔵文化財の近世遺跡の取り扱いはより重視されるべきものと思われる。この報告書の刊行により、近世の窯業関係遺跡の取り扱いに関して、一つの方向性を示すことで、今後の遺跡保護に寄与できれば幸いである。

なお、この報告書で作成した第1次調査及び第2次調査については、市町村の文化財職員の情報提供と調査協力を得て成し遂げられたものである。ご協力頂いた地元の関係者の方々と市町村文化財職員の方々に再度、お礼を申し上げたい。

この報告書の刊行により、掲載された遺跡の保護がさらに進み、福岡県内の近世窯業関係遺跡の調査研究を行う上で、一助になれば申し分もない。

福岡県の窯業関係事象年表

- 1422 (応永 29) 【茶】この年または翌年に、僧で茶人の村田珠光が生まれる
- 1423 (応永 30) 【茶】周瑞禅師が筑後国鹿子尾村（八女市黒木町）に靈巖寺を建立、茶種子を播く
- 1522 (大永 2) 千利休（宗易）が生まれる（1522～1591.2）→ 天文 13 年（1544）説あり
- 1543 (天文 12) 武将で茶人の古田織部（重然）が生まれる（～1615.6.11）
- 1579 (天正 7) 小堀遠州が生まれる（遠州流の開祖、宗甫と号す。茶道は古田織部に学ぶ）
- 1592 (文禄 1) 3 月 文禄の役（壬辰倭乱）（～1593）
12 月 豊臣秀吉は家長彦三郎に朱印状を与える
- 1596 (慶長 1) 朝鮮出兵の武将・大名帰陣。李朝系工人ら多数帰化し西日本諸域に開窯
- 1597 (慶長 2) 1 月 慶長の役（丁酉再乱）（～1598）
- 1600 (慶長 5) 9 月 関ヶ原の戦い。12 月に黒田長政が筑前名島城に、細川忠興が中津城に入る
- 1601 (慶長 6) 3 月 田中吉政が柳川城に、11 月に細川忠興が小倉城に入る
※この頃、永満寺宅間窯開窯か。八山、高取八蔵の名を賜る
※この頃、尊楷（上野喜蔵高国）、釜ノ口窯開く（説）
※筑前上畑窯〔唐人焼窯〕（遠賀郡岡垣町上畑）と千石焼（宮若市千石）開窯説
- 1603 (慶長 8) 2 月 徳川家康が征夷大將軍となり、江戸幕府を開く
- 1604 (慶長 9) 11 月 筑後国守・田中吉政は土器師・家長彦三郎を土器司に命じる〔蒲池焼（柳河焼）〕
※永満寺宅間窯開窯説（慶長 7 年説・11 年説あり）
- 1605 (慶長 10) 上野：釜ノ口窯開窯 → 慶長 6 年（1601）・7 年開窯説あり
- 1606 (慶長 11) 永満寺宅間窯が開窯される（慶長 7 年・9 年説あり）
- 1607 (慶長 12) 岩屋高麗窯が開窯される
- 1608 (慶長 13) 正木金右衛門博多瓦町にて瓦を焼く
- 1613 (慶長 18) 3 月 茶会記の『織田有楽亭、茶湯日記』に「茶碗 豊前焼」の記述あり
- 1614 (慶長 19) 内ヶ磯窯が開窯される（～1624）
- 1615 (元和 1) 4 月 大坂夏の陣（豊臣氏滅亡一元和偃武）
- 1616 (元和 2) 筑前国の小石原窯（中野焼）創まる
- 1619 (元和 5) 1 月 『吉田梵舜日記』に「豊前焼」の記述がなされる
- 1620 (元和 6) 11 月 筑後柳川の田中家が改易され、立花宗茂が陸奥国棚倉から柳河藩主に復帰する
12 月 久留米に丹波福地山から有馬豊氏が転封される
- 1623 (元和 9) 3 月 上妻郡坂東寺村の田中平兵衛が久留米藩の御用土器師となる（坂東寺焼開窯）
- 1624～1643 有馬豊氏書状に「黒木の焼物」との記述がある。（後の釈形焼のことか）
（寛永年間）
- 1624 (寛永 1) 高取焼の山田窯が嘉麻郡（嘉麻市）上山田唐人谷に開窯する
※筑前・千石焼窯が開窯との説あり
- 1625 (寛永 2) 豊前の上野本窯（皿山）開窯説
- 1628 (寛永 5) 4 月 「遠州茶会記」に「茶入筑前焼」「筑前焼水指」の名で高取焼が初めて記載される
- 1630 (寛永 7) 高取焼の白旗山窯が飯塚市幸袋に開窯（～1665）される

- 1632 (寛永 9) 12 月 小倉藩細川忠利が肥後に転封、小倉に播州明石から小笠原忠真 (忠政) が入る
- 1640 (寛永 17) 4 月 細川氏の『三斎公伝書』(茶道四祖伝書) に「小倉焼皿・コクラヤキ」の記述
- 1661 ~ 1673 鞍手郡若宮町 (宮若市) 大字犬鳴の犬鳴焼窯が創業する
(寛文年間)
- 1665 (寛文 5) 二代高取八蔵貞明、白旗山から小石原へ移り、小石原鼓窯開窯される
- 1682 (天和 2) 上座郡小石原村皿山 (中野) の中野焼開窯説 (~ 1722)
- 1686 (貞享 3) 黒田藩主光之は小石原鼓から早良郡田島村大鋸谷 (友泉亭御庭窯) に窯を移す
- 1688 ~ 1703 星野焼 [生葉郡星野村] 元禄年間、開窯説 (正徳年間 (1711-1715) 説あり)
(元禄年中)
- 1698 (元禄 11) 釈形焼 [八女郡黒木町]: 伝世品の箱書に「元禄 11 戊寅」と記されたものがある
- 1704 ~ 1710 この初期、早良郡鹿原村上の山に東皿山窯 (御用窯) が築かれる
(宝永年中)
- 1704 (宝永 1) 大鋸谷窯閉窯
- 1705 (宝永 2) 豊後の天領日田に、小石原系の陶窯 (小鹿田焼) が開かれる
- 1708 (宝永 5) 2 月 早良郡鹿原上の山 (福岡市早良区祖原皿山) に東皿山窯 (東山窯) 開窯する
- 1710 (宝永 7) 貝原益軒『筑前国続風土記』が完成する
- 1711 ~ 1716 生葉郡星野村の星野焼を藩主有馬氏が御用窯として復活する
(正徳年中)
※八女郡水田村野町の野町焼が始まる
- 1714 (正徳 4) 久留米の朝妻焼が藩命により八女釈形窯の焼物師により焼かれ始める
- 1716 (享保 1) 星野焼 (本星野焼) がこの頃に始まる
- 1718 (享保 3) 五代黒田宣政は小石原の陶工数人を移動させ、高取系西新町に西皿山を開窯する
- 1730 (享保 15) 福岡藩では、那珂郡山田村の庄屋・高橋善蔵から樫蠟の栽培が始まるとされる
- 1737 (元文 2) 星野焼の本星野窯が、星野仙頭与次右衛門の願い出で御用窯として認可される
- 1751 ~ 1764 宝暦年間の初頭に窯が本星野から十籠へ移る
(宝暦年中)
- 1764 (明和 1) 表糟屋郡須恵村皿山にて新藤安平が須恵焼の窯を築き、白瓷を焼く
※この頃に、秋月の長谷山浄満寺窯が開窯か (『望春随筆』)
- 1764 ~ 1771 早良郡残島で「明和の比より此嶋にて陶器を製す」(『筑前国続風土記附録』)
(明和年中)
- 1765 (明和 2) 3 月 『石城志』巻 7 「土産 上」に瓦町の「瓷器 (スヤキモノ)」の項が設けられる
※『南筑明覧』に、山門郡柳川城の風爐前土器、三潞郡蒲池村の家永彦三郎の記事がある
- 1766 (明和 3) 宗七焼: 黒田藩御用素焼物細工師・初代正木宗七死去
- 1767 (明和 4) 春 鞍手郡山口村 (宮若市) 浅ヶ谷で百姓惣兵衛が磁器焼物を焼成 (山口浅ヶ谷窯)
11 月 『近国焼物山大概書上帳』に筑前領の須恵皿山・西町皿山・山口皿山が記載される
- 1764 ~ 1781 この頃の記録に上野焼の土として伊方土・夏吉土・市場土・笹尾土が使われるとい
(明和~安永年中) う記載がみられる

- 1777 (安永 6) 『筑後志』の「土産」に、半田土鍋、風爐前土器(上妻郡熊野村)などの記載がみられる
- 1781～1789 黒崎焼が興る
(天明年中)
- 1781 (天明 1) 『高取家記録』が成立する
- 1784 (天明 4) 柳河藩領の黒崎焼に肥前有田の陶工が移る
- 1787 (天明 7) 有田の『皿山代官旧記覚書』に須恵焼・能古焼の記載がみられる
- 1788 (天明 8) 筑後国の水田焼が有馬領主の御用窯となる。筑後国の三原窯が開窯する
- 1798 (寛政 10) 『筑前国続風土記附録』完成。焼物・瓦などに関する記述多々あり
- 1799 (寛政 11) 秋月藩で野鳥窯が開窯される
- 1812 (文化 9) 筑後で赤坂焼が始まる
- 1813 (文化 10) 『筑前国続風土記拾遺』嘉麻郡上山田村の項「猪鼻に陶冶二戸あり。」の記述
- 1817 (文化 14) 太田勝次郎筑後国の朝田窯を経営す(陶器大辞典 1936)
- 1823 (文政 6) 三原富次が赤坂焼復興する
- 1827 (文政 10) 8月 赤坂焼三原窯が久留米藩御用焼立役となる
- 1828 (文政 11) この頃、筑後赤坂焼の陶工が肥前国田代の代官より招かれ、同所瓜生野皿山を創設
- 1830 (天保 1) 朝田焼の樋口窯時代で、大村領内の長与焼・波佐見焼との陶技交流もみられる
- 1832 (天保 3) 筑後久留米の柳原焼が始まる(1832～1836の間焼成)
- 1835 (天保 6) 鹿子生焼：長岡鳳鳴、鹿子生焼開窯(～明治1・2年)
- 1843 (天保 14) 博多市瓦町に大坪久次郎楽焼を創む(陶器大辞典 1936)
- 1850 (嘉永 3) 博多祇園町に中ノ子吉兵衛がこの年に初めて節句人形を作って売り出した
- 1854 (安政 1) 豊前国の田香焼興る(陶器大辞典 1936)
- 1854～1860 須恵焼：須恵皿山役所設置(安政末頃)
(安政年中) ※朝田焼：足立寿平、朝田にて旧窯を利用し、唐津・小石原・星野系の陶工を雇い操業
- 1855 (安政 2) 福岡藩が野間柳河内に開窯し、藩御用窯として陶工佐々木与三郎に京焼を造らせた
- 1857 (安政 4) 青柳種信ほか『筑前国続風土記拾遺』54巻がこの頃なり、陶磁器関係の記述多くあり
- 1858 (安政 5) 5月 豊前小倉の村田成の『豊国名所』が成り、三館飴・田香焼・清水皿山の絵あり
6月 筑後地方で大風あり。これにより御用窯である坂東寺焼の窯が破損した
- 1860 (万延 1) 安政末年、須恵皿山役所が再度設置される
- 1861 (文久 1) 野間焼が開窯される(安政3年(1856)開窯したとする説もある)
- 1865 (慶応 1) 3月 浮羽郡朝田村の庄屋足立俊平の長男・壽平が一の瀬窯を再興する
7月 久留米市野中町東野中の東野亭焼(野中焼)の窯が造られ、製陶が始まる
- 1868 (明治 1) 11月 京都郡犀川町(みやこ町)上高屋の乙子焼がこれ以前に開窯したとされる
※筑後の赤坂会社窯が開窯される(陶器大辞典 1936)
- 1870 (明治 3) 須恵焼：澤田舜山、野間皿山へ移る → 藩窯としての須恵焼が廃窯される

- 1871 (明治 4) 7.14 廃藩置県 → 藩窯はその基盤を失って廃窯となるか、民窯として存続した
- 1875 (明治 8) 豊前国企救郡水町村 (北九州市門司区) の水町焼が創業
- 1876 (明治 9) 蜷川式胤の『観古図説』陶器之部 (明治 9 年 -13 年刊) に上野焼に関する記載がみられる
- 1877 (明治 10) 三池郡の二川焼が焼かれ始める → 肥前弓野焼の中尾米作が来て再興したと伝える
※久留米市で青木焼が開窯される (陶器大辞典 1936)
- 1886 (明治 19) 須恵焼は、田原養全・玉ノ井勝一郎その他福博の商売人 20 人の株式の経営
- 1888 (明治 21) 糟屋郡須恵村の金鏑焼について、福陵新報雑報に売れ行き好調という記事が掲載される
- 1889 (明治 22) 森長三郎筑前藤崎に高取焼を再興す (陶器大辞典 1936)
- 1892 (明治 25) この頃、三井郡国分村 (久留米市) 日渡で、水田焼の近藤某が日渡焼を開窯する
- 1897 (明治 30) この頃、遠賀郡折尾村 (北九州市八幡西区折尾) で折尾窯が創業される
- 1899 (明治 32) 福岡市西新町の西皿山窯で高取英一が製品を作り、鳥飼に森長三郎の高取再興窯が設置される
※この頃に三井郡合川村 (久留米市合川町) 十三部で十三部焼創業
- 1902 (明治 35) この頃に、須恵焼が完全に廃窯となる
- 1906 (明治 39) 筑後二川焼について、角熊五郎が窯を引き継いで経営する
- 1911 (明治 44) 「福岡県の鷺谷焼興る」「筑後の柳河焼廃絶」 (陶器大辞典 1936)

論文等

執筆者	論文名	刊行年	書籍名・雑誌名	発行元
貝原益軒	筑前国統風土記	1710		
	近国焼物山大概書上帳	1796	上田家文書	
加藤一純、鷹取周成	筑前国統風土記附録 下巻	1798		
伊藤常足	太宰管内志	1841		
青柳種信ほか	筑前国統風土記拾遺	1857		
秋月古文書講読会	望春随筆	1996.11	秋月郷土館資料集二「望春随筆」	筑前秋月秋酔倶楽部
秋吉満	筑南の古窯	1972. 7	筑南の古蹟をたずねて	久留米郷土研究会
浅野陽吉	坂東寺焼、水田焼、蒲池焼	1934.10	郷土研究 筑後 2-10	
浅野陽吉	蒲池焼星野焼及本星野焼	1934.12	郷土研究 筑後 2-12	
浅野陽吉		1935.9	筑後陶器考	金文堂
浅野陽吉	筑後諸窯	1938.9	九州陶磁	寶雲舎
浅野陽吉	増補筑後陶器考	1978.10		鶴久二郎
アンディー・マスキ	東血山窯物原の試験的な調査	1994.12	博多研究会誌 第3号	博多研究会
池田史郎編	血山代官日記覚書	1966.7		金華堂
石沢誠司	特論：土人形	1984.12	講座・日本技術の社会史 第4巻 窯業	日本評論社
井上園蔵		1943. 3	豊前上野焼研究	窯藝美術陶磁文化研究所
上村佳典	愛宕遺跡菜園場窯	1984.5	陶説 374 [特集 初期上野・高取]	日本陶磁協会
上村佳典	愛宕遺跡 菜園場窯	1985.10	閉館十周年記念特別展 小倉藩創始 細川家の歴史展	北九州市立歴史博物館
上村佳典	菜園場窯跡	1987.10	まぼろしの美 古上野焼展 図録	福岡県立美術館
魚里洋一、植野かおり編		2009. 1	特別展 柳川・立花家の至宝 図録	
梅崎次義		1924	久留米市編入当時の国分町	福岡県立美術館
相賀徹夫			世界陶磁全集7 江戸(二)	小学館
大橋康二	肥前陶磁生産技術の地方窯への伝播	2010.3	東洋陶磁 第39号	東洋陶磁学会
大橋康二	わが国の窯業における生産技術の展開	2005.1	窯構造・窯道具からみた窯業-関西窯場の技術的系譜をさぐる-	関西陶磁史研究会
大橋康二		1989.10	考古学ライブラリー 肥前陶磁	ニュー・サイエンス社
大橋康二		1992.10	福岡の陶磁 平成4年度特別企画展 図録	佐賀県立九州陶磁文化館
岡茂政	楠田ノ貝塚及焼ヶ焼窯址調査	1929. 3	福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第4輯	福岡県
岡茂政			柳川史話【全】	柳川郷土研究会
岡崎林平	上野古窯発掘調査	1955.10	郷土田川 6号 臨時増刊	郷土田川研究会
岡田宗叔	高取焼窯跡をたずねるの記	1984.5	陶説 374 [特集 初期上野・高取]	日本陶磁協会
奥村次八郎	筑前黒田藩の高取焼(一)	1936.7	福岡 No.62	東西文化社
奥村武	筑前黒田藩窯高取焼窯の移動と変遷について	1979.6	大塚薬報 No.322	
尾崎直人	筑前黒田藩御用窯 高取焼	1987.7	西日本文化 233	西日本文化協会
尾崎直人	筑前高取焼の研究	2013. 3	福岡市美術館叢書 3	福岡市美術館
小野賢一郎編	陶器大辞典	1934		
小畑弘己	(補説)アンディー・マスキ氏採集遺物について	1994.12	博多研究会誌 第3号	博多研究会
加藤唐九郎編		1972.10	原色陶器大辞典	納屋嘉治
金森得水著、堀田松三郎校訂		1943	本朝陶器図説	
金子文夫	筑後陶器考と陶器器考	1955.12	筑後史学 第3号	筑後史学会
金子雨石	田香の系譜	1958. 4	郷土田川 No.13	郷土田川研究会
香春町郷土史会	郷土誌かわら 第44集	1996. 7		香春町教育委員会
香春町郷土史会	郷土誌かわら 第56集	2003. 3		香春町教育委員会
九州歴史資料館		1999	福岡のやきもの～豊前田香焼～	
久保利之ほか	上野古窯発掘日記	1955. 7	陶説 28	日本陶磁協会
久保智康	越前における近世瓦生産の開始について～武生市小丸城跡出土瓦の検討～	1989.	福井県立博物館紀要 第3号	福井県立博物館
久保智康	屋根瓦の普及と煉瓦の登場	1990. 9	文明開化の光と影-福井県/その誕生期- 図録	福井県立博物館
久保智康	近世後期南加賀における赤瓦の生産	1992. 8	福井考古学会会誌 第10号	
熊谷紅陽	上野古窯跡発掘を終えて	1955.10	郷土田川 6号 臨時増刊	郷土田川研究会
熊澤治郎吉編		1929. 8	工学博士北村彌一郎窯業全集 第三巻	社団法人大日本窯業協会
黒瀬真頼、前田泰次校注		1974.6	東洋文庫 254 増訂工芸志料	平凡社
好陶会 編		1918.11	陶寄	好陶会
鴻江敏雄	古上野の壺型徳利	1974. 6	製鐵文化 第125号	新日本製鐵株式会社 八幡製鐵所
高鶴元		1973.3	陶片に聞く	
高鶴元		1990.11	日本陶磁大系 第15巻 上野 高取 八代 小代	平凡社
古賀幸雄	瓦師久兵衛(瀬下通町目附)	1975.9	久留米藩旧家由緒書	久留米郷土研究会
古賀幸雄、田中茂男		1979.10	久留米藩土器司田中家資料	田中定
小林省吾	豊前国焼上野焼の発祥とその背景	2006.11	県史だより 第124号	福岡県地域史研究所
境忠二郎	英彦山土鈴	1958. 4	郷土田川 No.13	郷土田川研究会
佐々木達夫	磁器生産の開始	1984.12	講座・日本技術の社会史 第4巻 窯業	日本評論社
佐々木四十臣	星野焼 ～その歴史と価値～	2006.12	地方史ふくおか 132	
佐藤浩司	小倉名物三官船とその容器について	2000.3	研究紀要 第14号	朝北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
佐藤浩司	消費地出土の田香焼について	2002. 3	研究紀要 第16号	朝北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
佐藤浩司	小倉名物三官船の生産と流通	2011.3	江戸時代の名産品と商標 江戸遺跡研究会編	吉川弘文館
佐藤進三	上野焼古窯発掘調査について	1955. 7	陶説 28	日本陶磁協会
佐藤進三	上野焼古窯発掘調査について	1955.10	郷土田川 6号 臨時増刊	郷土田川研究会
佐藤進三	上野焼古窯調査と顔末と発掘日記	1955.12	上野古窯調査報告書 陶器7	日本陶磁協会
佐藤進三		1961.11	陶器全集 第21巻 萩・上野・高取・薩摩	平凡社
塩田力蔵	日本近世窯業史第三編陶磁器工業	1991.4	日本窯業史総説 第五巻 日本近世窯業史復刻版	柏書房株式会社
塩田力蔵	日本陶工傳(九)	1938.2	陶器講座 第23巻	
浪田 喬	近代化に期けた人間模様—古賀の里の起業人と受け継がれる文化—	2009. 8	福岡地方史研究 47	福岡地方史研究会
嶋田光一	高取焼初代八山の墓跡	1997.11	歴史のさんぽみち 第7回 市報いづか	飯塚市歴史資料館
嶋田光一	高取焼白旗山古窯跡の調査	1992.10	福岡の陶磁 平成4年度特別企画展 図録	佐賀県立九州陶磁文化館
嶋田光一	高取焼白旗山古窯跡の調査	2001. 3	東洋陶磁 第30号	東洋陶磁学会
関工省編纂		1931. 9	全国工場通覧	日本工業新聞社
関口広次	高取山田窯址採集陶片分類・実測図	1989.3	桃山の茶陶	(財)根津美術館
副島邦弘	古高取 内ヶ磯窯跡の発掘調査	1981. 3	陶説 336 [大名茶陶展特集]	日本陶磁協会
副島邦弘	高取 内ヶ磯窯の発掘	1982. 2	日本やきもの集 12 九州 II 沖繩	平凡社

執筆者	論文名	刊行年	書籍名・雑誌名	発行元
副島邦弘	飯塚市幸袋高取家墓所出土の遺物について	1982.3	内ヶ磯窯跡(直方市文化財調査報告書 第4集)	直方市教育委員会
副島邦弘	古高取永満寺宅間窯の発掘調査	1984.5	陶説 374 [特集 初期上野・高取]	日本陶磁協会
副島邦弘	まぼろしの筑前秋月窯をさがして	1985.12	陶説 393	日本陶磁協会
副島邦弘	高取焼の系譜	1986.3	地方史ふくおか 54	
副島邦弘	北部九州における近世古窯跡の研究―福岡県鞍手郡若宮町犬鳴所在犬鳴焼窯跡について―	1987.11	「東アジアの考古と歴史 下」 岡崎敬先生退官記念論集	同朋舎
副島邦弘	ある発掘調査から	1988.4	陶説 421	日本陶磁協会
副島邦弘	高取系犬鳴窯址について	1989.7	陶説 436	日本陶磁協会
副島邦弘	北部九州における近世窯跡の研究―筑前高取焼を中心として―	1990.11	乙益重孝先生古稀記念 九州上代文化論集	乙益重孝先生古稀記念論文集刊行会
副島邦弘	福岡県	1997.3	国立歴史民俗博物館研究報告 第73集 近世窯業遺跡データ集成	国立歴史民俗博物館
副島邦弘	北部九州における近世古窯跡の研究―筑前国鞍手郡山口村(現鞍手郡若宮町)浅ヶ谷窯跡について―	1999.3	九州歴史資料館研究論集 24	九州歴史資料館
副島邦弘	北部九州における近世古窯跡の研究―磁器への道(福岡県の場合)―	2000.3	九州歴史資料館研究論集 25	九州歴史資料館
副島邦弘	古高取宅間・内ヶ磯窯跡について	2001.3	東洋陶磁 第30号	東洋陶磁学会
副島邦弘	福岡県近世古窯跡研究の流れ	2007.1	高取焼開窯400年祭記念誌	高取焼開窯400年祭実行委員会
副島邦弘	筑後の近世の焼物を考える	2011.9	福岡地方史研究 49	福岡地方史研究会
副島邦弘	北部九州における近世古窯跡の研究―筑前秋月藩窯について―	1983.7	麻生優編『人間・遺跡・遺物 -わが考古学論集 1-』	文献出版
大日本窯業協会		1902.4?	第一回全国窯業品共進会報告	大日本窯業協会
高木誠一	田香焼の系譜と子孫	1983.11	郷土文化誌 おおとう 第3集	
高取静山編	『高取家文書』	1979.1	高取家文書	雄山閣
高山慶太郎	筑前須恵焼の歴史	1991.6	ふるさと自然と歴史 227	
高山慶太郎	筑前の磁器「須恵焼」―基礎資料による年表―	1992.1	福岡県地域史研究 第10号	福岡県
田崎博之 二宮忠司	能古焼の古窯跡調査	1992.10	福岡の陶磁 平成4年度特別企画展 図録	佐賀県立九州陶磁文化館
筑後郷土史研究会		1957.11	水田村郷土史	筑後郷土史研究会
筑紫豊、笠文七監修	福岡市南区 伝説・由来・遺跡	1980.12	福岡市南区 伝説・由来・遺跡	「南区民の祭り」運営委員会
筑紫頼定	高取焼その他	1938.9	九州陶磁	寶雲舎
堤昭南	幻の土器田川焼窯跡	1982.3	三瀧路今昔	三瀧町文化財専門委員会・三瀧町郷土研究会
柄内禮次		1936.3	古高取山田窯	
刀根為次郎		1914.8	北九州の名物 芦屋の浜	
永尾正剛、有川宣博、税田昭徳 編		2000.3	豊国名所 付 六郷名所記	北九州市立歴史博物館
永尾正剛	細川菜園場窯の史的考察	1990.8	近世近代史論集	吉川弘文館
永尾正剛	細川菜園場窯と上野焼陶工	2001.3	東洋陶磁 第30号	東洋陶磁学会
永尾正剛	豊前上野焼および菜園場窯に関する編年史料	2002.3	研究紀要 10	北九州市立歴史博物館
中ノ堂一伸	近代窯業の展開	1984.12	講座・日本技術の社会史 第4巻 窯業	日本評論社
中山平次郎	高取焼最古の二窯址と其遺物 附、筑前鞍手郡勝野村赤地発見の古陶器	1915.2	考古学雑誌 5-6	
中山平次郎	筑前国犬鳴谷に於ける高原五郎七の製陶所址	1915.4	考古学雑誌 5-8	
中山平次郎	筑前国嘉穂郡白旗山麓の高取焼窯址	1915.6	考古学雑誌 5-10	
西日本新聞社		1982.11	福岡県百科事典	西日本新聞社
農商務省商工局工務課		1904.3	工場通覧	
乗富勝洋	二川焼について	1959.11	郷土研究 Vol.7	福岡県立伝習館高校郷土研究部
野上建紀	肥前の窯業技術の伝播について	2005.1	窯構造・窯道具からみた窯業-関西窯場の技術的系譜をさぐる-	関西陶磁史研究会
原寛	市指定史跡 能古焼古窯	2006.10	能古博物館だより 号外	能古博物館
広津友一郎	年貢について	1981.11	郷土誌さいがわ 創刊号	厚川町郷土史研究会
福岡市観光課		1973	福岡市の史話と観光 はかた	
藤丸三雄	三橋町の製瓦業について		故郷の文化に希望を	三橋町教育委員会
藤原友子	二川焼とよばれるのはなぜ?	2018.10	古武雄	九州陶磁文化館
豊前市人権センター	明治二年 巳年諸願書控	2010.3	友枝文書史料集(一)商業	豊前市人権センター・庶民史研究会
船木長造	高取焼と博多人形に就いて	1932.10	大日本窯業協会雑誌 41巻490号	大日本窯業協会
文化庁文化財部	新指定の文化財 無形文化財	2017.9	月刊文化財648	
星野半陶子	田川の陶業―現況と課題―	1958.4	郷土田川 No.13	郷土田川研究会
丸山雍成	史跡・能古島古窯跡	1990.5	能古博物館だより 第4号	能古博物館
丸山雍成	能古島古窯をめぐる問題	1990.7	能古博物館だより 第5号	能古博物館
丸山雍成	能古島古窯をめぐる問題(続)	1990.10	能古博物館だより 第6号	能古博物館
三上次男	上野釜の口の古窯	1955.7	陶説 28	日本陶磁協会
三上次男	上野釜の口の古窯	1955.10	郷土田川 6号 臨時増刊	郷土田川研究会
三上次男	上野釜の口の古窯	1955.12	陶説 33 上野古窯調査報告	日本陶磁協会
三上次男	釜の口窯について	1955.12	上野古窯調査報告書 陶窯 7	日本陶磁協会
右田乙次郎		1957.11	水田村郷土史	筑後郷土史研究会
右田乙次郎		1973.9	水田の半田土鍋焼	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
右田乙次郎	三原家と赤坂焼(筑後赤坂焼)	1977.8		筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
三島格・村松正一		1966	須恵器の窯址・小代焼と二川焼	三井三池開発株式会社
水谷良一	九州の民窯 二川の陶業	1933	工藝33号	
水原道範	朝妻焼の古窯跡調査	1992.10	福岡の陶磁 平成4年度特別企画展 図録	佐賀県立九州陶磁文化館
美和弥之助	筑前上畑古窯考	1939.7	やきもの趣味	
美和弥之助		1942.8	茶会記に現れたる上野焼	窯芸美術陶磁文化研究所
美和弥之助	小笠原公時代の上野焼	1958.4	郷土田川 No.13	郷土田川研究会
美和弥之助、船木顕司		1975.2	カラー日本のやきもの5 上野 高取 小石原 小鹿田	淡交社
毛利茂樹	上野・高取の系譜	1984.5	陶説 374 [特集 初期上野・高取]	日本陶磁協会
森谷尅久	近世陶磁生産の発展	1984.12	講座・日本技術の社会史 第4巻 窯業	日本評論社
山下啓之	福岡藩磁器御用窯 須恵器の盛衰	2016.10	西日本文化 480	西日本文化協会
山村信榮	博多出土の素焼人形―近世末の博多に於ける一手工業の研究 I -	1988.1	九州考古学 第62号	九州考古学会
山村信榮	筑前野間焼について	1992.3	『大町遺跡』 西日本鉄道株式会社太宰府駅駅舎改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書〔太宰府市の文化財第18集〕	太宰府市教育委員会

執筆者	論文名	刊行年	書籍名・雑誌名	発行元
雄山閣編集部		1979	陶磁用語辞典	雄山閣
横河民輔	日本諸國窯一覽	1935.12	陶器講座 第7巻	雄山閣
横山群	上野焼への期待	1955.10	郷土田川 6号 臨時増刊	郷土田川研究会
横山群	田川古窯跡について	1958. 4	郷土田川 No.13	郷土田川研究会
米山公子	初期上野焼菜園場窯についての一考察	1998.11	嘉飯山郷土研究会会誌 第12号	嘉飯山郷土研究会
渡辺村男	第9章 生業 第2節 工業	1914	旧柳川藩志	山門郡教育会
渡辺村男	第10章 生産物 第2節 重要生産物	1914	旧柳川藩志	山門郡教育会
渡辺村男	第18章 人物 家永彦三郎	1914	旧柳川藩志	山門郡教育会
渡久兵衛(話し手)	上野焼の復興と渡久兵衛の歩み	2006.11	県史だより 第124号	福岡県地域史研究所
		2017.3	豊前小倉藩窯上野焼展 図録	福智町
	能古焼諸資料紹介と解説	1992.10	能古博物館だより 第14号	能古博物館

県史・市町村市史

執筆・編集者	文献名	刊行年	書籍名・雑誌名	発行元
尾崎直人	四 陶磁	1994. 3	福岡県史 通史編 福岡藩文化(下)	福岡県
西田宏子	福岡県の歴史における高取焼	1992. 3	福岡県史 文化史料編 筑前高取焼	福岡県
尾崎直人	高取焼研究簡史	1992. 3	福岡県史 文化史料編 筑前高取焼	福岡県
春日市史編さん委員会	春日市史 下巻	1994. 3		春日市
力武卓治	藤崎遺跡第35次調査	2016. 3	新修福岡市史資料編考古1	福岡市
菅波正人	能古焼窯跡	2016. 3	新修福岡市史資料編考古1	福岡市
高山慶太郎 須恵町誌編集委員会	筑前の磁器“須恵焼”	1983. 3	須恵町誌	須恵町役場
村上敦	二丈町誌(平成版)	2005.11		二丈町
糸島郡教育会	糸島郡誌	1972. 9	糸島郡誌	株式会社名著出版
伊藤尾四郎	宗像郡誌 上巻	1944.6	宗像郡誌 上巻	株式会社名著出版
福岡市南区民俗文化財保存会	南区ふるさと	1992.10		
博多人形沿革史編集委員会	博多人形沿革史	2013. 3		博多人形商工業協同組合
津屋崎町史編さん委員会	津屋崎町史 通史編	1999. 3		津屋崎町
粕屋町町誌編集委員会	粕屋町誌	1992. 3		粕屋町
岡垣町史編集委員会	岡垣町史	1988. 3		岡垣町
岡垣町教育委員会	図録岡垣町の文化財 I	1996. 3		岡垣町教育委員会
遠賀郡教育会	遠賀郡誌	1917. 9		株式会社臨川書店1986.6復刻
遠賀郡誌復刊行会	増補改訂 遠賀郡誌	1961. 8		遠賀郡誌復刊行会
遠賀町史編集委員会	遠賀町誌	1986. 3		遠賀町
直方市史編さん委員会	直方市史 上巻	1971. 8		福岡県直方市
柴村一重編	直方市史 資料編 上巻-史料による直方のあゆみ-	1983. 3	10 高取焼の歴史と内ヶ磯窯跡	直方市役所
副島邦弘 若宮町誌編さん委員会	第八章 若宮の近世陶磁器の生産	2005. 3	若宮町誌上巻	若宮町
鞍手町誌編集委員会	鞍手町誌 上巻	1974. 9		福岡県鞍手町
鞍手町誌編集委員会	鞍手町誌 下巻	1980.12		福岡県鞍手町
北九州市教育委員会文化部保護管理課	北九州市の文化財	1999. 3		北九州市教育委員会
久留米市役所	久留米市誌 中編	1933. 1		久留米市役所
久留米市役所	久留米市誌 下編	1932.12		久留米市役所
久留米市史編さん委員会	久留米市史 第2巻	1982.11		久留米市
久留米市史編さん委員会	久留米市史 第3巻	1985. 3		久留米市
久留米市史編さん委員会	久留米市史 第12巻	1996. 3		久留米市
久留米市史編さん委員会	久留米市史 第13巻	1996. 3		久留米市
浮羽町史編集委員会	浮羽町史 上巻	1988. 3		浮羽町
浮羽町史編集委員会	浮羽町史 下巻	1988. 3		浮羽町
浮羽郡誌刊行会	浮羽郡誌	1966. 1		浮羽郡誌刊行会
御井小学校開校百周年記念事業特別委員会町誌部	御井町誌	1986. 2		御井小学校父母教師会
三瀬郡役所	福岡縣三瀬郡誌	1925		三瀬郡役所
城島町誌編集委員会	城島町誌	1998. 3		城島町
吹春茂 立花町史編さん委員会	立花町史 上巻	1996. 3		立花町
佐々木四十臣 星野村史編さん委員会	星野村史 産業編	1998. 3		星野村
江頭亨	郷土史物語	1968.11		
黒木町史編さん実務委員会	黒木町史	1993.11		黒木町
八女郡役所	稿本 八女郡史 増補	1917.10	星野・釈形・今村・男ノ子・鹿子生・赤坂・坂東寺	
筑後市史編さん委員会	筑後市史 第一巻	1997. 9		筑後市
田淵義樹	柳川市史 別編 新柳川明証図会	2002. 9		柳川市
柳川市教育委員会編	柳川の文化財	1978. 5		柳川市教育委員会
植野かおり 柳川市史編さん委員会編	第2章 社寺の美術 6 蒲池焼	2005. 2	『柳川の美術 I』柳川文化資料集 第3集	柳川市
植野かおり 柳川市史編さん委員会編	第3章 柳河藩主時代の美術 第5項 藩窯一蒲池焼一	2007. 3	『柳川の美術 II』柳川文化資料集 第3集-2	柳川市
服部英雄・白石直樹編	蒲池地区 南本村・北本村 しこな	2002. 3	『柳川地名調査報告書』柳川歴史資料集 第5集	柳川市
鈴木寛之 柳川市史編さん委員会編	東宮永地区 第2章 なりわい 第2節 諸職 瓦作り	2004. 3	『柳川の民俗概観』柳川歴史資料集 第6集	柳川市
鈴木寛之 柳川市史編さん委員会編	第1編 大和町・三橋町の民俗概観 大和町・三橋町のなりわいとくらし 3 諸職(1) 瓦業	2012. 3	『柳川の民俗概観 II』柳川歴史資料集 第7集	柳川市
大和町史編さん実務委員会編	第5編 近現代 第2章 産業の発達 第3節 工業 3 矢部川・塩塚川沿岸の瓦焼き	2001. 3	大和町史 通史編 上巻	大和町
三瀬町史編さん委員会	三瀬町史	1985. 9		三瀬町史刊行委員会
みやま市史編さん事務局	みやま市史 通史編 下巻	2020. 3		みやま市 みやま市教育委員会
龍富太郎・永井新編	高田町誌	1958.10		福岡県三池郡高田町
三池郡教育会	三池郡誌 全	1926. 6		株式会社名著出版 1986.9復刻(臨川書店)
福岡県山門郡教育会	山門郡誌	1974. 4		株式会社名著出版
大川史誌編集委員会	大川市誌	1977.12		福岡県大川市役所
大牟田市史編さん委員会	大牟田市史 上巻	1965. 3		大牟田市役所
内野喜代治編	三池地方誌	1936.10		
西山吉之助ほか	高田町の文化財	1992.3		高田町教育委員会

執筆者	論文名	刊行年	書籍名・雑誌名	発行元
上野 馨	山田の遺跡 文化財	1982.1		
飯塚市史編さん室	飯塚市誌	1975.8		福岡県飯塚市 飯塚市役所総務部庶務課
	地図と絵で見る飯塚地方誌	1975.2		元野木書店
二瀬町誌編さん委員会	二瀬町誌	1963.3		町長 三浦末松
幸袋町編集委員会	幸袋町誌	1963.3		幸袋町編集委員会
松岡治郎編	山田町誌	1953.2		山田町誌編集委員会
山田市誌編さん委員会	山田市誌	1986.3		山田市
貞包博幸	第7編 美術・建築編 第2節 田香焼	2001.3	香春町史 下巻	香春町編集委員会
和田泰光	上野村史	1930.5		筑豊之實業社
赤池町史編集委員会	赤池町史	1977.11		赤池町
方城町史編集委員会	方城町史	1966.5		方城町
添田町史編集委員会	添田町史 上巻	1992.3		添田町
稲築町誌編集委員会	稲築町誌	1959.3		稲築町
稲築町誌編集委員会	稲築町誌	1973.3		稲築町
嶋田光一	第1章第3節 高取焼	2016.3	飯塚市史中巻	飯塚市
大任町誌編集委員会	大任町誌	1970.5		大任町
大任町誌編集委員会	大任町誌 ふるさと大任 上巻	2004.3		田川郡大任町
嘉穂郡役所	嘉穂郡誌 全	1972.7		株式会社名著出版
小竹町史編さん委員会	小竹町史	1985.3		小竹町
豊津町誌編集委員会	豊津町誌	1983.3		豊津町
豊津町史編集委員会	豊津町史(下)	1997.4		豊津町
大平村誌編集委員会	大平村誌	1986.3		大平村
築上郡史編集委員	築上郡史 下巻	1956.7		福岡県築上郡・豊前市教育振興会

県内調査報告書等

執筆・編集者	文献名	刊行年	副題	シリーズ名
福岡県	福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第4輯	1929.3	「楠ノ貝塚及焼ヶ懐焼址調査」	
福岡県教育委員会	大鳴Ⅱ	1991.3	福岡県鞍手郡若宮町犬鳴区の調査	福岡県文化財調査報告書第94集
福岡県教育委員会	上唐原福本屋敷遺跡	1997.3	福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査	一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告1
福岡県教育委員会	百留居屋敷遺跡	1999.3	福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査	一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告3
福岡県教育委員会	内ヶ磯窯跡 1	2001.3	福智山ダム建設に伴う福岡県直方市大字頓野所在近世窯跡の調査	福岡県文化財調査報告書第163集
福岡県教育委員会	内ヶ磯窯跡 2	2002.3	福智山ダム建設に伴う福岡県直方市大字頓野所在近世窯跡の調査	福岡県文化財調査報告書第170集
福岡県教育委員会	内ヶ磯窯跡 3	2003.3	福智山ダム建設に伴う福岡県直方市大字頓野所在近世窯跡の調査	福岡県文化財調査報告書第181集
福岡県教育委員会	秋月街道	2004.3	歴史の道調査報告書 第2集	福岡県文化財調査報告書第195集
福岡市教育委員会	能古島	1993.3	能古島遺跡発掘事前総合調査報告書	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第354集
福岡市教育委員会	福岡市埋蔵文化財年報 vol.3 1988年度	1990.3		福岡市埋蔵文化財年報 vol.3 1988年度
福岡市教育委員会	福岡市埋蔵文化財年報 Vol.32 2017年度版	2018.3		福岡市埋蔵文化財年報 Vol.32 2017年度版
福岡市教育委員会	藤崎遺跡 17	2006.12	藤崎遺跡第35次調査報告書	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第916集
福岡市教育委員会	福岡市文化財分布地図(西部Ⅰ)	1994.3		
福岡市教育委員会	福岡市文化財分布地図(西部Ⅲ)	1984.3		
須恵町立歴史民俗資料館	須恵町の磁器 須恵焼	1981.10		
須恵町立美術センター久我記念館	筑前の磁器 須恵焼 資料集 2003	2003.10		
須恵町教育委員会	福岡藩磁器御用窯跡Ⅰ	2010.3	福岡県糟屋郡須恵町大字上須恵所在遺跡の調査	須恵町文化財調査報告書第10集
須恵町教育委員会	須恵町文化財分布地図	2009.3		須恵町文化財調査報告書第9集
太宰府市教育委員会	大町遺跡	1992.3	西日本鉄道株式会社太宰府駅駅舎改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	太宰府市の文化財第18集
北九州市埋文調査室	愛宕遺跡 1	1985.3		北九州市埋蔵文化財調査報告書 第40集
北九州市教育委員会	北九州市の文化財	1999.3		
北九州市教育委員会	北九州市埋蔵文化財分布地図	1998.3	小倉北区・門司区・離島	
直方市教育委員会	内ヶ磯窯跡Ⅰ	1980.3		直方市文化財調査報告書第2集
直方市教育委員会	内ヶ磯窯跡Ⅱ	1981.3		直方市文化財調査報告書第3集
直方市教育委員会	内ヶ磯窯跡	1982.3	福岡県直方市大字頓野字二ノ瀬所在近世陶器窯跡発掘調査報告書	直方市文化財調査報告書第4集
直方市教育委員会	永満寺宅間窯跡	1983.3	福岡県直方市大字永満寺宅間所在近世陶器窯跡発掘調査報告書	直方市文化財調査報告書第5集
直方市教育委員会	直方市内遺跡群詳細分布調査報告書	1995.3		直方市文化財調査報告書第19集
宮田町教育委員会	千石窯跡	1995.3	福岡県鞍手郡宮田町千石所在遺跡の調査	宮田町文化財調査報告書第5集
岡垣町教育委員会	岡垣町遺跡等詳細分布調査報告書	1994.3		岡垣町文化財調査報告書第16集
甘木市教育委員会	筑前秋月城跡	1983.3	福岡県甘木市秋月町野島梅園所在近世城郭跡調査概要	甘木市文化財調査報告書第15集
甘木市教育委員会	甘木市の文化財	1996.3		
小石原村教育委員会	中野上の原古窯跡	1988.3		小石原村文化財調査報告書第1集
小石原村教育委員会	中野火口谷1号古窯跡	1989.3		小石原村文化財調査報告書第2集
小石原村教育委員会	中野上の原古窯跡	1990.11		小石原村文化財調査報告書 第3集
小石原村教育委員会	一本杉1号古窯跡・金敷様裏3号古窯跡	1993.3		小石原村文化財調査報告書第4集
小石原村教育委員会	鼓釜床1号古窯跡	1994.3		小石原村文化財調査報告書 第5集
東峰村教育委員会	火口谷古窯跡	2014.3		東峰村文化財調査報告書第4集
東峰村教育委員会	東峰村内遺跡等分布地図	2013.3		東峰村文化財調査報告書第3集
うきは市教育委員会	うきは市遺跡群詳細分布調査報告書	2010.3		うきは市文化財調査報告書第10集
久留米市教育委員会	東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告 第1集	1981.3		久留米市文化財調査報告書第29集
久留米市教育委員会	久留米城下町 両替町遺跡	1996.3		久留米市文化財調査報告書第116集
久留米市教育委員会	平成10年度久留米市内遺跡群	1999.3		久留米市文化財調査報告書第150集
久留米市教育委員会	平成27年度久留米市内遺跡群	2016.3		久留米市文化財調査報告書第368集
久留米市教育委員会	東野亭焼窯跡	2019.3		久留米市文化財調査報告書第404集
公益財団法人財建造物保存技術協会	重要文化財善道寺大庫裏他六棟保存修理工事報告書	2011.3	大庫裏7・釜屋・本堂編	
黒木町教育委員会	城ノ原遺跡	1995.3	福岡県八女郡黒木町所在遺跡の発掘調査報告書	黒木町文化財調査報告書第2集
星野村教育委員会	十籠星野小学校遺跡	1994.3	福岡県八女郡星野村所在遺跡の発掘調査報告書	星野村文化財調査報告書第2集

執筆者	論文名	刊行年	書籍名・雑誌名	発行元
立花町教育委員会	北山小学校遺跡	1993.3	福岡県八女郡立花町所在遺跡の調査報告	立花町文化財調査報告書第5集
みやま市教育委員会	みやま市内遺跡等分布地図	2015.3		みやま市文化財調査報告書第10集
筑後市教育委員会 筑後郷土史研究会	水田の半田土鍋焼	1973.9		
筑後市教育委員会 筑後郷土史研究会	筑後市神社仏閣調査書 坂東寺篇	1974.3		筑後市神社仏閣調査書第4集
筑後市教育委員会 筑後郷土史研究会	三原家と赤坂焼〔筑後赤坂焼〕	1977.8		筑後市むらの生いたちの記第4集
大牟田市教育委員会	大牟田市遺跡等分布地図	2007.3		大牟田市文化財調査報告書第59集
名勝松濤園修理事業委員会	名勝松濤園内御居間他修理工事報告書	2007.3	〔第1編修理工事 第3章調査・発見物 2.瓦刻印 第2編資料 第3章発見物・墨書等 墨書等9・10〕	
飯塚市教育委員会	遠州高取 白旗山窯跡	1992.3	福岡県飯塚市大字中野間所在近世陶器窯跡発掘調査報告書	飯塚市文化財調査報告書第16集
飯塚市教育委員会	飯塚市内遺跡詳細分布調査報告書	1997.3		飯塚市文化財調査報告書第24集
嘉麻市教育委員会	嘉麻市文化財等分布地図	2012.3		嘉麻市文化財調査報告書第4集
香春町教育委員会	香春町文化財等分布地図	2001.3		香春町文化財調査報告書第12集
大任町教育委員会	田香焼窯跡	1998.3	福岡県田川郡大任町大字今任原所在の上野系窯跡の調査	大任町文化財調査報告書第6集
九州歴史資料館	福岡のやきもの～豊前田香焼～	1999.1		
福智町	豊前小倉藩窯 上野焼展	2017.3		
犀川町教育委員会	城井遺跡群	1992.3		犀川町文化財調査報告書第3集
豊津町教育委員会	豊津町内遺跡等分布地図	2001.3		豊津町文化財調査報告書第25集
犀川町教育委員会	犀川町内遺跡等分布地図	2003.3		犀川町文化財調査報告書第8集
みやこ町教育委員会	みやこ町内遺跡等分布地図	2010.3		みやこ町文化財調査報告書第6集
豊前市教育委員会	大村天神林遺跡	2009.3	県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書13	豊前市文化財報告書第26集
豊前市教育委員会	吉木穴井遺跡	2003.3	都市計画道路県道犀川豊前線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	豊前市文化財報告書第17集
大平村教育委員会	大平村の文化財	1975.3		福岡県築上郡大平村教育委員会

報告書抄録

ふりがな	ふくおかけんのきんせいようぎょうかんけいいせき							
書名	福岡県の近世窯業関係遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第284集							
編著者名	坂本真一（編集）伊崎俊秋 遠藤啓介 岸本圭 酒井芳司							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7番7号 Tel.092-651-1111							
発刊年月日	令和6（2024）年3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
福岡県内各市町村に所在する近世の窯業関係遺跡	ふくおかけんないしちょうそん 福岡県内市町村					2020.9.24 ～ 2024.3.31		福岡県近世窯業関係遺跡調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福岡県内各市町村に所在する近世の窯業関係遺跡	窯業関係遺跡	江戸時代	窯業に関わる窯跡					
要約	福岡県内に所在する江戸時代の窯業に関わる窯跡とそれに関する生産、埋葬などの関係遺跡について、悉皆調査を行い、106件の窯跡について確認した。							

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2120253
登録年度 5	登録番号 0002

福岡県の近世窯業関係遺跡

福岡県文化財調査報告書第284集

令和6年3月31日

発行 福岡県教育委員会
〒812-8575
福岡県福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社 四ヶ所
〒838-8512
福岡県朝倉市馬田336